

---

# それすらもまた、平穩なる日々

羽沢 将吾

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

それすらもまた、平穏なる日々

### 【Nコード】

N9270C

### 【作者名】

羽沢 将吾

### 【あらすじ】

シヨウと遙、ドタバタカップル再降臨！亜由美も亜里沙も沙里も香奈も元気ですっ！御好評頂いた「それすらもただ平穏なる日々」続編いよいよ公開！パワーアップしてお届けする学園ラブコメ、とくにお楽しみ下さい！

## 訳有？（前書き）

読者の皆様からのありがたいお言葉を受け、シヨウと遙が還って来ました。

すっかりラブラブな二人ですが、様々な出来事に巻き込まれてドタバタあたふたして行きます。果たしてどんなドラマが有るのか！？それはまだ禁則事項です（笑）  
それでは、お楽しみ頂ける様頑張りますので、最後までお付き合いの程お願い致します。

2007 / 10 / 27 羽沢 将吾

訳有？

ジリリリリリリ！

目覚ましがなつてやがる。うぜえ…

俺が目覚ましを止める為に起きようとすると、勝手に目覚ましが止まった。

「ねえ、シヨウ。起きて」  
ちゅっ

…！  
俺がガバツと体を起こす。

「きゃっ！脅かさないでよお」  
横にはビツクリした顔で大きな瞳をくるくるとさせている遥が寝ていた。

そっか、昨夜は遥が泊まったんだっけな…  
時計を見ると、午前五時。

「…おはよう、遥」  
とりあえず朝の挨拶をする俺。

「おはよ、シヨウ」  
につこりと微笑む遥。

身震いするほど可愛い。

俺は遥を抱き締めながらキスをした。

「あん…」  
遥が可愛い声声を上げながら瞳を閉じる。  
しばらくキスをしたままになる俺達。

ジリリリリリリ…！

「おわっ！」

「きゃん！」

再び鳴り始めた目覚ましに俺達は飛び上がるほど驚いた。

俺と遥の初めての夜から二ヶ月が過ぎ、すっかり俺達はラブラブとなっていた。

ただ、亜由美や芳野先輩、その他のみんなの手前、学校では今まで通りの幼馴染となっている。

それに関してはいずれ決着を付けていかなければならないが、今の所は小康状態。

まあ、早い話がごく普通の日常を謳歌している。

悩みと言え、遥に対する沙里の反発が想像以上に強く、

最近は沙里がほとんど遥と口をきかなくなってしまった事。

俺がなだめようとしても、この事だけは聞く耳を持たない。

家族思いの遥は口にこそ出さないものの相当悩んでいる事は間違いない。

俺が原因なのだから、近い内に何とかしなければな…

そしてもう一つ。

遥がフリーになった事はあつという間に学校中に広まってしまい、遥にアタックしてくる男子共ヤローがわんさかと沸いてきた事だ。

学園を二分する人気女子の片割れの亜由美は、元々ガードが固かったのと

入学初期に通りの言い寄った男がさくつと振られているのだが、お嬢様な亜由美と違ってフランクで体育会系のノリの遥には入学当初からアタックしてくる男が途切れる事は無かった。

流石に芳野先輩と付き合いだしてからはアタックは無くなったが、芳野先輩と別れた事が知れてからはまた以前の様になってしまった。もちろん、遥は片っ端から丁寧に断っているのだが、

しばらくはハイエナ達の熾烈な争いは続くだろう…

遥を布団に残して新聞配達に出かけた俺は、そんな事を考えながらカブを走らせていた。

最後の家に新聞を入れ終わり、順路帳を仕舞う。

うん、今日も誤配も余りも無い！ハズ。

さ、今日は日曜日、帰ったら遥が部活に行くまではイチヤイチャ出来るかな？

俺はカブのアクセルを全開にして、店へと急いだ。

部屋に戻ると遥が朝食の支度をしている。

と言っても、遥のおばさんが作ってくれたのを持って来たんだが。

「お帰り、シヨウ！」

部屋に入った俺に遥が抱き付いてくる。

俺達はまたしばらくキスを楽しむ。

遥は超キス魔で、一度吸い付くとなかなか離れなくなってしまふ。

この時も二十分ほど玄関先に立ったままキスをしていた。

コンコン

突然のノックに飛び上がる俺達。

なんか今朝は驚いてばかりだな…

「はい、どなたですか？」

遥はささっと奥の部屋に入って行く。

「シヨウくん、私だよ！」

可愛らしい声が響く。

俺は遥がパジャマを着替えたのを確認してから、ドアをそっと開いた。

愛らしい顔にっこりとした笑顔を浮かべ、手には大きなバスケットを持っている。

そこには、学園二大ヒロインの片割れであり、俺と遥の幼馴染でもある

南 亜由美が嬉しそうに立っていた。

「おはよう、亜由美。早いなだね」

動揺を外に出さずに微笑みかける俺。

「えへ、最近あんまりシヨウくんが構ってくれないから寂しくて来ちゃった！」

これ、早起きしてサンドイッチ作ってきたの！」

天使のような笑顔で微笑む亜由美。

俺の心にちく、と申し訳無さの針が刺さる。

「そうか、遥も朝飯持って来てくれてるんだ。

まあ上がれよ」

亜由美の家から俺の部屋は相当離れているのに、

こんな朝早く弁当を作って来るなんて…

そんな健気な娘を無下に帰すなんて出来ないな、やっぱ…

「あら！遥ちゃんも来てるの？」

「じゃあ、お邪魔しま〜す！」

亜由美は微笑みながら俺の部屋に上がりこんだ。

「おはよ、亜由美」

遥が微笑みながら挨拶する。

「おはよう、遥ちゃん！」

亜由美も嬉しそうに返す。

亜由美が机の上にバスケットを置き、開けると美しく並べられたアメリカンクラブハウスサンドイッチが姿を現した。

「すごい！亜由美が作ったの？」

遥が歓声を上げる。俺もおお、と感嘆の声を漏らしてしまう。

「えへへ、まどかさんと一緒に作ったの！」

まどかさんって凄く料理上手いんだよ！」

亜由美が自慢げに話す。

色々有ったけど、すっかりまどかさんと打ち解けたようで一安心だ。  
「でも、遙ちゃんも朝御飯持って来たなら食べきれないね、シヨウくん」

亜由美の言葉に遙が答える。

「亜由美は今日、夕方くらいまでシヨウウの所に居る気でしょう？」

あたしはそろそろ部活に行かなきゃだから、サンドイッチはお昼にすれば良いじゃない」

ニコニコしながら遙が言う。

が、右の眉毛の上に小さく青筋が立っているのを俺は見逃さなかった。

「んーん、私も今日はお昼から英会話教室だし、シヨウくんもバイトでしょ？」

亜由美が小さな頭をふるふると振りながら残念そうに言う。

そう、最近俺は日曜の午後から夕方まで、近所のバイク屋さんでバイトをしている。

ガソリンスタンドは入院している間にクビにされてしまったので、代わりのバイトを探していて見つけたんだ。

まだまだ見習いのペーパーなのでバイクの洗車と磨き位しか出来ないが、

その内整備や修理を教えてもらって親父の形見のスズキ・GSX750Sカタナを

自分の手で直して車検を取り、甦らせる積りだ。

まあ、その前に限定解除という超難関が待っているのだが…

「そう！じゃあ、そろそろ私は部活の用意しなくちゃ。

じゃあね、シヨウウ、亜由美。また明日ね！」

遙がすつと立ち上がる。

「あ、食器は夜取りに来るから」

すいっと振り向いて俺に言う遙。

了解、また夜な。

俺は亜由美から見えない様に遙にウインクする。  
遙は右手をヒラヒラさせながら部屋を出て行った。

「えへへ、二人になっちゃったね！」

亜由美が腕を絡めてくる。  
むにゅっ

！この感触はっ！

「あ、亜由美…あんまりくっ付くなよ…」  
俺はさっと腕を抜く。

「えく、どうしてえ？良いじゃない」

亜由美が上目遣いに俺を見ながら擦り寄ってくる。

親父、<sup>カタナ</sup>こういうときにどうすりゃ良いんだろ。

俺は隣の部屋に眠っているカタナに向かって問い掛けた。  
長い午前中になりそうだな、こりゃ…

えっち？

「シヨウ、帰ってる？」

ノックと共に遙の声がする。

「ああ、帰ってるよ。今開ける」

俺はドアまで行き、鍵を開けて遙を招き入れた。

今日の午前中はラブラブ攻撃を仕掛けてくる亜由美を誤魔化すのに  
えらく苦労した。

だが、元々お嬢様の亜由美は、

「俺、高校生のウチはエッチな事はイケないと思うんだ！」  
という俺の大嘘に感動したのか、

「じゃあ、大学に合格したら私をあげる！」

シヨウくん、貰ってくれるよね…？」

ともじもじしながら聞いてきた

「あ、ああ！もしその時に俺達がまだ仲良く出来てたらな」  
と苦しい返答をする俺に指を差し出し、

「じゃあ、指切りして！」

ゆーびきーりげーんまーん…」

と嬉しそうに指切りをする亜由美。

「じゃあね！シヨウくん！今度ウチにも遊びに来てね。

パパとまどかさんが会いたがつてるから！」

元気に言つと、亜由美は自転車に乗って帰っていった。

出来れば、針千本は飲みたくないなあ…

「どうしたの？何で私を拝んでるの？」

やべえ、またいつもの癖が出た。

どうもセルフコントロールが上手くいかんな、ココん所…

後ろ手でドアを閉め、直ぐに抱きついてくる遥。

「シヨウウ…ぎゅってして」

ネコの様に甘えてくる。

俺は遥の華奢な体に手を廻し、少し力を込めて抱き締めた。

遥が俺の首筋に唇を当てて軽くキスをする。

「キスマーク、付けても良い？」

遥が甘えた声で聞いてくる。

「…まあ、学校で気付くヤツも居ないとは思っけどな」

「ん。じゃあ付けちゃうモン」

ちゅっつ、と吸い付く遥。

ヤベ…体の一部が成長して来ちまう…

「ね、おつきくなってるね…」

遥が首筋から唇を離して呟く。

「ねえ…しちゃう？」

もう理性は決壊寸前だ。

しかし、今夜は遥の家に夕食をお呼ばれしている。

迎えに来た遥が遅くなった上に顔を紅潮させて帰れば、

鋭いおばさんは絶対に感付く。

それに、今夜はおじさんもいるしな…

俺は先日、おばさんが来た時の事を思出だした…

先週の水曜の夜の事。

コンコン

午後十一時、遥とラブラブして、遥を送って行った後に突然誰かが尋ねてきた。

「はい、どなたですか？」

「私よ、シヨウくん。ちょっと良いかしら？」

お？おばさんか。さっき会ったばかりだけどな…？

「はい、今開けるね」

ドアを開けるとにつこりと微笑んだおばさんが立っている。それにしても、ホントに若くて綺麗だよな。とても四十代には見えないや。

「なあに？おばさんの顔に何か付いてる？」  
小首を傾げるおばさん。

「う、ううん何でもないよ。まあ上がって俺はおばさんを部屋に入れ、お茶を入れた。

「うん、シヨウくんお茶入れるの上手ね！」  
につこりと笑うおばさん。

「で、どうしたの？遙が何か言ってた？」

俺の問いにおばさんが答える。

「ううん、遙はさつき、世界で一番幸せなのはあたしよ！

って顔して帰ってきて直ぐ寝ちゃったわ。

シヨウくん、ありがとうね。あの娘の事、大切にしてくれて…」  
突然の言葉に面食らってしまう俺。

「い、いえとんでもない！こちらこそ遙のお陰で凄く幸せです」  
思わず敬語になる。

「所で、貴方達もうエッチしてるのよね？」

「はい！」

…のわあっ！！」

元気良く答えてから飛び上がる俺。

「いえその勢いではない！とか言いましたがまだ俺達高校生なんだし俺なんか身元不明で遙を幸せにしてあげられるか解らないけども決して遊びとかいい加減な気持ちじゃなく遙とは将来的に結婚まで視野に入れてるのは当然な事ですしやはり未成年である以上不純異性交遊についての不味さも認識はすれども歯止めは効かず」

「はい、落ち着いてシヨウくん。別に責めてるんじゃないから」  
おばさんに言われて正気に返る。

「…すみません、遙とは…」

俺は項垂れて謝罪する。

「あら、別に良いのよ。どうせ止めたって止まるものじゃないのは解ってるもの。」

私だつて経験者だし？」

へ？と顔を上げる俺。

「ただ、ちゃんと色々と考えてる？赤ちゃんの事とか」

「ほえへ？」

俺はなんと答えていいのか解らずに困つてしまう。

「まだまだ結婚するのは早いでしょ？だから、そこだけはちゃんとしてね。」

後、ウチに来る直前にするのは避けてね。

流石にお父さんと、それと沙里に感付かれるのは避けたいの…

沙里はね、本気でシヨウくんの事が好きなのよ。

実は、昔から私にだけは「沙里はシヨウ兄ちゃんのお嫁さんになるの！」つて

ずつと言つてたんだから…遥の事を嫌つてなんか居ないけど、今回はあまりに唐突過ぎて納得出来てないのね…」

「…解りました。気を付けます」

ふふ、と笑うおばさん。

「ま、そんなに難しく考えないで！」

おばさんはシヨウくんと遥が結婚して、可愛い孫を見せてくれるの楽しみにしてるんだから！

じゃあ、夜分遅くごめんなさいね、お休み、シヨウくん」

「ね、シヨウ…どうしたの？しないの？」

我に返る俺。

俺の腕の中では遥が大きな目をくりくりさせて俺を見上げている。

「あ、ああ。とりあえずご飯食べに行こうぜ。」

遅くなると心配して誰か迎えに来るかもしれないだろ？」

遥がちよっと頬を膨らませる。

「…したかったのに！」

でも、仕方ないね…また後でしょ」

遥が目を瞑って唇を尖らす。

俺はちゅっとフレンチキスをする。

「さ、行きましょ！今日はシヨウウの好きな唐揚げだからね！」

遥が俺の手を引いて部屋を出る。

カギを掛けて遥と手を繋いで歩き出す。

一分足らずで着いた遥の家からは、美味しそうないい匂いがして来ていた。

団樂？

「ただいま」

「お邪魔します」

遥と俺が玄関に入ると、香奈と沙里が出迎えた。

「お帰りハル姉！」

「いらっしやお兄ちゃん」

香奈が遥に声を掛け、沙里が俺に声を掛ける。

そして、俺に抱き付こうとした香奈の首根っこを後ろから沙里が捕まえ、

遥の方に放り投げる。

「ほげえ！」

妙な呻き声を上げながら遥に抱き付く香奈。

「お兄ちゃん、抱っこして」

沙里が可愛らしく言いながら俺の足に縋り付くので、俺は苦笑しながら沙里を抱き上げた。

「沙里ちゃんひどいー！！」

香奈が口を尖らせて抗議するが沙里はしらんぷりだ。

「沙里、今のは酷いんじゃないの？」

遥が沙里に注意する、が沙里は遥をじろつと一瞥してからふん、と鼻を鳴らした。

「別にいいじゃない。だってハル姉はシヨウ兄ちゃんのお部屋でイチヤついて来たんでしょ？」

今度は私がシヨウ兄ちゃんとイチヤイチャする番だもん！」

沙里の言葉に遥が見る見る赤くなる。

「ななななんですってえ！！あんだねえ、何よその言い草！」

いい加減にしないとお姉ちゃんも本気で怒るわよ!!」  
顔中口にして怒鳴る遙。

しかし沙里はまったく動じず。

「ふん!だ。お兄ちゃんとかっそりとエッチな事してるくせに!」  
私だつてしちゃうんだから!」

言い様に、沙里が俺の唇にキスをした。

ガチン!

「きゃん!」

「痛っ!」

すごい勢いで歯と歯が激突して、悲鳴を上げる沙里と俺。  
しかし、確かに俺と沙里はキスをしてしまった。

あわわわわ、とか言ってた遙がはっと我に返って叫んだ。

「ななななななんて事すんのよあんたはあっ!!!」

俺の腕の中で唇を押さえて涙を浮かべている沙里に遙が詰め寄る。

「べっだ!!!」

「むきいっ!!もう許さないんだから!!!」

遙が沙里に掴み掛かる。

「お、おい!危ないっ!」

「あゝん、私だけ仲間外れにしちゃ嫌」

状況把握が全く出来ていない香奈が遙のお尻にどーん!と体当たり  
してくる。

「うわあっ!?!」

「きゃあっ!?!」

三人の女の子の加重に耐え切らず、俺は沙里を抱いたままひっくり返  
ってしまった。

どつたん！ガタガタ！

「何何！？何の音！？…何やってんのあんた達！」

おばさんがお玉を持って台所から飛び出てくる。

「あ、お邪魔してます…」

三人姉妹に押し掛かれたまま俺が挨拶する。

「…いらつしゃいシヨウくん…」

呆れた様に、おばさんがお玉をぶん、と一振りする。

コン！

「痛なあ！なんであたしが叩かれるのよ！」

遥が抗議の声を上げる。

「こつという時は年長者が悪いの！とつとつご飯の支度手伝いなさい

！」

アヒル口を尖らす遥。

「…納得いかな〜い…」

ぷつと吹き出す俺。

仕方ないなあ…

俺は遥の頭を撫でてやる。

「うにゆ〜…」

妙な鳴き声を上げながら嬉しそうに目をつむる遥。

と、沙里が俺の手を取って自分の頭に乗せる。

「お兄ちゃん、私にもいい子いい子して」

「ちよつと沙里！私が撫せてもらってたのに！」

アヒル口を更に尖らせる遥。

「いい加減になさい！！」

「はい！ごめんなさい！」

おばさんの怒鳴り声に俺たちはバツと立ち上がって謝った。

まもなくおじさんも帰宅し、食事が始まる。

遥が作った唐揚げは抜群に旨く、それを褒めると得意そうに胸を張

って喜んだ。

食事の後、じゃれ付いてくる沙里と香奈の相手をソファでしていると洗い物を終えた遙も負けじとじゃれ付いてくる。

俺が三人の娘と狭いソファでじゃれているのを見たおじさんが、

「いいなあシヨウ。俺も混ぜてくれないか？」

と擦り寄ってくる。

しかし、遙と沙里はパツと離れてしまい、ドーっと涙を流すおじさん。

「パパも遊ぼ〜！」

香奈がおじさんにもじゃれ付くとおじさんがはっしと香奈を抱き締め、

「うんうん、香奈だけだよパパを愛してくれるのは。

何か欲しい物が有ったら言ってごらん？」

と頬擦りしながら言う。

「え〜とねえ、魔法少女セットとミカちゃんの看護婦さんセット！」  
ぴぴくうっ！！

耳をダンボの様にしてそれを聞き、ダツと戻ってくる遙。

「パパ〜 あたし服が欲しいの〜」

遙が猫撫で声を出しながらおじさんにむぎゅっと抱き付く。

「今更遅いぞ遙？」

いじけた様に言うおじさんに、遙がさらにくっ付く。

むにゅっ…

わざとらしく、自慢の大きな胸をおじさんの腕に押し付けて頬にキスをする。

おじさんの顔がにへら、と溶けた。

「をを！？は、遙…立派に成長したな…」

何がだおっさん。

「やだ、パパ。誤解だよお…あたしがパパの事大好きなの解ってる

癖に痛いっ!!」

その時ゴン、と言う鈍い音とともに遙の頭にタウンページが振り下ろされた。

「ふにゃくん!!」

遙がとてつ、とひっくり返る。

そこには、鬼の様な顔をしたおばさんがタウンページを掴んで立っていた。

蒼くなつて抱き合つおじさんと俺。

やべえ、今のモロに角じゃんか…

「本気で怒るわよ?」

「ご、ごめんなさいママ…」

頭を抑えて蹲っていた遙が半泣きで謝る。

それを見ていた沙里がふん、と鼻で笑う。

「ハル姉、無様ね…物に吊られてパパに色気で迫るなんて、最っ低の女よね…」

ねえ、シヨウ兄ちゃん、こんなバカ姉と付き合つてるとロクな事無いよ。

私だつたら絶対シヨウ兄ちゃん一筋なんだから!

それに、ハル姉なんて胸が大きいだけじゃない!

私だつて、もうBカップ位有るんだから!」

沙里が俺を見る目に物凄え女を感じるんですけど…  
ちよつと恐えよマジで…

ぱっかーん!!

「きゃん!!」

沙里が悲鳴を上げる。

「あんたも！いい加減にしなさい！！」

おばさんが再びお玉で沙里の頭をどついた。

半泣きになった二人の娘とじゃれ付いてくる一人の娘を交互に見て、

「シヨウ…大変だろうが家の娘をヨロシクな…」

と言いつつ俺の肩をポンポンと叩くおじさん。

何をヨロシクしろって言うんだろ…？

俺は天井を仰いで溜息を付いた。

相談？

…何であんた達があたしの部屋に居るのよ…」

遥がジト目&アヒル口でボヤク。

食事の後のドタバタも終わり、俺は遥の部屋に来たのだが、当然の様な顔をしてカナサリも着いて来た。

「ねー、お兄ちゃん、ハル姉と香奈はほっというて私の部屋に行こ」  
俺の膝の上に乗った沙里が甘えてくる。

「…沙里、あんたねえ…！」

遥が大声を出しそうになるが、おばさんのタウンページが余程堪えているのか途中で小声になる。

ふと時計を見るともう九時を過ぎている。

「遥、もうカナサリも寝る時間だし俺は帰るよ」

「え！もう帰っちゃうの!？」

遥と沙里が同時に叫ぶ。

香奈は床に寝そべってマンガを読んでいるが、かなり眠そうだ。

「ああ、俺達も明日が有るしな」

「うー」

遥が唸る。

「…じゃあ、あたしシヨウ送ってく…」

上目遣いに俺を見ながら呟く遥。

その可愛さにドキツとしてしまう。が、今日はダメだな。

「いや、今日は止めとこう。おばさんもまだ怒ってるだろうし」

「…だって！だって…まだ今日ちよつとしか…」

遥が少し涙ぐむ。いかん、限界だ。

ぎゅっ！ちゅっ！

俺は遥を抱き寄せ、キスをした。

「あー！ー！」悲鳴を上げる沙里。

「きよほやー」奇声を上げる加奈。

「ダメえー！！」バツと俺達に掴み掛かる沙里。

「ママー！パパー！ちゅーしてるおー！！」

ざーっとドアに向かって這って行く加奈。

俺はスツと遙を離し、突っ込んできた沙里を抱き上げる。

素早くドアに廻り、加奈を足でむんずと抑える。

「ほぐえ！？」

ペタン！と踏み潰されて悶える加奈。

「シヨウ…」

真っ赤になっている遙。

「じゃあ俺帰るわ。沙里、加奈、今のはパパとママには内緒にしてな？」

そうしないとお兄ちゃん二人の事嫌いになっちゃうぞ？」  
と軽く脅しをかける。

「ずるい！お兄ちゃん私にもちゅーして！」

「加奈も〜」

俺に詰め寄る沙里と俺の足の下でもごもご動く加奈。

「沙里はさつきしただろ？加奈は今度してあげるから」

「うー！ー！」

「わーい」

なんとか黙るツインズ。

「じゃあ遙、また明日な」もう一度キスする。

「あん…もう、ばか…」

そう言いながらも嬉しそうだ。

「あー！ー！二度も！！」

悲鳴を上げる沙里のほっぺにキスをする。

「きゃ！」

真っ赤になって黙る沙里。

俺は沙里を降ろして加奈から足を退かし、部屋を出て階段を降りた。

遥の部屋では何やらぎゃーぎゃー騒いでいるが、なんだか楽しそうにも聞こえる。

リビングのドアを開けるとおじさんとおばさんがワインを飲んでいった。

「ご馳走様でした。そろそろ帰ります」

俺の言葉におばさんが微笑む。

「はい、またねシヨウくん。遥の事、よろしくね」

「シヨウ、遥とはどこまで行ってるんだイタイタイ母さん痛いよ！」

おばさんに耳たぶを抓られて悲鳴を上げるおじさんを見て苦笑する。

「シヨウくん、気にしないでね。明日は来れるのかしら？」

明日は、と。

「明日はバイトがあるから無理かな。」

でも、ありがとうおばさん」

「シヨウ、ここはお前の家同然なんだから遠慮せずいつでも来いよ」

おじさんが痛そうに耳を押さえながら声を掛けてくれる。

「うん、ありがとございます。それじゃ、お休みなさい」

「ああ、お休み」「お休み、シヨウくん」

振り向くと、遥とカナサリがリビングに入ってきた。

「シヨウ、外まで送るね」

遥が俺の腕に抱き付いてくる。

俺はもう一度おじさんとおばさんに挨拶して廊下に出た。

カナサリはおばさんに捕まって歯磨きの為に洗面台に連行されていた。

玄関を出ると肌寒く、すっかり秋の気配だ。

「ね、シヨウ。お願い……」

遥が瞳を閉じる。

俺は遙の可愛らしいアヒル口にもう一度唇を重ねた。

五分ほど抱き合いながらキスをして、体を離す。

「…もつと、一緒に居たいよう…」

遙が涙を流す。

俺は宝石の様な遙の涙をキスで拭った。

「…キザだね」

遙が嬉しそうに微笑む。

「親父に習ったんだ。女の子の涙はキスで拭ってやれ、ってね」  
パツと体を離し、駆け出す俺。

「おやすみ、遙！また明日な」

「おやすみ、シヨウ！明日迎えに行くからね！」

遙は俺の姿が見えなくなるまで見送ってくれていた。

翌朝、いつもの様に迎えに来た遙と自転車で登校する。

他愛もない事を話しながら学校に着くと、

「それじゃ、また夜ね」

遙はそう言って朝練の為に弓道場へと向かった。

さて、俺は教室で寝るかな。

廊下を歩いているとクラスメートの深見とバツタリ会う。

「おはよう、シヨウ。今日も早いな」

「ああ、お前も朝練か、頑張るな」

俺と深見は中学生からの付き合いだ。

寡黙な深見は昔から熱心な野球少年で、

三年生が抜ける我が校の次期エースである。

俺と深見はなぜか気が合い、たまに一緒に飯を食ったりする。

が、最近は深見の部活と俺のバイトが忙しく、あまり話もしていない。

この日も、すれ違い様に挨拶をしただけ、かと思っただけだ。

「あ、シヨウ、今日の昼休みちよつと時間作れないか？」  
俺を呼び止める深見。

「お？おお、いいぜ。どうしたんだ？」

俺は少し驚いたが、諒承する。

「ああ、ちよつと相談が有るんだ…」

いつに無く思い詰めたような雰囲気だな…

「解った。だが金はないぜ」

深見がふつと笑う。

「バカ、お前から金をせびるかよ。」

じゃあ、十二時半に第二校舎の屋上で待ってるからな」

深見はぱつと右手を上げてグラウンドへと向かった。

さて、なんの話だろう？

俺は考えながら教室へ向かった。

まだ早い時間の校舎内には、生徒もまばらだ。

廊下の角を曲がった時、目の前に長い黒髪をツインテールにした可愛らしい少女とバツタリと顔を合わせた。

「あ！シヨウ先輩。おはようございます」

「ああ、おはよう亜里沙」

につこりと微笑みながら挨拶してきたのは、美術部一年にして  
次期ミス我が校候補ナンバーワンの西村 亜里沙だった。

約束？

「シヨウ先輩、今日も早いですね」

亜里沙が微笑みながら話し掛けてくる。

「ああ、遥に付き合わされてな。」

まあ、早いと校門とか込まないから良いしな」

そっぴや、この娘は美術部なのになんでこんな早いんだ？

「先輩、HRホムルームまでまだ時間有りますよね…」

ちよつと、お話しても良いですか？」

亜里沙はキラキラした綺麗な瞳でじつと俺を見る。

「ああ、良いぜ。じゃあ、屋上にも行こうか」

「はい！」

嬉しそうに頷く亜里沙。

俺たちは自販機でパックのジュースを買い、屋上へ上がった。

朝の屋上にはまだ誰も居らず、気持ちの良い風が吹いている。

「すみません、奢ってもらっちゃって…」

亜里沙がぺこんと頭を下げ、ツインテールがさらつと流れる。

「ああ。で、どうしたんだ？」

俺はコーヒーストローを挿しながら聞いた。

「…シヨウ先輩、最近、若宮先輩と仲良いですよね」

ピク、と動きを止めてしまう俺、。

「まあな」

爽やかに微笑む積りだったが多分ちよつとアレな笑顔になってるだろっぴな…

「お付き合い、してるんですか？」

真摯な瞳で聞いてくる。

…この娘には隠しては置けないか。

「…ああ、ちょっと前からな。」

「いつ気付いた？」

ふっと目を伏せる亜里沙。

「多分、先輩たちがお付き合いましたすぐ、です。」

だって、私もシヨウ先輩の事大好きだから…すぐ、気付きました

…」

なんて言っただけか解らないな、こういう時は…

「でも、当然だと思います。」

若宮先輩が芳野先輩とお付き合ってる時は、なんだか無理して  
感じたんだけど

今はすごく自然になってて、素敵なんですよね。

ウチのクラスの男子も、若宮先輩ってすごくカッコいいよな、と  
か話してますし、

実際にラブレターとか出した子も居ますし」

そっぴや遙が、下級生からもたくさん貰ってるの〜

とか言いながら嬉しそうに俺やカナサリに見せびらかしてたな。

まあ、沙里に鼻で笑われて喧嘩になっておばさんにどつかれてたけ  
ど…

「先輩、なに笑ってるんですか？」

亜里沙が不思議そうに聞いてくる。

おっと、いかんいかん。

「いや、あいつも人気者だと思ってさ。」

でも、遥みたいなのはっちゃん娘よりもお前や亜由美の方が人気出  
そうだけだな」

ふっと亜里沙が微笑む。

「うふ、南先輩だってすごくモテるんですよ。」

でも、南先輩は昔から、「私には本命が居るからごめんなさい」

って断ってるらしいんです」

…はあ、そうですか。

「へえ、そりゃ驚いたな。誰だる本命って」

ぷつと亜里沙が噴出す。

「おとぼけですね、シヨウ先輩。

本命はシヨウ先輩に決まってるじゃないですか！」

「へえ、そりゃ驚いた！」

まさかあのシヨウ先輩だとは…って、なんですとっ！？」

俺は思わずコーヒーを取り落としてしまった。

「なananんでそんな事…！」

亜里沙がコーヒーを拾って俺に渡す。

「隠さないでください。結構、噂になってますよ？」

南先輩のお友達からちよつとずつ漏れてるんですから」

これだから女つてのは…！！

「お前は誰から聞いたんだ？」

勤めて冷静さを装う俺。だが手は震えている。

「美術部の先輩から聞きました。

でも、南先輩はお付き合いはしてないって言ってます。

シヨウ先輩の心は、若宮先輩の方を向いてるからって…」

「…何だって!？」

亜由美がそんな事を!？」

って事は、亜由美は俺と遥の事を気付いているのか？

ふう、と溜息を付く亜里沙。

「ダメですよ、シヨウ先輩。もっと女の子の気持ちを讀まないと。

南先輩は、本当にあなたの事を大好きなんですから…

もちろん、私だって!」

切なく微笑む亜里沙。

「こんな事言いたくないけど、私も最近結構告白とかされるんですけど、私はシヨウ先輩の事が好きだから…」

「きつと、南先輩だつて同じです。だから、いつまでも若宮先輩とお付き合いしている事を隠してる…」

目を伏せたまま黙る亜里沙。

「それに、若宮先輩を狙ってる男の子もいっぱい居るから、気を付けて下さいね」

「…ああ、忠告ありがとう。俺も頑張るよ」

俺は少し、考えを改める事にした。

それにしても亜由美の奴、そんなに無理してたのか…？

亜里沙がぱつと顔を上げる

「あ、そつだ！私、来月原付の試験受けるんです！」

「ぱあつと笑顔になる亜里沙。」

「お！いよいよよか！予約したの？」

俺も笑顔で答える。

「はい！来月誕生日だから！やつと十六歳になるんです！」

うん、いい笑顔だね。

「そつか、じゃあ問題集とかやつてるのか？」

「いえ、これから買う所なんです。」

先輩、いい問題集知ってますか？」

亜里沙が小首を傾げる。可愛いな、この娘も。

「いや、俺が去年使ったやつが有るから貸してあげるよ。」

問題なんてほとんど変わってないはずだ」

「え！ホントですか！」

嬉しそうに声を上げる。

「ああ、明日持って来てやるよ。原付なんて、問題集を二丁三回通してやって、

問題に慣れちゃえば楽勝さ！俺ですらそれで取れたんだから」

「…」

と…亜里沙がなんだか黙つちまったな？

「どうした、亜里沙？」

心配になつて声を掛けると、ぱつ亜里沙が顔を上げた。

「先輩！今週末の土曜日はお暇ですか！？」

真剣な顔をして聞いてくる。

「あ、いや、確かバイトが…」無えな、今週は…

「無い、な。だけど遙と…」遙は合宿つて言つてたな…

「若宮先輩、今週末は合宿ですよね！」

何で知ってるんだキミは！？

「あの！今週の土曜日、私に原付試験の勉強教えてくれませんか！？」

「…いやそんな、教えるほどのモノじゃないって！」

「でも、不安なんです。お願いします…」

ぱつと腰を折り頭を下げる亜里沙。

…まあ、良いか…

「解つた、じゃあ土曜日に市立図書館かどっかで勉強しようか」

「良いんですか！やったあ！」

手を胸の前で組んで喜ぶ亜里沙。

「お前も自転車通学だから、土曜日の授業が終わったら

自転車置き場で待ち合わせようか」

「はい！じゃあ、土曜日に！」

亜里沙は嬉しそうに言う。

キーンコーンカーンコーン…

「おっと、予鈴だ。そろそろ行くつか  
そして俺たちは教室へと向かった。」

告白？

昼休みのベルが鳴り、ほっと一息つく。

さて、今日は何が入ってるかな…

最近は、遥が俺の弁当を作ってくれている。

まあ、ところどころにおばさんのフォローが入っているのはご愛嬌だ。

俺が弁当を空けると、今日はエビフライにハンバーグ。

「いただきます！」

俺は買ってきたコーラを明けて一口飲んでからありがたく弁当を食べ始めた。

うん、最近メキメキ腕を上げてるな、遥。

あっという間に食べ終わり、一息付く。

時間を見るとそろそろ深見との約束の時間だ。

「さて、行くか」

俺は席を立ち、第二校舎の屋上へと向かった。

屋上に出ると、何人もの生徒たちが弁当を広げたりダべったりしている。

さて、深見は、と…お、いたいた。

俺はサンドイッチを齧りながら牛乳を飲んでいる深見を見つけ、歩み寄った。

「よう、お待たせ。まだ食ってるのか」

俺の言葉に深見が苦笑する。

「ああ、売店が混み混みでな。さっきやっと買ってきた所さ」

それは俺もよく知っている。

遥が弁当を作ってくれる様になるまでは俺もちよくちよく世話になったからな。

「で、話つてのはなんだい？」  
俺は単刀直入に聞いてみた。

「ああ…実は…」  
珍しく歯切れの悪い深見。

寡黙だが男らしい性格のコイツが口籠るつてのは珍しいな。

「どうした？珍しいな。お前が口籠るなんて」  
思ったままを口に出す。

「ああ、すまない。

…なあシヨウ、お前、南亜由美と付き合ってるのか？」

吃驚仰天だ。

「…どうした？黙っちゃつて。

やっぱり、付き合ってるんだな…？」

「ちよ、ちよつと待てよ。

お前があまりにも突飛な事言い出すから驚いちまったんだよ！  
なんでそんな事言い出すんだ？

もしかしてお前、亜由美の事が好きなのか？」

驚いたのと、それを誤魔化す為に咄嗟に思い付きを口に出す俺。

「何で知ってるんだ！南に聞いたのか！？」叫ぶ深見。

目から鱗だ。

いや違う。こういう場合の表現はなんだつたっけ!？

「ま、まて深見。もちつけ！」俺が落ち着け。

「なんで今、餅をつかなきゃならないんだ！

正月はまだ先だぞシヨウ！俺をからかっているのか!？」

深見が大マジで叫ぶ。

「だああつ！！ちよつと待てつて！」

亜由美は俺に何も言つてないし、俺は口からデマカセを言っただけだ！

…つて、お前、亜由美の事マジで好きなのか？」

「……………！！！」

深見が真つ赤になつて俯く。

おいおいマジかよ…

「で、もしかして告白したのか？」

「…ああ…」

蚊の鳴く様な声で答える。

…こりゃ、参つたぞ…

「で、亜由美は何て答えた？」

深見は真つ赤になつた顔を俺に向けた。

「南は、お前の事が好きだつて言つたよ。

だから、嬉しいけれど俺とは付き合えないつて…

じゃあ、シヨウと付き合つてるのか、つて聞いたたら、

シヨウくんは他の人の事を好きだから、まだダメだと。

だけど、必ず自分に振り向いてもらうもん、つてさ…」

なんてこつた…亜由美、そんな事を…

「…で、お前は何か答えたのか？」

「ああ、頑張れつて言つて来た。俺に出来る事なら力になるつてな」

…漢おんだな、深見…

「だけどな、俺も南の事は諦めないからつて言つて来たんだ。

俺も、南を振り向かせる様に努力するから、つて」

俺は思わず俯いてしまった。

深見の男らしさと、亜由美の健気さはどうだ…

それに比べて、俺のいい加減さ…なんて卑怯者だ、俺は！

俺たちはしばらく押し黙っていたが、深見が再び口を開いた。

「俺は別にお前を責めてる訳じゃない。

人の気持ちなんてどうしようもない物だからな。

だけど、お前が好きなのが誰なんだか知らないが、

南にいつまでも気を持たせる様な残酷な事だけはしないでくれ。

もしお前の好きな子とお前が上手くいくのなら、

南の為にもはつきりとしてやって欲しい。

もし、南を受け入れる積りがあるのなら、南を大切にやって欲しい。

ただ、好きな子と上手くいくまでの繋ぎとか、好きな子の代わりにする様な、

そついう残酷な傷つけ方をしたら俺はお前を許さない。

俺が言いたい事はそれだけだ…」

深見はまっすぐな瞳で俺を見ていた。

「…ああ、解った。よく覚えておくよ」

俺は答え、右手を上げて教室へと戻った。

キーンコーンカーンコーン…

さて、放課後だ。

今日はバイトだな、一旦家に帰って一休みするか。

俺が自転車のカギを外していると、後ろから声が掛かった。

「シヨウくん！今日はバイト？」

振り向くと、可愛い笑顔を浮かべた亜由美が立っている。

「ああ、お前も帰りか？」

亜由美が俺の問いに残念そうに答える。

「うっん、私、文化祭の企画委員に選ばれちゃったから

これから会議なの。シヨウくんのクラスは誰だっけ？」

お？そつういえば今朝のHRホームルームの時に誰かがそんな事言ってたような…？

「悪い、忘れちゃった。でも、今朝そろそろ準備に掛かるって言っ

てたな」

「そう！今年は企画委員長がハリキってるから、結構大きなイベントになりそうよ。」

あと、毎年見送られてきたミスコンテストもとうとうやるみたいよ」

へええ、よく先生連中の許可が下りたよな。

俺が変な関心をする、亜由美が苦笑交じりに答えてくれた。

「なんでも、ミスコンテスト、というんじゃないって

校内で輝いている人コンテスト、みたいなお題目を付けたみたい。

だから、表向きは男女学年問わずに輝いてる生徒を選ぶ様な感じね」

なるほど、悪知恵が働きますこと…

「だけど、俺が思うに、お前と遙、あと亜里沙で決まりじゃないのか？」

うふ、と照れくさそうに笑いながら首を振る亜由美。

「私なんかとてもじゃないけど無理！」

「だけど遙ちゃんと亜里沙ちゃんはトップに入るわね、絶対」

謙遜だな、亜由美。

「まあ、それはフタを開けてのお楽しみ、って所か。

おっと、そろそろ帰らないとバイトに間に合わなくなるな。

じゃあな、亜由美。また明日！」

「うん、シヨウくんバイト頑張ってね！」

「お前も委員会頑張れよ！」

俺は校舎に戻って行く亜由美を見送り、自転車で走り出した。

決心？

バイトが終わり、部屋に帰ると明かりが点いている。

「ただいま」

俺がカギを開けようとすると中から遙が飛び出てきた。

「おかえり、シヨウ！」

大きな瞳を輝かせながら俺に抱きつく遙。

俺は遙を抱きしめながら部屋に入り、後ろ手で急いでドアを閉めた。

「シヨウ。ん〜」

可愛い唇を突き出す遙。

俺はちゅっど軽くキスをする。

「もっと熱いのちようだいよお…」

ほほをぷうつと膨らませ、アヒル口で拗ねた様に言う遙。

俺は苦笑してから、再び遙の唇に口付けた。

コンコン

「！」

「いや！」

五分ほどキスをしたままになっていた俺たちは飛び上がるほど驚いた。

なんか、つい最近同じパターンやった様な気がするが…。

遙がそそくさと置くの奥の部屋に入っていく。

「はい、どちら様ですか？」

俺の声に、意外な人の声が答えた。

「こんばんは、シヨウくん。まどかです。」

「まどかさん!?!」

俺がドアを開けると、そこには亜由美の親父さんの再婚相手である綺麗なおねえさんが微笑みながら立っていた。

「ごめんなさいね、こんな時間に…」

まどかさんが申し訳なさそうに言う。

「ご、ご無沙汰してます。亜由美も一緒ですか？」

まどかさんが微笑む。

「いいえ、私一人よ。亜由美は今日はもう寝てるわ。

旦那が付いて来たがったけど、置いてきたの。

遥ちゃんが来ているのにごめんなさいね。

ちよっとお話したいんだけど、良いかしら？」

バレてやら…

奥の部屋から遥がバツ悪そうに顔を出して挨拶する。

「こんばんは、まどかさん」

「こんばんは、遥ちゃん。いつも亜由美がお世話になってます」

丁寧に挨拶して頭を下げるまどかさん。

「じゃああたし、一度帰ります」

「あ、良いのよ。いえ、むしろ遥ちゃんにも聞いてもらいたいの」

「え…？」

遥と俺は思わずハモってしまった。

まどかさんに上がってもらい、遥がお茶をいれる。

「ごめんなさいね、お構いなく」

まどかさんが持って来てくれたお菓子をお茶請けに出す。

「で、お話っていうのはなんでしょう？」

俺は隣に遥が座り、お茶を啜るのを横目で見ながら聞いた。

「ええ、亜由美の事なんだけど…」

亜由美は最近、明るかったり落ち込んだりの波が激しいそうで、まどかさんも親父さんも心配しているとの事だ。

まどかさんと亜由美は今ではなんでも話せる間柄になったそうで、先日見兼ねたまどかさんが亜由美と真剣に話をした所、とうとう悩みを告白してくれたと。

そしてその悩みというのは、やはり俺との事だったそうだ。

「亜由美は、シヨウくんと遙ちゃんがお付き合いを始めた事にはかなり前から気付いているの。だけど、シヨウくんも遙ちゃんも、亜由美にとっては大切な人だから…」

俺たちは何と言っていいか解らず、黙ってしまった。

「ごめんなさいね、こんな話をしてしまった…」

でも、あなた達は亜由美の事を気にして、

遠慮したお付き合いをしようとなんて思わないでほしいの。

そんなの、あなた達にも亜由美にも不幸な事だから。

私がシヨウくんをお願いしたい事っていうのは、

あなた達がお付き合いしている事を亜由美にハッキリと伝えて欲しい、

と言う事なの」

「ええっ!?!」

遙が驚きの声を上げる。

「でも、それじゃあ…」

俺も驚き、戸惑い勝ちに声を出す。

それじゃあ…なんて言えば良いのだろう…

「そうね、亜由美はとても傷付き、悲しむでしょう。

でも、そこからあの子が立ち上がれば、それは素敵な事よ。

あなた達は堂々と幸せにして欲しいの。

フォローは、母である私に任せて」

まどかさんが素敵な微笑を見せる。

「本当にごめんなさい。」

きつと、シヨウくんには亜由美以上に辛い想いをさせてしまっわ…

でも、貴方は男の子なんだから、頑張っって欲しいの!」

まどかさんが真摯な瞳で俺を見詰める。  
遙が、俺に手を伸ばしてぎゅっと手を握り締めた。  
はっと見ると、遙が俺を涙の滲んだ瞳でじっと見詰めている。

「…解りました。」

「じゃあ、今週末に俺が亜由美にちゃんと話します」

俺は肝を決めてまどかさんに言った。

「ありがとう、シヨウくん。」

で、亜由美がその後どんな行動に出るか読めないから、  
出来れば家に来て、そこで話して欲しいの。

そうすれば直ぐに私がフォロー出来るし…」

うん、確かに…最近は何とんど付き合いは無いみたいだが、  
亜由美にはちよつと不良っぽい悪友も居たから、

もしシヨックを受けた亜由美がヤケになって彼らと遊びにでも出たら  
何が起るか解らないってのも有るし。

俺はまどかさんのお願いを承諾した。

「ね、まどかさん。あたしも行つていいですか？」

突然の遙の言葉に驚く俺とまどかさん。

「でも、遙ちゃんまで辛い想いを…」

戸惑いながら答えるまどかさんをしっかりと見詰め返す。

「あたしだって亜由美の友達です。」

「あたしだけ逃げるなんてダメなもの！」

遙が微笑みながらハッキリと言った。

「…ありがとう、遙ちゃん。」

「じゃあ、お願いするわ！週末の晩御飯はウチで食べて。」

あと、旦那には私が話しておくから心配しないで。

旦那もシヨウくんの事を気に入ってるから、とても残念がると思  
うけど」

まどかさんが色っぽくウインクする。

ほけつと見とれた俺の腿を遙がぎゅっとなつた。

「…！」

声にならない叫びを上げて遙を見ると、三白眼になり俺を睨んでる。

「うふふ、仲が良いのね！」

まどかさんが楽しげに笑う。

「じゃあ、そろそろお暇するわ。ごめんなさいね遅くまで」

俺たちはまどかさんを空き地に停めた車まで送る。

まどかさんの車は、ミニ・メイフェアだった。

「わあ！ミニクーパー！」

遙が目を輝かす。

クーパーじゃないんだが、まあ女の子に説明しても解らないか…

「もう十年近く乗ってるの。ポンコツだけど馴染んじゃってね」

バルン！と独特の音を響かせ掛かるエンジン。

「じゃあ、週末にね。お待ちします」

まどかさんはぱふ、と可愛いホーンの音を残して帰っていった。

大喧嘩!?

まどかさんを見送った後、遙と部屋に戻る。

「ね、シヨウ。本当に良いのかな…」

遙がちよつと不安げな顔で聞いてくる。

「ん、良いだろ。っていうか、やらなきゃダメだろ」

俺は肝が決まったのでハッキリと答えた。

「うん。シヨウがそう言うなら…」

遙が俺に抱き付いてくる。

俺は遙の華奢な体を抱き締め返し、そつと唇を重ねた。

週末の夜、か…

あ！亜里沙の件、遙に話さなきゃな…

すつと唇を離すと遙が小さく喘ぐ。

「ん…シヨウ、もっとチューしてよ…」

甘える遙の顔を見てみると、黙っていたほうが良いのだろうかと思  
つてしまうが

そんな事したら、これから傷つけてしまつたらう亜由美にも、  
それをフォローしてくれるまどかさんにも、

何より俺の一番大切な目の前の娘に申し訳が立たない。

「遙、チューの前にちよつと話が有るんだ」

「ん〜イヤ！チューしてくれなきゃ聞いたげない！」

アヒル口を尖らせて抗議する遙。

俺はもう一度軽くキスをして、

「今はこれで勘弁してくれ」

と言いながら遙を抱き締めて話し出した。

「お前、西村の事覚えてるか？」

遙がほえ？とか言いながら少し考え込む。

「ん〜…もしかして、シヨウにラブレターくれた一年の亜里沙ちゃん？」

「そうそう、あの物好きの亜里沙だ。

実は結構前から、彼女に原付の試験勉強教えてくれって言われててさ、

いよいよ原付試験を受けるから勉強を今度の土曜日に付き合っことになって…」

遙の大きな瞳の目尻がきゅうつと上がり、額に青筋が立つ。

…ヤベエ、これはマジ切れモードか…？

「何よそれ！ついさっき、亜由美をハッキリ振るって言った癖に

亜里沙ちゃんにはデレデレするってワケえっ!？」

あちゃー…

「落ち着け遙、違っただろそれは。

前から約束してたから、断る訳には行かないだろ」

アヒル口を尖らせ、凄い眼つきで俺を睨む遙。

ぱつと俺から離れて、テーブルを挟んだ正面に座る。

「なんで!？原付試験なんて誰でも受かるって言ってたじゃない!

亜里沙ちゃんには問題集でもあげて、独学でやっってもらえば良いんじゃないの!？」

正論だな。俺もそう思うしそう言ったんだが…

「はは〜ん、アンタ亜里沙ちゃんに、

一緒に勉強教えてください!お願いしますシヨウ先輩!

とか言われて鼻の下伸ばしてOKしたんでしょっ!」

現場見てたんかお前は!

俺は内心の動揺を隠す為に少し強い調子で答えた。

「落ち着けて！誰も亜里沙にデレデレしてなんかいないだろっ！  
そうじゃなくて、約束だから仕方なく、って言ってるんだよ！

お前だって、もし俺が約束してた事を破ったら怒るだろ！」

俺の言葉に遥が更にエキサイトしてくる。

「何言ってるのよ！亜由美を悲しませる直前に、

亜里沙ちゃんとデレデレ勉強するなんて酷いじゃない！

なにその最低男！信じらんないっ！！」

だー！ー！ー！！

「だから、そりゃ状況が逆だっつってんだろっ！

亜里沙と約束したのが先で、亜由美の件はある意味イレギュラー

だろうが！」

「ーっ！」

遥はなにやら何かを言おうとして口をパクパクさせていたが、  
怒りの余り言葉にならなかったのか、ボロボロと涙を零しだした。

…やべえ、泣かせちゃった！

「何よ何よ何よ何よ何よ何よ！！」

シヨウのバカバカバカバカバカバカ！！！！

あたしがいるのに、なんで亜里沙ちゃんとイチャイチャすんのよ  
うっ！！！！

最後は完全に涙声で、擦れるような感じだ。

「あたひが…ひいんっ！！………！！！！」

顔をくしゃくしゃにして、だーっ和大粒の涙を零している。  
まずい！何とかしないと！！

「遥、落ち着けて！別に亜里沙と浮気をしようってんじゃないだ  
ろ！」

へんな嫉妬するんじゃないよ!!」

咄嗟に出た台詞は、自分から見ても最低レベルだった。

「バカバカバカバカあつ!!」

シヨウなんか大っキライ!!うあーーーーん!!」

遥は大口を開けて大泣きしだしてしまった。

「あーーーーん!ふえーーーーん!!」

そして両腕をぶんぶか振り回して俺を殴りだす。

「いてててて!止める遥!」

俺はなんとか遥の両手を掴んで大車輪ロケットパンチを止めた。

「離せバカシヨウ!大っキライ!!」

遥が目をバツテンにして叫ぶ。

「俺はお前が大好きだ!遥!愛してるんだ!」

「ふえ...?」

涙と鼻水でぐしょぐしょの顔をした遥がピタッと止まった。

「遥、お前以外の女の子なんて眼に入らないんだ!」

「.....」

遥がぐすぐすと鼻を吸る。

俺は手を離し、ティッシュの箱を取って渡してやる。

「...ホント...?」

ティッシュを二枚出してちーん!と鼻をかみ、

ひつくひつくとしゃくり上げながら俺を見詰める。

「ああ、ホントさ。お前がそんなに嫌がるなら、亜里沙との約束は断るよ。」

だって、俺の一番大事なお前を泣かせてまでする事じゃないからな。

「ゴメンな、遥」

「シヨウ...私も...ごめんなさい、大嫌いなんてウソ。」

ホントは大好きなんだから!ゴメンねシヨウ!」

遥がまた涙をポロポロと零す。

「ああ、知ってるさ。お前が俺にゾッコンなのはね」  
「バカ！シヨウなんて大好きなんだから！！」  
俺に抱き付いて泣き出す遙。

ふう、ヤバかった…また親父カタチに叱られる所だったぜ…

「…ねえ、シヨウ…」

遙が甘えた声を出す。

遙を見ると、きゅっと目を瞑って可愛らしく唇を突き出している。

目を瞑った拍子に、溜まっていた涙が一気に流れ出して、

つやつやした美味しそうな頬に幾筋かの流れを作っていた。

俺は頬に流れた涙の川をそっとキスで拭う。

「ああん…」

遙が嬉しそうに声を上げる。

丁寧に両頬の涙を拭った後、俺の大好きなアヒル口をそっと奪った。

「んふ…ん…」

遙が微かに喘ぐ。

俺たちはしばらく、お互いの暖かい唇を堪能した。

「シヨウ…ね、お願い…」

ふっと口を離して、再び遙が甘えた声を出す。

俺は遙を抱き締め、電気を消した。

翌朝、目を覚ますと遙が俺の顔を見ながら微笑んでいた。

「おはよう、遙」

「おはよ、シヨウ」

にっこりと笑う遙の可愛さに見惚れてしまう。

「今、何時だ？」

「五時半くらいよ。そろそろ起きなきゃね」

そうだな、そろそろ支度しなきゃな…

「って、そうだ遙、お前昨日俺んト泊まるって言ってきたのか

？」

遥がふふ、と微笑む。

「大丈夫だよ。ママに言っけてきてるから」

そうか…一安心だな。

「ね、シヨウ。週末の亜里沙ちゃんの事なんだけど」

「ああ、今日中に断つてくるから大丈夫」

ふるふると首を振る遥。

「違うの。約束通り行って来なさいよ。今から断つたら可哀想だもん」

え？なんだって？

「…良いのか？昨夜はあんなに怒ったのに」

遥が少し赤くなり、ぷうつと膨れる。

「だって、昨夜は言い出すタイミングが悪いんだモン。

あたしだってシヨウが浮気しない事なんて解ってるよ」

俺はちよつと膨れた可愛い娘の頬つぺたにキスをした。

「今度からは気を付けるよ」

「バカ…大好き…」

俺たちはもう少しだけ、穏やかな朝の時間を楽しんだ。

委員かい？

キーンコーンカーンコーン…

いつもの通りに遙と登校し、朝練に行く遙を見送ってから教室に入り、つい眠り込んでしまっていた俺は

HR開始のベルで目を覚ました。

「えー、今日は文化祭企画委員を選出する。

ウチのクラスだけまだ決まっていけないので、この時間中に決めてしまおう」

担任浅井先生がそんな事を言っているのをぼーっと聞く。

あれ、こないだ決めてなかったっけ…？

「まずは一応、我こそは、という自推者を募集するが、どうだ？」  
しー…

まあ、そりゃ誰も居ないだろうな。

文化祭企画委員って、結構遅くまで残って準備したり

他校と連絡取ってお互いに協力したりして大変みたいだしな…

まあ、唯一魅力的なのは、ウチの学校と姉妹校である

名門女子高、西園学園高校とコミュニケーションにしろする時に

あっちのお嬢様達とお知り合いになれるチャンスが有るって事だが、今まで長い歴史でコンタクトに成功したのは僅か数人って噂だしな。なんつっても、噂では親の年収が一千万超なのと偏差値がウチの倍近くないと

入学できない超名門お嬢様校だからな…

まるで誰かに解説するかの様な思考回路でほけつと外を眺めながら今週末の亜由美の件を考え出した俺は、先生と司会進行を交代した

委員長の

「では、\*\*君でいいと思う人は手を挙げて下さい」という声に何も考えずに挙手していた。

「それでは、満場一致により当クラスの文化祭企画委員はシヨウくんに決定しました！」

パチパチパチパチ…

俺も一緒になって拍手しながら、なにか違和感を覚える。

…あれ？

「それではシヨウ君、前に出てきて抱負を一言語って下さい！」

委員長の分厚いメガネがキラッと光り、俺を見詰める。

…つて、をい!?

「はああ!?!なんで俺が!?!」

がたーんと立ち上がり、思いっきり叫んだ俺に教室中が大爆笑に包まれた。

「ぎゃははははは!!なに言ってるんだよシヨウ!お前自分で手え拳げてたジャンか!?!」

前の席の神谷が半分泣きながら爆笑している。

「しかも、拍手までしてただろ!?!」

二つ隣の小池も大笑いだ。

おいおいおいおいおいおいおい!!

「ちょっと待ってクダサーイ!!」

俺聞いてなかったんだ！無罪だ！不可能だ！  
再選挙を要求する！！」

十分後、俺は委員長から渡された「文化祭企画委員会議スケジュール」表を

呆然と見詰めながら途方に暮れていた。

そっぴゃ、亜由美も企画委員になったって言うってたな…

いろんな意味で気まずいじゃないか、おい…

すでに今日の放課後から委員会出席かよ…

バイトにはなんとか間に合いそうだけど…

ちくしょう、頭痛えよマジで。

昼休み、遙と亜由美のクラスに行き、ドアから覗き込むと直ぐに亜由美が俺に気付いた。

一緒に弁当を食べている子にちょっとまっててね、と言ってこちらに掛けて来る。

「シヨウくん！どうしたの？

遙ちゃんはちょっと出てるけど」

嬉しそうに微笑みながら俺を見詰める亜由美。

遙、居ないのか。どうしたんだ？

まあ、とりあえず話を進めておくか…

「ああ、お前文化祭企画委員だったよな？

実は、俺も企画委員にされちまってさあ…」

俺の言葉に亜由美が嬉しそうにパン！と手を打った。

「え！ホント！やったあ！一緒に仕事できるね！」

本当に嬉しそうに微笑む亜由美に、今週末の事を言い出すのが辛くなる。

だが、しない訳にはいかない！

俺は自分に気合いを入れ直して話を続けた。

「ああ、よろしくな。」

後、今週末、お前の家にお邪魔したいんだけど……」

「え？どうしたの？もちろん、私は大丈夫だけど、一応まどかさんとパパに聞いてみるね！」

少し戸惑ったようだが、嬉しそうに答える。

遙も一緒に行くって事、言わない方が良いのかな……

俺が一瞬迷った時、うしろからドン！と勢い良く背中を叩かれた。

「どうしたのシヨウ？何か有ったの？」

元気な声に振り向くと、にぱつとアヒル口で笑った遙が立っていた。

これは、グッドチャンスだな。遙なら上手く合わせてくれるだろ。

「ああ、今週の土曜の夜、亜由美の家にお邪魔しようかと思って頼んでたんだ。」

お前も一緒にどうだ？」

……ちよつとワザとらしいかな……

「え！そうね、まどかさんやおじさんにもしばらく会ってないしね！」

ね、亜由美、良いかしら？」

上手く合わせてくれる遙だが、ちよつと無理矢理な感は否めないな……

「え、ええ。大丈夫だと思うわ。今日、まどかさんに聞いて見るね」

なんとなく不思議そうな顔をする亜由美。

「お、ヤベ、昼休み終わっちゃうな。じゃあ、また放課後委員会でおうな！」

おうな！」

俺はわざとらしく時計を確認して逃げる様に走り出す。

ふと見ると遙が苦笑しながらウインクしている。

よし、フォローは任せたぜ遙！

俺も不器用にウインクして、急いで教室へと戻り始めた。



## 委員会？

あ”ゝ、…放課後、かあ…

行きたくねえな、企画委員会…

だがしかし、半ば無理矢理とは言え決まったからにはやらなきゃな…  
自分で自分に拳手してたのはなんぼなんでも大間抜けだったよな…

あ”ゝゝゝゝ…

「シヨウ先輩、大丈夫ですか？」

ひよい、と俺の目の前五十センチに愛らしい笑顔が現れる。

「うわっ！亜里沙か…脅かすなよ…」

当校一年生N.O.1の人気を誇る美少女が悪戯っぽく笑う。

「だってえ、先輩が「あ”ゝ」とか妙な呻き声上げながら歩いているから、

みんなちよつと恐がってましたよ？」

やべえ、また声に出てたか…これで更に変人の噂が広まるよな…

まあ、確かに俺は変人だがな。

「ああ、ちよつと頭の痛いことが有ってな」

「どうしたんですか？若宮先輩とケンカでもしたとか？」

心配そうに聞いてくる亜里沙。

「ん、そっちは大丈夫。ラブラブだから無問題」

亜里沙がふう、と溜息をつく。

「な〜んだ、残念！」

「おいおい…」

苦笑いしながら亜里沙のおでこをつん、と突く。

「きゃん！シヨウ先輩に怒られちゃったあ…」

ぺろっと舌を出し、少し拗ねた様に上目遣いで俺を見る。

…可愛いじゃねえか、ちくしょう…

だ、だが遥の拗ねた時のアヒル口の方が可愛いがな！！  
一瞬、遥のジト目が脳裏を過ぎって自分に言い訳する。  
なにやってんだ俺は…

「それで、頭の痛い事ってなんですか？聞いちゃマズイ事ですか？」  
亜里沙が小首を傾げながら聞いてくる。

…ちくしょう、可愛いじゃねえか…

い、いや、もちろん遥の同じポーズの方が可愛いに決まってるがな！  
…なんで俺は自分に言い訳して以下略。

「あ、ああ。今朝のHRホームルームで文化祭企画委員にされちまったんだ。  
しかも、話を良く聞いてなかったんで自分で自分に賛成票を入れ  
ちまってさ」

くすつと噴き出す亜里沙。

「ふふ、先輩らしいですね！でも、失敗したなあ」  
はあ？なにが？と俺が聞くと亜里沙が微笑みながら続けた。

「今朝、うちのクラスでも実行委員を決めたんです。  
もしシヨウ先輩が委員になってるのを知ってたら、私も立候補し  
たのに。」

そうすれば、シヨウ先輩と一緒にお仕事出来ましたね」  
少しはにかむ様に微笑む亜里沙。

…可愛いじゃねえか以下略。

「まあ、そう言う訳だからこれから委員会に行く所さ。」

あ、そうだ、今週末は予定通りでいいのか？」

亜里沙が嬉しそうに微笑む。

「もちろんです！お願いします！」

ペコリ、と頭を下げる。

長いツインテールがふわつと宙を舞い、フローラルの香りが漂った。俺は一瞬デレ、つとなったが直ぐに気を取り直して

「ああ、じゃあ週末な」

と右手を上げてスタスタと歩き出した。

さつきから殺気満々で俺を突き刺す視線の方向へと…

廊下の角を曲がると、そこには天井まで届きそうな怒りのオーラを身に纏った

我が最愛の娘がジト目とアヒル口をしつかりと現出させながら仁王立ちしていた。

…こ、恐えよ…

しかし、弓道部の袴姿の仁王様は、後ろに同じく袴姿の後輩を三人ほど連れていたので

爆発するワケにいかずに破裂寸前の風船の様になっている。

「あゝらシヨウセンパイ、おモテになってよろしいわねえ？」

俺は平然としたフリで軽く受け流す。

「ああ、たまにはね。お前も可愛い後輩連れて、相変わらずモテてるよな」

後ろに控える女の子二人と、なよつとした男一人ヤローがきゃっきゃと騒ぐ。

つて、男が女の子と似たような声できゃあきゃあ言っくんじやないっつーの。

「まゝね！あたしは人望有るし〜？」

腰に手を当ててくいつと胸を張る遙。

大きな胸が強調された袴姿はかなりエロく、俺は昨晚の可愛い遥の姿を思い出して一瞬にへら、としてしまう。「何Hな顔して笑ってんのよう!」

「シヨウセンパイ、西村さんと仲良いんですね」  
女の子の一人が興味津々と言った風に聞いてくる。

その瞬間、遥のおでこに青筋が一つ、ピクウっ!!と立った。

「いや、別に仲が良いって程じゃないさ」

俺の必死の答えにもう一人の女の子が追い討ちを掛けて来る。

「え、でも、「コイツう」見たいな感じで西村さんのおでこ突いたりして、

ラブラブカップルそのものに見えましたけどお〜?」

…止めてくれ、マジで…

う、ん、ひーふーみーよー…五つ、か。

遥の顔に浮き出ている青筋の数を数えてみる俺。

よし、ちよつと落ち着いたぞ。寝れない時の羊さん数えの要領だな。「バカ言つなよ!あの亜里沙と俺がカップルだなんて事が有る訳ないだろ!」

怪しげなアメリカ人の様なオーバーゼスチャーで両手をバンザイさせる。

よっし、これで完璧だ!

「きゃ〜!亜里沙、だつてえ!!」

「わあ!名前呼び捨てなんだ〜!」

「そんな!本当にお付き合いらしてるんですかあ?」

…ふっ…墓穴、つてヤツだな…

既に遙の顔自体がでっかい青筋の様になっており、プルプルと小刻みに震えている。

…じ、恐えよ…マジで…

天誅？

「ねえ、シヨウ。ちよつと話が有るんだけどお〜？

あ、あんた達、先に道場行つてね」

俺には般若の表情で、後輩たちには菩薩の表情で言う遥。  
けっこう器用に使い分けやがる…

「はい」

女の子二人はハモつたが男子生徒は黙つて俯いている。

「涼クン、行こ」

女の子が声を掛けても、男子生徒は下を向いたままだ。

「…どうしたの、涼クン？」

遥が不審気に声を掛けると、涼という男子生徒がパツと顔を上げた。

…なんだ、なんで俺にガン付けてんだ、この涼<sup>ガキ</sup>？

「シヨウ先輩！先輩は西村さんとお付き合いしてるんですか！？」

突然大声を出す涼に驚く俺たち。

「！涼クン、もしかして…？」

遥がピン！と来た様な顔で呟く。

「…もしかして!?!」

女の子二人がハモる。

「あ…！あの、その！」

あからさまに焦る涼。

ん？なんでそんなに焦るんだ？

「もしかして、涼クン！好きなんですよ！！」

遥が、犯人を追い詰めた名探偵の様に叫ぶ。

大きな瞳をばあつと見開き小鼻をぶくつと膨らませ、



ん？…なんだと？この娘<sup>ガキ</sup>…

「そうよ！あんな田舎者の事好きだなんて！

嘘だつて言つてよ涼クン！」

カチーーン！！

「おい、お前ら！なんだその言いぐ」

「あんた達！何てこと言うの！」

あたしはそんな事言うような子に育てた覚えはないわよ！…」

俺の言葉を遮つて、遙が女の子を怒鳴った。

「…ごめんなさい」

シヨボンとなり、謝る二人。

「いい？例えどんなにムカついても、相手の居ない所で好き勝手言うなんて

絶対ダメなんだから！相手を目の前にして、それでも今のセリフを言えるの？

亜里沙ちゃんがブリツ子じゃない事位、解ってる筈よ」

…うん、カッコ良いね遙ちゃん。

後でイイコイイコしてあげよう。

「はい、すみませんでした先輩…」

「解れば良いの。さ、先に行つてなさい。

後、今の事は皆には内緒にしてね。涼クンの為にも」

「はい！」

「涼クンも一緒に道場に行つてなさい。

後で相談には乗つてあげるから」

優しく言う遙に、涼も頷く。

「…はい、解りました。ありがとうございます」

涼は遙と俺にペコリ、と一礼して女の子達と一緒に道場へと去って

行った。

「うん、青春だねえ……」  
しみじみと言う俺。

むぎゅ

「痛え！何すんだよ遙！」

いきなり耳を摘まれて悲鳴を上げる。

「うっさい！ちよつとこつち来なさいよ！！」

ありゃ、また鬼の様な表情に戻つちまつてるよ……

遙に耳を引つ張られ、手近な第三図書館の司書室に引つ張り込まれた。

ウチの学校には図書館が三つあり、第三図書館は専門書がメインで普段は使う人もあまり無く、司書室にも常駐している司書は居ない。ピシャつとドアを閉め、鍵を掛ける。

「お、おい遙……？」

タタタと駆け出し、図書室との間のドアをガラツと開け、図書室に誰も居ない事を確認して

ドアを閉め、さらに鍵を掛ける。そして俺を見て、ニターリと微笑んだ。

……こ、怖えよ……

「ぬっふっふっふ……ここなら邪魔は入らないわねえ……」

シヨウウ、あんた何でこんな時間にまだ校内に居るのかしらあ？」

ぬふふふ、と不気味な笑い声を立てつつじりじりと近付いて来る。

なんでそんな前屈みで、試合開始寸前のアマレスの選手みたいな体勢になつてんだよ……

「はあ？な、何のことだ？」

俺は遙の妙な気合に押されて、じりじりと後退りながら答える。

「しらばっくれんじやないわよ。これから亜由美か亜里沙ちゃんと会う積もりなんでしょ!!!」

…ああ、そう言えば遙は俺が文化祭企画委員にされた事をまだ知らないんだっとな。

「あの子、実は俺は…」

「問答無用！天ちゅう！」

遙が叫び様にバツと飛び掛って来た。

「のわわっ!!」

運動神経バツグンの遙に前フリ無く飛び掛られた俺は、遙を抱き止めながら後ろに倒れこんでしまう。

「むふふふ、天ちゅう…」

目の前に遙の大きな瞳がキラキラと輝いている。

遙はふつと瞳を閉じて唇を重ねて来た。

「んむ…んん…」

少し喘ぎながら俺の首に手を廻し、むぎゅっとくっつく。

キーンコーンカーンコーン…

鳴り出したチャイムが終わるまで、俺達は唇を重ねたままだった。チャイムが鳴り終わり、ふうつと唇を離す遙。

柔らかな頬は紅く上気し、大きな瞳は少し濡れている。

…可愛いな、やっぱ…

「んふ、天ちゅう」

愛らしいアヒル口を晒しながら、遙がむきゅっと抱き付く。

「これから企画委員会なんでしょ？知ってるモン」

…知ってんならへんな絡み方すんなよ…

俺の眩きにアヒル口を尖らせる遙。

「だってえ、ウチのクラスの委員は亜由美だもん！」

シヨウと亜由美がイチャ付きそうでムカついたのっ！」

はいはい、解りました。

「…亜由美とあんまりイチャ付いたらホントに怒るからね？」

へーへー、解りました。

「なんか、心が籠ってなむっっ！」

俺は更に尖ったアヒル口に突然キスをした。

「む…んん…」

遙は少し驚いたが、幸せそうに瞳を閉じてむぎゅっとなんかに抱き付いてきた。

激写!?

唇をそつと離すと、

「ああん…もうおしまいなのぉ?」

と上目遣いに俺を見詰めながら甘えた声を出す。

「続きは後でな」

俺は遥のスベスベなほっぺに軽くキスして、軽い体を抱きながら立ち上がった。

「きゃう!」

可愛く悲鳴を上げ、俺に搔きつく遥。

その姿が愛らしく、俺は溜まらずにもう一度遥のアヒル口にキスをした。

パシヤツ!

瞬間、眩い光が俺達を刺す!

「なんだあつ!?!」

「きゃあつ!?!」

驚きながら発光源を探して辺りを見回すと、一番奥の書架から

メガネを掛け、一眼レフカメラを持った女生徒が姿を現した。

「あなたは!」

遥が叫ぶ。

メガネの女生徒がニヤリ、と笑う。

「うふふ、調べ物してたらとんでもないスクープ写真が手に入ったやつだ」

悪っぽい微笑を浮かべながらメガネが呟く。

「…!最悪!なんで…」

俺の腕の中で遥が唇を噛む。

遙をそつと降ろし、俺は女生徒につかつかと歩み寄る。

「な、なによ……！何をする積り！？」

女生徒が鼻白む。

俺は女生徒をじつと見詰めながらハッキリと言った。

「あんた誰だっけ？」

一瞬空気が固まり、時間が止まる。

今だっ！！

パシッ！

俺は女生徒の手から一眼レフをひったくった。

「ああっ！！」

女生徒が一瞬戸惑った後に声を上げるが、俺は既に女生徒から離れている。

「ナイス、シヨウ！」

遙が指を鳴らしながら歓声を上げた。

「ああっ！！ドロボー！！」

女生徒が叫ぶが、俺は黙ってフィルムを巻き戻してカメラから取り出す。

「何言つてんだ。断りなく人を写すつてのは、肖像権の侵害つて言う犯罪になるんだぜ」

俺は、新聞配達のバイトが切っ掛けで知り合った新聞社の記者さんから聞いた知識を披露した。

「へえ〜！」

遙が感心した様に嘆息する。

「……っ！でも、私のカメラを取り上げたのだって泥棒じゃない！」  
女生徒が悔し紛れに叫ぶ。

俺は女生徒に近寄り、フィルムを抜いたカメラを手渡した。

「カメラは返したぜ。後、フィルムはネガプリントだけして、俺達の写った所だけ切り取ってから返すよ。プリント代金は、まあサービスしとくさ」  
ふるふると悔しそうに震える女生徒。

「…だけど、私があるた達のキスシーンを見たのを記事にすれば同じ事よ！」

…記事？

「記事って、なんの事だ？」

メガネと遥がピシ、と固まる。

「…もしかしてシヨウ、ホントにこの娘の事知らないの？」  
遥が呆れた様な声を出す。

「知るかよ。他のクラスの女の事なんか」  
がくう、と遥が突っ伏す。

うん、相変らずのリアクション大魔王つぶりだなあ…

「あんたって、時々大ボケかますわよね…」

すつくと立ち上がり、ポンポンと俺の肩を叩く。

「いい、シヨウ？この人は二年C組の川崎明美さんって言って

新聞部所属のスcoop記者なの。

彼女に秘密を暴かれたりスcoopされて、大変な目に遭った生徒がたくさん居るの！」

遥が吐き捨てるように説明する。

珍しいな、遥がこんな言い方するなんて…

「ふふ、そうね。若宮さんにはお世話になってるわ。

例えば、芳野先輩とのスcoopとかで…」

ピクツと反応する遥。

俺の腕を掴み、カタカタと小刻みに震え出す。

俺は遥ををぎゅっと抱き締めて

「気にするなよ」と耳打ちし、すっと遥から離れて川崎に近づく。

「な、何よ…」

俺の怒気に気圧されて後退る川崎を壁まで追い詰める。

「なあ、俺の一番大切な遥を悲しませたりしたら、そのお礼は丁重にさせてもらうからな」

極上の微笑を浮かべながら川崎に優しく言う。

「シヨウ…」遥が咳く。

「な、何よ！脅迫する積り!？」

川崎が悲鳴に近い声を上げる。

「俺はただ、俺の平穏な日々を壊されたくないだけだ。

お前だって自分の大切な人や日常を壊されたくは無いだろ？

それを解って欲しいだけさ。

心配しなくても暴力なんて振るわないさ。

死んだ親父から、女の子に暴力を振るう奴は男じゃないって言われたからな」

俺はそれだけ言うと、壁際から離れた。

川崎がずるすると壁に背中を付けたままへたり込む。

「頼むぜ、川崎。俺達をそつとしいてくれ」

俺は遥の背中に手を置き、

「さ、行こうぜ。部活遅れてるだろ」

と声を掛ける。

「うん！シヨウ、大好き…」

遥が涙を浮かべながら俺を見上げる。

すげえキスしたいが、ぐつと我慢する。

「じゃあな、川崎」

俺は司書室の鍵を開け、遥を促して廊下へと出た。

「それじゃあ、遥。俺は帰ってるから」

遥が潤んだ瞳で俺を見詰めている。

「うん…今日はシヨウの部屋に行くからね。ご飯、持ってく」

「ああ、待ってるよ」

遙は名残惜しそうにしていたが、ぶんぶんと手を振りながら駆け出していた。

さて、帰るか…っと、待てよ？何か忘れている様な…？

ああっ！やべえ！企画委員会忘れてたあっ！！

俺は慌てて会議室へとダッシュした。

## 交流委員？

カラ…

会議室のドアをそーっと開け、忍び足で入室する。

「コラっ！遅いぞ、少年！」

どわあっ！！

遙や亜由美の担任、岡田由香里先生の色っぽい声が部屋中に響く。室中の視線が俺に集中する。

「…遅れてすみません」

ふと見ると、窓際に腰掛けた由香里先生がニヤニヤしながらこっちを見ていた。

「えー、あなたは何組の委員かしら？」

壇上に立っていた女生徒が俺に声を掛けて来る。

「あ、シヨウくんはE組よ」

と、こちらを向いて座っていた亜由美が女生徒に言う。つて、亜由美、やっぱりなんか役やらされてるのか…

まあ、昔からそうだよな、お前は。

「シヨウくん、適当に空いている席に座って。」

私は文化祭企画委員会副委員長の二年D組の橘です。

今日は委員長の草薙くんがお休みだから代理で議長を務めています」

簡単に自己紹介等をする橘。

「それでは、続けます。現在の議題は、委員の役割分担についてです」

亜由美が俺を見てウインクしてくる。

ノートに鉛筆を走らせている所を見ると、どうやら書記の様だ。

俺は亜由美に微笑みを返すと、空いている席に座った。

「さて、役割分担は以上になります。

シヨウくんも黒板に有る自分の役を確認して見て。

何か意見のある人は挙手してください」

黒板には各委員の役割分担表が書かれている。

え、と、俺の名前は、と…

姉妹校交流委員？なんだそりゃ？

「議長、その姉妹校交流委員会ってなんだい？」

俺の質問に橘が答える。

「ええ、これはウチの姉妹校である西園学園にしその高校の文化祭企画委員会と

連絡を取ったり相談したりして、合同イベントやお互いの文化祭にする出張展示等の

打ち合わせをする係りよ。シヨウくんと岬さんにやってもらうから」

「ハア！？そんな、なんで俺が！？」

俺は抗議の声を上げる。

と、室中の男子生徒が騒ぎ出した。

「議長！本人が嫌がつているんだからやっぱ俺がやります！」

「何言つてんだ！ここはシヨウウの代わりに俺が！」

「いや、中学でシヨウウと同級だった俺がやる！」

「シヨウウの親友の俺が泣く泣く代わるぜ！」

目を血走らせて大騒ぎしている男共。

女子はイヤそうな目で男子を睨んでいる。

…なんなんだ、こいつら…？

「シヤラップー！！」

由香里先生の怒声にしーんと静まりかえるヤローども。

由香里先生がやれやれ、といった風に溜息をついた後、俺に向かって話し出した。

「シヨウ、今の騒ぎを聞いただろう？」

こいつ等に任せたら、文化祭どころか合コン企画委員会に成りかねない。

さつきもこの騒ぎになって、結局私と議長の権限でキミに決めただ。

その点、キミなら西園の女子にも手を出す心配が無いからな  
意味有り気な視線を俺に送りながらウインクする先生。

「そうよ！硬派なシヨウくんならあんたたちみたいにイヤらしい考えを起こさないよね！」

「そうそう、苦学生のシヨウくんなら、ナンパなんかしてる暇無し！」

…ほっとけ。

「と、言う訳で、交流委員にはシヨウちゃんと岬さんをお願いします  
議長の宣言に男共はブーイング、女子からは拍手が起こる。

「頼むぞ、シヨウ、岬」

「…はい…」

由香里先生に言われ、渋々承知する俺。

「はい、解りました。よろしくね、シヨウくん」

俺の斜め前に座っていた見覚えの無い女子がこちらを振り向きながら微笑む。

「あ、ああ。こちらこそよろしくな」

俺は岬が差し出した手を握り、握手した。

「議長！次の議題に入りましょう」

突然、亜由美の声が響く。

ふと見ると、なんだかちよっぴりぶすくれている様だ。

「あ、はい。じゃあ次の議題は、正門に設置するモニメントについて…」

俺は橋の声を聞き流しながら、ちよつと面倒な事になつちまつたと頭を痛めた。

「では、本日の企画委員会を終了します。岡田先生、何かありますか？」

由香里先生に聞く橋。

「うん、これと言って無いが、各自しっかりと受け持った役と業務を遂行してくれ。」

後、何か質問や相談が有るなら遠慮せずに委員長や私に言ってくる。何かトラブルりそうになったら、可及的速やかに報告する様に。以上！」

「それでは、次の会議は明後日の放課後に行います。起立！礼！」  
ガタガタと席を立ち、帰りだす生徒。

「シヨウくん、帰りましょ」

亜由美に声を掛けられ、

「ああ、帰ろうか」と答えたと同時に

「あ、シヨウ、キミはちよつと残ってくれ」

と由香里先生に呼び止められた。

「私、待つても良いですか？」

と聞く亜由美に

「スマンが、シヨウと二人で話があるんだ。

誘惑するわけじゃないから心配するな」

とウインクする由香里先生。

「…はい、じゃあ駐輪場で待つてるね！」

と微笑み、亜由美は部屋を出て行った。

俺は由香里先生の近くに行き、椅子に腰かける。

「さて、キミを残したのは他でもない……」

由香里先生は意味有りげな表情で話し出した。

## 家庭訪問？（前書き）

こんばんは、作者の羽沢 将吾です。

いつもご愛読頂きましてありがとうございます。

自分の作品紹介や独り言、オリジナルショートストーリー等を掲載（予定）のブログをご紹介しますので、ご来訪頂ければ幸いです。

まだまだ何も整っていませんが、徐々に充実させて行く積りですので宜しくお願い致します。

アドレスは以下の通りです。

タグが使えないので直接リンク出来ず申し訳有りません。

<http://blog.goo.ne.jp/syogoo-hazawa>

## 家庭訪問？

「さて、キミを残したのは他でもない……」  
にやり、と色っぽい微笑を浮かべながら俺を見詰める由香里先生。

「他でもない……？」

俺は何事かと身を乗り出す。

「ああ、他でも無い。」

実は、芳野の事だ」

「芳野、つて、…芳野先輩ですか？遥の元彼で剣道部主将の？」

「ああ、そうだ。あの芳野だ。」

彼はな、遥にフラれてからかなり落ち込んでいてな……」

芳野先輩は遥にフラれ、めちゃくちゃ落ち込んでしまい  
部活も勉強もメロメロになっちまって、

お家の人から学校に相談が来ているとの事。

また、遥は何度か芳野先輩の家にお邪魔して

向こうの親御さんにも気に入られていたので、

突然、遥の話題に触れなくなった芳野先輩を見て親御さんは察し、

その件についても芳野先輩の担任と、遥の担任の由香里先生に問い  
合わせが有ったと。

「まあ、もちろん生徒同士の恋愛沙汰なんて、私達が口を出す事じ  
やないんだが……」

しかし、某国立大学推薦当確だった芳野先輩の成績がガタ落ちだと  
言う事で

先生方も放置する訳には行かなくなってきた。

「で、だ。芳野はまだキミと遙がラヴ。なのにはハッキリと感付いていない。

彼はただ単に自分が詰まらない事で遙を傷付けてしまって、それで遙に愛想を付かされてしまった、と思っっている。

更に幸いな事に、亜由美の事も有ってキミと遙は大っぴらにラヴしていない。

…私としてはキミと遙に大っぴらにラヴ。してもらう事は吝けちなかではないんだが、

とりあえず三年が学校に来なくなる三学期まで、キミと遙のラヴ。を表に出さないで欲しいんだ。

もちろん、これは飽くまでも事情を知る我々教師の勝手なお願いなんだがな」

由香里先生はそこまで言うとはひた、と黙って俺の目を見詰める。

…事情は理解したし、おそらく遙も理解するだろう。

しかし、週末の亜由美の事と合わせて、重ねて厄介な事になっちまったな…

だが、俺は俺の最愛の遙を護らなければならない。

「解りました。でも、遙にも話さないといけませんね」

由香里先生が頷く。

「ああ、もちろんだ。

それで、今週の土曜日にちよいとキミか遙の家へ家庭訪問して、遙のご両親を交えてお話をしたいのだが…

まあ、もちろんキミ等の進路相談も兼ねて。

キミの担任の浅井先生には既に許可は取ってある」

浅井先生、由香里先生に惚れてるからな…

「でも、すみません！土曜日はダメなんです。

実は、かくかくしかじかで…」

俺は今週末の亜由美の件を説明した。

「そうか、そつちはケリ着けるのか…」

それじゃあ日曜日の午前中はどうだ？

こつ言う事は早くした方が良いからな。

とにかく、今日、遥と遥のご両親にお話してくれ。

私も明日、直接電話するから」

「解りました。じゃあ、明日もう一度相談しましょう」

由香里先生が俺の言葉に頷く。

「ああ。色々大変だろうが頼む。

しかし、キミには遥が居るんだから大丈夫だな。

あ、後、キミを待っている亜由美には姉妹校交流の件で話してたと  
言って置きたまえ」

「はい！」

俺は力強く頷き、一礼して会議室を辞した。

自転車置き場に向かうと、俺の自転車の隣で亜由美が空を見ながら  
待っていた。

「あ、シヨウくん！お疲れ様。

ね、どうしたの？」

小首を傾げながら聞いてくる亜由美に、由香里先生に教わったとお  
りに答える。

「ああ、姉妹校交流委員の件で注意事項を幾つか話してたんだ」  
うふ、と可愛く笑う亜由美。

「そつか！そうよね、毎年毎年の頭痛のタネだもんね」

「そんなになのか？」

不思議そうに聞く俺に、亜由美がふつと溜息を付く。

「そうよ！だって、相手は西園学園よ？」

この付近じゃ最高のお嬢様学校で、みんな美人ばっかだし。もう男子なんか血眼になっちゃって…

でも、向こうは結構お高く止まっちゃってて上手くいったなんて話は殆ど聞かないけどね」

むう…って事は、嫌味な女子を相手にしなきゃならないって事が…俺は腕を組みながらむう、と唸る。

「…でも。シヨウくんみたいなタイプは珍しいから、意外と興味持たれるかもよ？」

亜由美が俺の顔を下から覗き込む。

俺の看病をする為に切ってしまった艶やかな髪も結構伸びてきて、さらっと流れてキラキラ光る。

ちよっとドキっとしてしまい、俺は赤くなった顔を見られない様に後ろを向いた。

と、こちらを見ている影を二つ見つけてしまう。

一人はグラウンドから、野球部のユニフォームを着た男。

もう一人は、校舎内、美術室から、ツインテールの娘。

二人とも、俺と目が合った瞬間にさっと身を翻して見えなくなってしまう。

「どうしたの、シヨウくん？」

不思議そうに聞いてくる亜由美にぎぎいっと振り向いて答える。

「いや、なんでもない。さ、帰ろうか！」

不審気な亜由美を促して自転車に跨り、俺達は下校し始めた。

家に帰り、とりあえずごろっと横になる。

バイク雑誌をペラペラと捲りながらふと週末の事を考える。

亜里沙の原付試験の勉強に、亜由美へ俺と遥の事を伝える件。

それに、芳野先輩の件で由香里先生と二人纏めての面談…

なんて盛り沢山な週末だ…

さて、今日はバイク屋でバイトだな。

とりあえず行くか！

俺は着替えてからメットとグローブを持ち、DT50に乗ってバイクへと向かった。

「なあ、シヨウ、お前小型受けて見たらどうだ？」

社長が試験場のコース図をヒラヒラさせながら聞いてくる。

「でも、教習代金なんて高くて出せませんし、どうせ教習受けるなら中型受けたほうが…」

戸惑いながら答える俺に、社長が笑う。

「違う違う、教習じゃなくて一発試験さ。」

中型の一発は無理だろうが、小型なら十分行けるぞ、きっと。

一発試験なら、一回に掛かる試験代は五千円位だしな」

そうか、それなら…でも、五千円かあ…

「そうですね…でも、ちょっと無理ですよ。一発で受かるか解らないし」

「何言ってるんだ！ウチの裏の駐車場で練習すれば大丈夫だって！

練習に使うバイクはお前のDTで十分だ」

うん…俺は展示してあるホンダ・VFR750Fにワックスを掛けながら考え込んだ。

「よし、お前は熱心にやってくれてるから、もし小型受かったらDTとコイツを追金無しで交換してやろう！」

社長は先週下取ったバイクのタンクをポンポンと叩きながら言った。社長の手の下には、スズキ・GS125Eカタナがシルバーの車体を光らせている。

「えっ！ホントですか!？」

俺は思わず叫んでしまう。

125とは言え、親父の形見の750カタナの血統を受け継ぐバイ

ク…

「ああ、本当だ。保険はDTのを持ち越せば良いし、

税金だって原付と年四百円しか変わらないしな。

それに、コイツならお前の可愛い遙ちゃんとタンDEM出来るぞ?」

遙とタンDEM!

俺は条件反射で叫んでしまった。

「受けます！やります!!」

社長はニヤリ、と笑いながら答えた。

「そうか、よし、じゃあ日曜から特訓だ。

一ヶ月で試験チャレンジするぞ。試験日に学校サボる言い訳考えとけよ?」

「！大丈夫です、来月には創立記念日が有ります!」

「そうか、そりゃ丁度良い。ようし、ビシバシ行くから覚悟しとけ

!」

「はい!」

俺は週末の事を一瞬忘れ、浮かれてしまった。

熱愛！！

「こんばんはあ！」

自動ドアが開き、元気な声で遙が店内に入ってきた。

「お、遙ちゃん、いらっしやい！」

社長が満面の笑みで声を掛ける。

「あ、社長さん、いつもシヨウがお世話になってます！」  
最高の笑顔で社長に微笑む遙。

鼻の下を伸ばし、にやけている社長を見て苦笑してしまう。

「ね、シヨウ！今夜ご飯食べに来るでしょ？」

VFR750Fにワックスを掛け終わり、道具を片付けている俺に近付き聞いてくる。

「ああ、ご馳走になりに行くよ。」

今夜のおかずはなんだい？」

遙がにーっとアヒル口を得意そうに尖らす。

「えへへ、今夜は肉じゃがだよ！私が作ったの！」

「お！マジか！お前の肉じゃが、メチャ美味くなってるよな、最近」  
俺の言葉に嬉しそうに頬を染める遙。

「これから、ちょっとお使いして帰るから！また後でね」

それだけ言うと、遙は社長に挨拶して店を出て行った。

「シヨウ、お前は幸せモンだぞ？」

あんな可愛い彼女が、ご飯作って待っててくれるなんて

俺の肩をどやしつけながら羨ましそうに言う。

「俺のカミさんも昔は可愛かったんだがなあ…」

今じゃあ、まるでピア樽みたいな体に」

「社長！！あとは中古のCBRを磨けばイイですか！」

俺は社長の言葉を遮って大声で叫ぶ。

「あ？ああ、まあ今日はもうイヤ。」

でな、ピア樽じゃなきゃあ子豚ちゃんみたいな体に」

「しゃちょー！ーうう！ー！じゃあそろそろ表のバイク入れまじょうかあー！！」

社長！後ろー！後ろー！ー！！  
俺は必死でアイコンタクトを図る。

「なんだよシヨウ！どうしたって言うんだ…あ？…あは、はは、は…」

社長はようやく気付いてくれた。

後ろで湯気を上げながら鬼の様な形相になっている奥さんに…

「お、俺の嫁さんもな、お前の遙ちゃんに負けない位胸がデカくて、もう超セクシーなんだぜ！俺はもうまいっちんぐさー！！」

むぎゅ

「痛ててててて！！かーちゃん勘弁！！」

耳を摘まれ、悲鳴を上げる社長。

それを見て震え上がる俺。

「あ、シヨウくん、表のバイクを入れちゃったら帰って良いからね」  
微笑みながら奥さんが俺に声を掛ける。

「シヨウ…助けてくれ…」

涙目の社長が俺を拝むが、もうどうしようもない。

俺は社長から目を逸らし、

「…表のバイク、入れてきますね…」

とだけ言っささつと逃げ出した。

「薄情もの…！！」

社長は耳を摘まれたまま、奥の事務所に連行されて行った。

DT50を飛ばして家に帰ると、電気が点いている。

「おかえり！シヨウ！」

D Tの排気音を聞いたのだろう、遙が飛び出してきて俺を迎えてくれた。

「ただいま、遙」

俺は抱きついてきた遙をぎゅっと抱き締めながら、メットとグローブを外す。

「早く！早くう！」

遙が俺の手を引っ張って部屋に駆け込む。

「おいおい、どうしたんだよ！何か有ったのか？」

玄関に入り、ドアを閉めてブーツを脱いでいると遙が背中に抱き付いてきた。

「もう！足りないの！全然！」

「ハア？何が足りないって？」

「何が足りないんだ、遙？」

部屋に入ると、既に布団が敷いてある。

「えーいつ！！」

「のわわっ！？」

後ろから足を引っ掛けられ、布団に倒れこむ俺。

ばふっ

布団の上に仰向けに転がると、遙がガバ、と覆い被さってくる。

「な、なんだなんだ！？なんなんだ！？」

混乱している俺の目の前に、アヒル口全開の遙の顔が有る。

「足りないの！ぜんっぜん足りないの！！」

「あの、遙さん。意味が解んないんすけど……」

すーっと遙の顔が近付いてきて、俺の唇に遙のそれがふわっと重なった。

「ん……」

少し喘ぎながら遙が俺の口の中に自分の舌を差し込んでくる。

俺達はお互いの熱を確かめ合いながら、しばらく口付けをした。

すうつと俺から唇を離し、幸せそうに微笑む遥。

俺は堪らなく愛しくなり、ぎゅうつと抱き締める。

「あん…」

可愛い声を出しながら、遥も俺をぎゅつと抱き締める。

「なあ遥、何が足りないんだ？」

俺はさつきからの疑問を口にした。

「んふ、シヨウが足りなかつたんだモン」

遥が俺の首筋にキスをしながら呟く。

可愛い…

俺は堪らなくなり、遥を下にするように体を入れ替えた。

「あん！もう、何する積りなのお…？」

遥が右手の人差し指を自分で噛みながら、挑発するように俺を見上げる。

左右の腕に挟まれた豊かな胸が強調されて、とてもエロチックだ。

「お前がして欲しい事をするだけさ」

「…シヨウは、したくないの？」

いじける様にアヒル口を尖らして聞いてくる。

「したいに決まってるだろ」

俺はそう言つと、遥の唇を再び奪った。

「あん…ひょう、だいひゅき…」

遥が喘ぎながら言う。

「俺もさ。愛してるよ、遥…」

そして、俺達はお互いを確かめ、愛し合った。

一時間後、一緒に風呂に入った後で遥の家に向かう。

「ただいまぁ！」

「こんばんは、お邪魔します」

俺と遙が玄関に入ると、トタトタと走り出てきたカナサリが俺を迎えてくれた。

「いらっしやい、シヨウ兄ちゃん！」

「お帰りハル姉〜！！」

ぴよん、と俺に抱き付く香奈。

「あー！カナ退いてえ！！」

出遅れて悲鳴を上げながら香奈にしがみ付く沙里。

「まあまあ、おいで、沙里」

俺は二人を左右に抱き上げる。

むむ、さすがに小学五年生を二人持ち上げるのは結構キツいな。

「大丈夫？シヨウ」

遙が不安そうな声で聞いてくる。

「ああ、これくらいどうって事無いよ」

ちよつとだけ、冷や汗を掻きつつ答える。

「シヨウくん、いらっしやい」

おばさんが包丁を拭きながら台所から現れた。

「あ、お邪魔します」

挨拶しながらリビングに入ると、おじさんが必殺仕事人を観ていた。

「お、シヨウ、良く来たな。」

…しかし、ウチの娘共は本当にシヨウが大好きだなあ」

両手にカナサリを抱き上げ、背中に遙を張り付かせた俺をみておじさんがしみじみと言う。

「なあ、シヨウ。お前は三人の中で誰が一番可愛いと思う？」

ピシッ！

空気が音を立てて固まる。

微動だにしない俺と遙と沙里。

「え〜、カナが一番だも〜ん」

一人、香奈だけが楽しげに答える。

「あ、そう言えば遥とシヨウの幼馴染の亜由美ちゃんも可愛いよなあ！

じゃあ、亜由美ちゃんも含めて、誰が一番可愛いと思う痛いよ痛いよ母さん痛いよ！」

すーっと現れたおばさんに耳を振り上げられて悲鳴を上げるおじさん。

おっさん…空気読めよ…

「さあ、食事にしましょ。

あなた、今日は晩酌のビール一本没収だから」

ギン！と睨まれて「…ハイ」と半泣きで答えるおじさん。

…社長といい、おじさんといい、なんで男つてのはこうも奥さんに弱いんだ…

「シヨウ、行きましょ」

俺の背中に胸をむぎゅっと押し付けて囁く遥。

俺も将来、遥の尻に敷かれるんだろーか…？

ま、遥の可愛いお尻に敷かれるならそれも良いか。

「ああ、お前の肉じゃが楽しみだな」

俺は遥に微笑むと、カナサリを抱えたまま美味そうな料理が湯気を上げているテーブルに向かった。

## 家族団欒？

「美味しい！」

遥の作った肉じゃがの美味さに思わず声を上げる。

「ホント！えへへ」

嬉しそうに照れ笑いする遥。

「ああ、本当に美味しいよ、遥。

こんなに美味しい肉じゃが、初めてだよ」

俺はお世辞じゃなく心からもう一度褒める。

「やん、もう！」

遥が赤くなつた頬を両手で押さえ、ぶんぶか頭を振る。

「バカみたい……」

沙里がぼそつと呟く。

コン

「痛っ！何するのぉ！？」

おばさんに軽く拳固で叩かれた沙里が口を尖らす。

「お姉ちゃんに何てこと言うの。謝りなさい！」

「……ごめんなさい……」

涙ぐみながら沙里が謝る。

「ふふ、良いのよ〜ん。今日のあたしは気分最高なんだから！」

にぱつとアヒル口を晒しながら遥が沙里の頭を撫で撫でする。

「……っ〜〜」

沙里は何とも言えない顔で箸を握り締めて唸った。

「なあ、シヨウ。お前のバイト、平日は夜七時までだよな」

おじさんが俺に聞いてくる。

「ええ、忙しいとき以外は基本的に五時から七時です」

俺が答えると、

「お前たちがこの家に帰って来たのは八時ちよい過ぎだったよな。それまで何やってたんだ？」

「え……」「！」「」

一瞬、絶句する俺と真つ赤になつて俯く遥。

「お？なんだなんだ？もしかしてシヨウの部屋でああー！母さんそのビールまだ残ってるう……！」

飲み掛けのビール瓶をおばさんにすいつと取り上げられて悲鳴を上げるおじさん。

「……あなた、その内娘達に総スカン喰らうわよ？」

おばさんにギン！と睨まれておじさんが涙目で謝る。

「ごめんなさいもうしません……！」

すつとビールをおじさんに返す。

「もう、しょうがないなあ……はいパパ、お酌してあげる」

遥が優しく言いながらおじさんにお酌する。

「おお、遥。お前は一生パパのものだぞ〜」

嬉し涙に暮れながら言うおじさん。

「それはイヤ。あたしはもうシヨウのものだモン！」

悔し涙に暮れ、ビールを一气飲みするおじさん。

「くううっ！こんなに早く娘を取られる気分を味わなきや行けないとはっ……！」

母さん、ビールお代わり……！」

「ダメです」

ピシャリと拒否され泣き濡れる。

「あなた、それに取られるワケじゃ有りませんよ。

元々シヨウくんはウチの家族なんだから、同じことですよ」

ぐっ……

俺は胸に暖かい塊が詰まるのを感じた。

ヤバイ！

そして、さっと俯いた。

込み上げてきた、嬉し涙を隠す為に…

「あ！シヨウウ兄ちゃんが泣いてるう！」

俺の顔を覗き込んだカナが大声を上げる。

「ち、違うぞカナ！これはジャガイモが胸につかえて苦しかっただけだ！」

思いつ切り墓穴を掘っちまう。

顔を上げると、おばさん、おじさん、カナサリ、

そして遥が微笑みながら俺を見詰めていた。

「…ありがとうございます」

俺はバツと立ち上がり、深く頭を下げた。

「何いつてるのよ！」

遥が俺の背中をバン！と叩く。

微笑みながら、おじさんが俺に語り掛けてきた。

「シヨウウ、お前はとづくに家族の一員なんだ。

まあ、その、なんだ、少し気が早いけど、遥をよろしくな。

ああ、でも赤ちゃんはまだ早いから避に痛いよ痛いよ母さん痛いよ…！」

おじさんがまたしても耳をぎゅうつと抓られて悲鳴を上げる。

学習しろよ、おっさん…

「ダメ！そんなの許さないんだから！！」

沙里が立ち上がりながら大声を上げる。

「シヨウウ兄ちゃんのお嫁さんになるのは私だもん！

ハル姉になんて、絶対渡さないんだからあ！！」



にっこりと笑いながらリビングを出て行く。

「香奈、お願いね」

おばさんが微笑みながら香奈に声を掛ける。

「まっかशीといて！ふおろーしてくるからね！」

天使の微笑を残し、香奈は二階へと上がって行った。

天国？

「さ、食事を続けましょー！」

おばさんの声で再びご飯を食べ始めるが、やはりどうもすっきりとはしない。

五分ほど会話も無くもくもくと食事をしていると、とたとたと階段を下りる音がして

リビングのドアがすいっと開いた。

「カナ、サリ…」

カナに手を引かれて真っ赤な目をしたサリが入ってくる。

「さ、ご飯を食べちゃいなさい。」

デザートにチョコプディングが有るからね」

「はい！」「…はい」

満面の笑顔で元気に返事する香奈と、ちょっと不貞腐れたような沙里。

ふと遥を見ると、苦笑しながら妹二人を見つめている。

今度、香奈になんかお礼しなきゃな…

俺も苦笑しつつ、食後のデザートにチョコプディングを思い浮かべてにんまりとした。

「なにやらしい顔で笑ってんのよう」

遥がいつものアヒル口で俺に突っ込みを入れる。

「ああ、おばさんのチョコプディングが楽しみでニヤけちゃったのさ」

俺の返事におばさんがにつこりと笑いながら

「うふふ、そう言ってくれると作った甲斐が有るわ。

シヨウくんは甘党だから良いわよね。

お父さんも、お酒なんか飲むよりお菓子とコーヒーにすれば良い

のこ」

ひいっと悲鳴を上げて泣きそうな顔になるおじさんを見て遙と香奈が嘔出す。

それにつられて、沙里も思わずくすつとなったが俺と目が合った途端にふつと下を向いてしまった。

やっば、少し時間は必要か…

俺はそう思いながら最後の一口のご飯と肉じゃがをかき込んだ。

おばさん特性のチョコプディングとコーヒーが用意されたリビングのテーブルで

テレビを見ながら寛いでいると、沙里が俺の膝の上に乗ってきた。

遙を見ると、苦笑しながら知らない振りをしているので、

俺は沙里の頭を撫でてあげる。

「…シヨウ兄ちゃん、ごめんなさい…」

呟く様に謝る沙里に

「気にするなよ。俺は沙里の事も大好きだよ」

と答えながら優しく抱きしめる。

「…もし、ハル姉に飽きたら私をお嫁さんにしてくれる？」

上を向いて俺の目を見ながら聞いて来る沙里。

一瞬迷ったが、

「俺が遙に飽きる事なんか無いから、その約束は出来ないな。

でも、もしそうなった時に、沙里が俺の事を好きでいてくれたら考えるよ」

と返すと、沙里は少し哀しげな、何とも言えない良い表情で微笑んでくれた。

「カナも抱っこ」

しみじみとした雰囲気を感じに破壊しながら口の周りにチョコプディングを

ペタペタに付けた香奈が沙里と俺の間にぐいっと割り込んでくる。

「私も抱っこ〜」

それを見た遙がむぎゅっとお尻を香奈と俺の間に割り込ませてくる。

何やってんですか遙は…<sup>おんえ</sup>

「ハル姉のおしり大きすぎ!」

沙里が口を尖らせながら文句を言う。

「へへ〜んだ、おしりまっ平らな沙里は羨ましいんでしょ〜!」

アヒル口でアカンベしながら沙里を挑発する。

「ふん!だ。おっぱいだっっておしりだっで大きければ良いってもんじゃないもん!

大きければ良いんなら、ママが最強じゃない!」

…確かに、おばさんの胸は遙から三割増し位の見た目だが…

「ふ〜んだ!あたしのおっぱいはまだまだ成長中だもんねーだ!

ママは99センチのGカップだけど、私はもう92のF有るんだもん!

それにママはウエストあんまり無いけどあたしはくびれてるもん!  
更にあと五年もたてばあたしのおっぱいはママを抜いて

Hカップには成長するに決まってキャイン!」

バン!と良い音を立てておせんべいの入っていた金属製の箱でぶっ叩かれて悲鳴を上げつつひっくり返る遙。

その後ろにはゴゴゴ、とか擬音が見えそうな雰囲気だにこやかに微笑みながら

箱をペタペタと平手で打ちながら立っているおばさんが居た。

…とっっても…怖いです…。

「遙、あなた来月のお小遣い半分カットだからね」  
頭を抑えながらさーっと青くなる遙。

「マ、ママ！幾つになっても綺麗なあたしの大切なママ！  
さっきのは失言なの！思っても居ない事をつい沙里の挑発に乗っ  
てよほゆっ！！」

バンバン！！

更に二発ぶっ叩かれ再びひっくり返る遙。

「うにゅ〜…」

半泣きになって俺にしがみついてくる。

「さ、そろそろ片付けましょ。

遙、洗い物と明日の朝食の仕込みやってね。

シヨウくん、今夜は泊まって行けば？

遙、客室に布団敷いて」

「…はい、ママ…」

しくしくと泣きながら廊下に出て行く遙。

「ほら、沙里と香奈は歯を磨く！」

「は〜い」ハモリながら出て行くツインス。

う〜む、おばさん最強だな…

「最強って、どういう意味かしら？」

にこやかに青筋立っているおばさんにヘッドロックされる俺。

「うええっ！声に出てましたかぁ！？」

思う様狼狽する俺の頭を小脇に抱え、グリグリとしてくる。

って、この、ホッペに感じる柔らかな感触はあっ！？

「おばさんのおっぱいもなかなかでしょ？」

艶っぽいウインクをしながら俺を見下ろすおばさん。

「あのそのこのどの…」

思いつきりキョドる俺。

「シヨウ！お前は母さんまで俺からもぎ取るのかあっ！！！」

おじさんの魂の叫びを聞きながら、俺は天国の様な感触を味わってニヤけてしまっていた。

恋してる！？

食事を終え、少し遙の部屋で話をしてから居間に戻り敷いて貰った布団に横になる。

遙の部屋から出る時に、

「…シヨウといっしょに寝たいよう…」

と涙ぐむ遙が可愛くて、そのまま遙の部屋で寝てしまおうかとも思ったが、

そこはぐつと堪えてキスだけして理性を保った。

「は、もう一回くらい…したかったな…」

等と不埒な事を呟きながら目を瞑ると、直ぐに眠気はやって来た。

と、うとうとしていたら誰か部屋に入ってくる気配がする。

「…ん？」

俺が半分寝惚けながら横を見ると、そこにはピンク色の可愛いパジャマを着て、

枕を抱いた沙里の姿があった。

「えへ、一緒に寝ても良い？」

恥ずかしそうに笑いながら甘えてくる沙里。

ふっ…仕方ないなあ

「ああ、良いよ。おいで」

布団をめくってあげると嬉しそうに入ってきて抱きつく。

沙里の体はちよつと冷えていて、ひんやりと心地よい感触だった。

「シヨウ兄ちゃんって、あつたかいね」

沙里が嬉しそうに言いながら俺の肩に頭を乗せる。

俺は沙里の肩を抱くようにして、

「おやすみ」と言っ。

「おやすみなさい、シヨウ兄ちゃん」

沙里も微笑みながら答えて目を瞑り、数分後には可愛らしい寝息を立てだした。

沙里の可愛らしい寝顔を見て思わず微笑みつつ、俺もすーっと眠りに落ちて行った。

翌朝、まだ眠っている沙里を布団に残し、一度自分のアパートに戻ってから新聞配達に出掛ける。

一時間半程の配達を無事に終えてアパートに戻ると、パジャマにジャケットを羽織った遙が待っていた。

「おはよう、来てたのか」

「・・・おはよ」

俺は遙を抱き締めながらちゅっとな軽くキスをする。

「・・・朝ごはん、家で食べよ」

お？なんだかちよつと不機嫌だな…？

遙の家に行き、朝ごはんをご馳走になっている時、

「シヨウくん、昨夜は沙里と添い寝したのね」

とおばさんがニコニコしながら言うてる。

「うん、沙里が来たから一緒に寝たけど…」

何となく意味有りげな視線を俺に向けるおばさん。

ふと遙を見ると、アヒル口をへの字にして納豆をかき混ぜている。

沙里はニコニコしながら目玉焼きをごはんに乗つけてしょうゆを垂らす。

…ああ、なるほどね。

苦笑する俺を見ておばさんも苦笑する。

「遙、いつまでイジけてるの？いいじゃないー晩くらい沙里にシヨ

ウくん貸してあげたって」

ぶつと納豆を噴出す遙。

「きゃん！ハル姉きちゃんいな〜！」

香奈が自分の目玉焼きの上に納豆を飛ばされて文句を言う。

「にゃ！あたひべつにひよんなこときになんてひてないもん！！」

納豆でむにゃむにゃした口で必死になる遙。

「口の中に物を入れたまま喋るんじゃ有りません」

おばさんに怒られ、むしゃむしゃごくんと飲み込んでから

「あたし、別にそんな事気になんてしてないもん！」

と文句を言い直す。

「ハイハイ、良いから早く食べて学校行きなさいね」

さらっとおばさんにかわされ、

「むー！ー！！」

とアヒル口を尖らし、ほっぺをぷくつと膨らます。

「遙、早く食べちゃって行くぞぜ」

俺は苦笑しながら遙に声を掛けた。

「・・・はい」

まだ不満げでは有ったが、遙はの食べかけのご飯をもくもくと食べ出した。

キーンコーンカーンコーン・・・

さて、昼飯か。

今日の弁当は、と・・・

俺が弁当の蓋を開けようとした時、

「シヨウ、客が来てるぞ」

と佐藤が声を掛けて来た。

「ん？」

ドアを見ると、見覚えの有る小柄な姿がもじもじしながら俺を見て

いる。

あれは・・・あの時、遙と一緒にいた弓道部の一年の男子だな。名前は涼つつつたか。

「サンキユ」

俺は佐藤に礼を言いながら席を立ち、男子生徒の前まで行く。

「おう、どうした?」

俺が声を掛けると、涼はすこしもじもじしていたが

「あの、シヨウ先輩! シヨウ先輩は西村さんとお付き合ってるんですか!？」

と突然デカイ声を張り上げた。

「はうつ!？」

俺の後方で、クラス全体がざわ、とどよめく。

「と、突然何を言い出すんだお前は!」

めちゃくちゃ慌てながら俺が叫ぶ。

「だって、シヨウ先輩は遙先輩ともお付き合いしてるって聞いたんです!」

それに、南先輩もシヨウ先輩を好きだむぐぐ!」

俺は涼の口を左手で塞ぎ、右手で体を抱えてダツと教室から走り出た。

しばらく走り、階段下の倉庫前で涼を下ろして肩で息をする。

「はー、はー・・・お前、はー、いきなり大声で、ふう・・・」

「す、すみません・・・」

申し訳無さそうに俯く涼を見ながら、すうつと深呼吸して息を整える。

「で、そんな事を聞いてどうするんだ?」

そういえば、お前は亜里沙・・・西村を好きなんだよな?」

ボツと真つ赤になる涼。解りやすいヤツだなあ。

「・・・はい、僕は西村さんに恋してます」

ぶほつと噴出しがかって堪える。  
恋してますって・・・そんなラブコメみたいな表現をリアルでするヤツが居るとは思わなかったぜ。

「で、今回は何の意図が有って俺に難癖付けに来たんだよ？」  
少し強い調子で問い質す。

「・・・だって、シヨウ先輩は遥先輩とお付き合いしてるんでしょっ？」

涼が上目遣いで俺を見る。

さて、なんと答えるべきかね・・・

「ところで、俺と遥が付き合ってるなんてどこで誰に聞いたんだ？」  
俺は涼の腹を探るべく、質問に質問を返す。

「・・・弓道部ウチの女の子達が噂してるんです。

それに、シヨウ先輩と話している時の遥先輩は本当に楽しそうだし、

遥先輩の前でシヨウ先輩の事を誉めるとデレデレになって嬉しそうだし」

・・・あのバカ、解り易過ぎるんだよな・・・

「何より、遥先輩は芳野キャプテンとお付き合いしてた頃よりもど  
んどん綺麗になってるし」

そ、そうかな？

そっぴやアイツ、ホントに綺麗になってきたよな・・・さすが未来  
の俺の嫁。

「シヨウ先輩、顔がデレデレに溶けてますよ」  
「うほう！？」

ジト目で涼に睨まれて焦る俺。

「バ、バカ言うな！遙を誉めたからって俺は別に嬉しくなんか無いぞ！？」

はぁ、とため息をつく涼。

「やっぱり、お付き合いしてるんですね・・・」

「むぐ・・・」

俺は言葉に詰まり、自分の迂闊さを心底後悔しつつ天井を仰いだ。

## 愛妻弁当！？

それにしても、次から次へと面倒な事が起きやがるぜ…

午後の授業が始まり、俺は頭を抱えながら考えた。

必死で食下がる涼をなだめすかし、今度時間を作って説明するから、と帰した後教室に戻ると、

そこには鬼の様な表情をした男共ハイエナが待ち構えていた…

「おい、シヨウ。おまえ最近怪しいぞ。

芳野さんと別れた後の若宮と妙に良い雰囲気出してるし、

南もしょっちゅうお前の所に来るし、一年の西村亜里沙と仲良く話してる所も目撃されてるし」

佐藤が俺を睨んでいるヤローども全員の疑問を代表したかの様に尋ねて来る。

「な、何言ってるんだバカバカしい！

だーかーらー、遥と俺は昔から仲良いし、

亜由美とは文化祭企画委員で一緒になったし、

亜里：西村は入学当初パンクしてたのを助けてから慕われているだけだつて！

何度も何度も言わせんなよ！！」

「ああ、何度も聞いてるんだが、どうも最近それだけじゃ無いんじゃないかって

意見で俺たちは一致してるんだ」

お前らは彼女無し共同組合でも作ってるのかよ！

「知るかつ！とにかく俺は飯を食うんだ。邪魔すんなよ」

ヤロー共を掻き分け、自分の席に着く。

「つたく…」

やっと愛妻弁当(？)にありつけるぜ…  
カパツとふたを開く俺。

「はうつ！？」

ガパツとふたを閉じる俺。

「…何やってんだお前？虫でも入ってたのか？」  
俺の様子を見ていた佐藤が不審そうに言う。

「い、いいや！なんでもない！！」

今日は天気が良いから、屋上で飯食おうかと思いついてさー！！  
H A H A H A、と笑いながら答え、立ち上がる俺。

キーンコーンカーンコーン…

「あ、予鈴だ。あと五分で授業だぞ、シヨウ。  
教室で食くらちまえよ」

マジかよ…

「うーん、まあそんなに腹減ってないから今日は昼飯抜くかな！  
ぐぎゅるるる…」

こんな時に限って腹の虫が大声で鳴きやがる…

「なんか、怪しいな…お前、その弁当まさか女に作ってもらってん  
じゃねえだろうな？」

んで、アイラブシヨウ、とか書いて有るんじゃ…？」

ぎくっ！余計なカンだけ冴えてんじゃねえぞ鈴木いつ！！

「あ、ああ！これは遥のお母さんが俺に作ってくれたんだから、  
そういう意味では女に作ってもらったといえるな！

お前らだつて、母ちゃんに作ってもらってんだろ？」

引き攣った笑いを浮かべながら必死で繕う。

もし見せる、とか言われたらこいつら全員を倒しても阻止しなきゃならんか…

まさかそこまでは言わんだろうが。

「よし、じゃあその弁当見せてもらっても問題無いな。

若宮のお母さんの弁当、見てみたいよな〜みんな！」

おう！と唱和するハイエナども。

言いやがった!?!

ちきしょう、コイツらのバカさ加減を計算に入れてなかったぜ！

クラスマッチの時はてんでバラバラで勝手な事やってる癖に、なんでこんな時だけそんなチームワーク発揮しやがるんだ…

「ちよつと、男子！いい加減にしなさいよ！

シヨウくんが可哀想じゃないの!！」

その時、和泉から救いの声が掛かった。

和泉は美術部所属で亜里沙の先輩。次期美術部主将だ。

「…文系は主将じゃなくて部長って言っの！」

って、シヨウくん、なに独り言ブツブツ言ってるの?」

しーんと静まったヤロー共を牽制しながら和泉が俺に言う。

「あ、ああ、イヤ別に。」

それより、サンキューな、和泉」

「気にしないで。シヨウくんには前悪いことしちゃったから」

そう、亜里沙が俺に告白して来た時、和泉とその他数人は告白を断った俺に詰め寄ったことがある。

俺の家庭事情などを交えた反論で引き下がってくれたのだが…どっちかって言うと、借りてるのは俺なんだがな。

キーンコーンコーンコーン

「あ」

鳴り出したベルに思わず声を上げる俺と和泉とハイエナ共。  
ガラッ！

「さあ、授業始めるぞ〜！着席しろよ〜！」

…せっかく遥が作ってくれた弁当を食う暇も無く、  
俺は腹ペコで午後の授業に臨むハメになっちまった…

キンコーンカーンコーン…

「お、今日はここまでだな。週番、終わりにするぞ」

「起立！礼！」

俺は終業のベルが鳴り、授業が終わった瞬間にドアから飛び出す。

「あ！シヨウが逃げた！」

「待て！」

ハイエナ共が俺の後を追って走り出る。

「腹ペコだったのに…勘弁してくれよ！」

カバンの中には弁当だけが入っている。

これだけ揺らせば多分崩れているだろうが、油断は大敵だ。

「待て〜！！」「見せる！食わせる！！」

「痛くないから！すぐに気持ち良くなるから！！」

…なに言っただあのアホ共は？

階段を一気に踊り場まで飛び降り、向きを変えて更に飛び降りる！

「きゃ！な、何なのだ！？」

意外に可愛らしい声に顔を上げると、そこには由香里先生が驚きの表情で立っていた。

「先生！これ預かって下さい！」

俺はカバンからさつと出した弁当を由香里先生に押し付ける。

「ん！？何だ？」

突然の事に戸惑う由香里先生に

「後で職員室へ取りに行きますから！！」

とだけ言つて再び走り出す。

「あ、ああ…？」

呆気にとられる由香里先生を後にして俺は猛烈ダッシュを再開し、ハイエナ共をブツ切った。

「失礼します…」

お腹と背中がくっ付きかねないほど腹を減らした俺が職員室に入ると、

「シヨウ！こつちだこつちだ！」

と満面の笑みを浮かべた由香里先生が手を振っている。

「キミは昼飯食べ損なつたんだろ？」

「ここでゆっくり食べてきなよ」

職員室の端に有る応接セットに腰掛けた由香里先生と、その隣に座る俺の担任の浅井先生がニヤニヤしている。

…なんだか嫌な予感がジワジワと背筋を這い上がってきやがった…

「い、いえ、家帰つてから食べますから！」

必死で答える俺を見て、由香里先生がぷつと吹き出す。

「そつか…まあ、「浮気はダメなんだからね！バカシヨウ」だったか？」

ぶほっ！！

由香里先生の台詞に思わず噴出す俺。

「えー、なんだっけ…ああ、そうそう、「今夜、いっぱいチューしてくれなきゃ」

許さないんだから！！」でしたね、由香里先生」  
浅井先生も面白そうに調子を合わせる。

そう、遥の弁当にはひじきとしそでハートマークとそんな台詞が書かれていた…

くくく、と押し殺した笑い声をだしながら由香里先生が

「まあ、仲良き事は美しき哉、だ。

あまり毎晩だと体に悪いぞ？いや、若いから大丈夫か」

「しっ失礼します！！」

俺はバツと弁当箱を取り、二人の先生の笑い声を背中にダッシュで職員室から飛び出た。

くそ、顔から火が出るかと思っただぜ！

今日は委員会も無いから、さっさと帰って弁当食べるかな。

俺は自転車にカバンをくくり付け、帰路を急いだ。

らぶらぶナイト？

「それにしても、クラスのヤロー共に見られなくて良かったぜ…」  
家に帰り、改めて弁当箱を開けてみて思わず赤面する俺。

「浮気は許さないんだからね！…チューいっぱい…はおうつ…！」  
そうだ…由香里先生と浅井先生には見られてるんだっけ…

「ぐぐぐぐぐぐぐ…！」

頭を抱え、座布団で顔を隠して床をゴロゴロと転がる俺。

あああ、明日学校で二人の先生の顔見れねえっつーの…！

五分ほど転がり、ちよつと気持ち悪くなってしまい布団に突っ伏す。

「…とりあえず、弁当食おう」

俺は遥の顔を思い浮かべて「いただきます！」と声を出してから弁当を食い始めた。

ムシヤムシヤぱくぱく…ゴックン！

「ご馳走様でした！」

弁当には、遥の愛情がたつぷりと詰まっていた。

コンコン

お？誰か来たぞ？

「はい、どちら様ですか？」

答えながらドアに向かう。

「あ、シヨウくん、私よ」

「え？おばさん？」

ドアを開けると、そこには遥のおばさんがニコニコしながら立っていた。

「ね、シヨウくん、今日は家でご飯食べさせて上げられないの。」

めんなさいね。

その代わりにコレ、持ってきたから」

おばさんが大きなバスケットとポットを俺に渡す。

「…なんですか、コレ？」

「うふふ、私を作ったアメリカンクラブハウスサンドウィッチよ。

ポットにはミルクティーが入ってるからね」

おお！おばさんの十八番おは、アメクラサンドだあっ！！

小学生の時、遠足とかで遥が持って来るコイツに憧れまくったっけなあ…

思わず遠い日の思い出に浸る俺。

そう言えば、バスケットから美味しそうなデミグラスソースの香りがぷんぷんしてきている。

「ありがとうございます！でも、どうしたの？今日何か有るの？」

「ええ、今日は香奈と沙里が林間学校で居ないのよ。」

そうしたらさっき、お父さんから電話が掛かって来て、今夜は二人で食事に出ようって…」

頬を染めながら嬉しそうに微笑むおばさん。

うわあ…なんだかんだ言っても、相変わらずラブラブだよなあ…

「なるほど！でも、それなら俺なんかに気を使わなくても良かったのに」

笑いながら言う俺に色っぽいウインクをして、

「何言ってるの！これには遥を預かってもらうお駄賃も含まれてるのよっ？」

「え…？」

「今夜は遅くなるし、帰ってきてからも二人つきりになりたいのだから、遥はシヨウくんシヨウの部屋に泊めてあげてね」

更に色っぽい流し目で俺を見る。

「あ…！は、はい！了解しました」

思わずビシ！と敬礼する俺。

「ふふふ、遙には置手紙してくから、部活が終って帰ってきたらきつとキーキー文句言いながらシヨウくんの所へ来ると思うわ。

「じゃあ、よろしくね〜！」

おばさんは手をヒラヒラしながら、半分スキップする様に帰って行った。

…俺と遙も、将来あんな風にいつまでも仲の良い夫婦になれるといいな…

そんな事を思いつつ、俺はバスケットとポットを持って部屋に戻った。

課題を終らせ、風呂を洗って水を入れて焚き付けた直後、

ドンドン！

「シヨウ！居るでしょ？開けるわよ！」

と大声を出しながら遙が俺の部屋に入ってきた。

「おかえり、遙」

俺は苦笑しながら、手と足を拭きつつ風呂場から出て行く。

「ねえ！聞いてよ！ママったら〜！」

目をバツテンにし、口を尖らせ両手をぶんぶか振りながらキーキーと文句を並べる。

おばさんの言ってた通りだけど、まあこれは俺でも予想できるな。

俺は苦笑したまま遙の気が済むまで文句を黙って聞いていた。

「…って、あんまりだと思わない！？

も〜！ホントトスチャラカ主婦なんだからあつ〜！」

一息に言い終えて、ふうはあと息を荒げている遙に

「ほら、飲めよ」

とコップに入れたコーラを渡す。

「ありがと」

と言いながら受け取り、両手でコップを持ってングングと飲み干す

遥。

ぷはあっ！けぷ。

「あゝ美味しかったあ。ねえ、ご飯どうしようか？」

あれ？おばさんサンドイッチの事書いてなかったのか。

道理で遥がプンスカする筈だよな。

「ああ、それなら心配無い。

さっそく食べようか」

ほえ？とか言いながら首を傾げる遥の前に、おばさん特製の

アメリカンクラブハウスサンドウィッチをずらっと並べる。

「わあ！これ、ママのクラブハウスサンドじゃない！

なぐんだ！ママっては何も書いてないんだもの！」

遥が涎を垂らしそうな表情でテーブルの上に広がったサンドイッチを見詰める。

「さ、喰おうぜ！こりゃ、三丁四人分以上有るな」

ミルクティーをカップに注ぎ、俺たちは「いただきます！」と声を上げて

サンドイッチにかぶり付いた。

部活を終えて帰って来た遥は、その華奢な体のどこに入るのかと思わせる程の量をぱくぱくと平らげていく。

俺はさつき弁当を食ったばかりでも有るので、そんなに食が進まない。

あっという間に半分程の量を食べた遥が、

「ふいふ、やっと人心地がついたわよう」

と言いながらけぷ、と小さくゲップをした。

「ね、シヨウ、なんだかあんまり食が進んで無いみたいけど、具合でも悪いの？」

少し心配そうに聞いてくる遥に、俺は弁当の一件について聞かせた。

「えええ！そりゃヤバかったのね…ごめんね、ちょっと考え無さ過ぎだったね…」

しゅん、となり謝る遥の手を取り、引つ張って膝の上に乗せる。

「えへへ…」

にゅん、としたアヒル口を見せながらちょこんと俺の膝の上に座り、むきゅつと抱き付く。

「ん…シヨウの匂いがするよう…」

幸せそうに言いながら俺の首筋に鼻を付けてくんくん匂いを嗅ぐ遥。

遥の体からも、甘い女の子の体臭が香って来て、ちょっとドキドキする。

「ねえ、私臭くない？部活で汗掻いてるから…」

少し離れようとすると遥を、逆にぎゅつと抱き締める俺。

「バカだな、遥の匂いが臭い筈無いだろ…」

ふと見ると、遥が俺の顔をキラキラした瞳で見上げている。

俺はそつと、遥の愛らしいアヒル唇に自分のそれを重ねた。

「にゅん…」

可愛らしい声で鳴きながら嬉しそうに瞳を閉じる遥。

俺は遥の軽い体をお姫様抱っこにして、布団まで連れて行く。

布団の上に遥を下ろし、その上に覆い被さるようにしてキスを続ける。

「は…ん…あつ…ん…」

遥が少し喘ぎながら舌を絡めてくる。

五分ほどキスを楽しみ、遥が名残惜しげにそつと唇を離れた。

「ね…どうせ汗掻くんだから、とりあえずしちゃう…」

頬を赤く染めながら、甘えるように呟く。

「ん、俺もしたかったんだ…」

普段だったら絶対言えない言葉を捻り出した自分に驚きながら、俺は再びキスをする。

今夜は、熱い夜になりそうだな…

きつと、おじさんとおばさんも。

俺は自分の考えた事にぶつと噴き出しながら、遙の服をそつと脱がせ始めた。

果たし状？

ジリリリリリリ！チン！

「ん〜…」

ちゅっ

目覚ましの音が響いて、直ぐに止まる。

そして、唇に暖かくて柔らかな感触が広がった。

「シヨウ、朝だよん」

「んあ…後五分…」

「んも〜！」

ちゅっちゅっちゅっ！

首筋を吸われる感触に目が覚めて来る…って、

「のわ！遙！おまー！」

バツと飛び起きた様とした俺の顔に弾力の有る物体がぼによん！とぶつかった。

「もふ！」「にゃん！」

俺と遙の叫びが重なり、俺は再び枕に頭を落としてしまう。

「も〜、いきなり飛び起きないでよ！おっぱいが潰れたかと思ったじゃない」

「…ハア？」

俺は寝ぼけ眼で状況を分析する。

…ああ、遙は俺の枕元に座って、屈み込む様にして俺の首筋にキスしてたのか…

んで、俺は飛び起きようとしたから屈み込んでいた遙のおっぱいに顔をぶつけた、と。

…やべえ、ただでさえ朝から元気なパーツが更に元気に…

「遙、今何時だ？」

俺の隣にゴソゴソと潜り込んできた遙に尋ねると、

「ん、まだ五時半だよ」

と言いなながらピトつと抱き付いてくる。

「…あれ？目覚ましは六時に合わせといたはずだけどな？」

「だってえ、六時に起きたんじゃ支度する時間しかないじゃない？」

俺の疑問に答える遙。

「…支度する時間以外に何をしようってむぐ」

再び唇に暖かくて柔らかい感触が広がる。

「ん…んふ」

少し笑いながら、遙の熱くて甘ったるい舌が俺の口に差し込まれて来る。

しばらくお互いの舌を味わった後、そつと唇を離す遙。

「えへへ…する事なんて決まってるでしょ…」

遙がふにゆう、としたアヒル口で笑いながら抱き付く。

「はいはい、遙様…」

俺は溜息をつきながらも、遙の細い腰を抱いて再び唇を合わせた。

「おはよー」

「ウス」

朝の挨拶があちこちで交わされている。

いつもの様に登校し、部活へ向かう遙と別れてから教室へ向かう途中、

「シヨウくん！おはよう！」

と声を掛けられて振り向くと、そこに見覚えの有る女生徒が微笑みながら立っている。

「ああ、おはよう…あ！岬、だよな！」

挨拶を返しながら思い出した。

そつだ、俺と一緒に文化祭企画委員会で、西園学園との交流委員に選ばれた岬だ。

「ねえ、一瞬誰だか忘れてたでしょ？」

岬の言葉に少し慌てたが、

「ああ、悪い悪い。俺はどうも人の顔覚えるの苦手です」と正直に答える。

「まあ、シヨウウくんの廻りには可愛いコが集まるから、

私みたいな地味なコなんて忘れちゃうんだろっけ？」

首を傾げながら悪戯っぽい表情で言う岬。

「いや、お前だって充分可愛いぜマジで」

「ふっん、まあ一応ありがと！」

でね、今日なんだけど、放課後の委員会の時間に西園学園に行く事になったの！

昨日、臨時委員会が有ったんだけどシヨウウくんも帰っちゃったから…

ってというか、シヨウウくんのクラスの男子が殆ど居なかったよね」

…ああ、昨日は終業のベルと共に、ハイエナ共に追われながら弁当を抱えて飛び出したさ。

「…ハイエナ、って何なの？」

不審そうな表情で俺を見詰める岬の視線に慌てる俺。

また、口に出てたか…その内コレでエライ目に遭いそうな予感がするぜ…

「あ、ああ、なんでも無い。

じゃあ、委員会に出てから俺とお前で西園に行くのか」

「うっん、時間が勿体無いから私たちは委員会に出ずに行くの。

それに、西園学園まで行ってから、また帰ってくるのも大変だからそのまま現地解散で帰宅して良いって岡田先生が言ってたわ」

なるほど、さすが由香里先生だな。

「了解！じゃあ、終業後に待ち合わせて行こうか。」

なんか持ち物とかは有るのか？」

「うん、資料とか筆記用具とかだけど、私が用意するから大丈夫。待ち合わせはどうしよう…？ ショウくんは通学自転車だっけ？」

「ああ、岬はなんだい？」

微笑みながら唇に手をあてる岬。

この娘、けっこう大人っぽいんだな…

「私は電車よ。じゃあ、西園までは徒歩で行きましょう。そんなに遠くないしね」

「あ、もしお前がイヤじゃなければ、学校からちょっと離れたら俺の自転車の後ろに乗るか？」

一応足を置けるようにステップみたいなハブガード付けてるんだ」  
毎朝、遥を乗せて走ってるしな…

「いいわね！じゃあ、それで行きましょう。」

「じゃあ、午後四時に自転車置き場で待ち合わせで良い？」

「ああ、そうしよう。じゃあ、また放課後な」

にっこりと微笑み、手を振りながら廊下を去って行く岬を見送りつつ振り向く俺。

どす。

振り向いたとたん誰かに軽くぶつかってしまっ。

「あ、悪い…のわあっ!？」

そこには、いつの間にか笑顔で青筋を立てている遥の姿があった。

「シヨウ…今日は岬ちゃんと仲良しなのお？」

遥の後ろには、見覚えの有る三人組が両拳を口元に当てて固唾を呑んで見守っている。

ってか、涼、おまえも一緒にそのポーズとってんじゃねえよ…

「あ、ああ遙か。岬とは文化祭企画委員会で一緒になってだな…」  
「ほ、お、それで放課後は仲良く自転車二人乗りでお出かけってワケえ?」

…なんなんだこのデジヤビュ…

「それはだな、西園学園に行くのに足が無い岬を乗せて行くだけであつてだな…」

ピピクうっ!と遙の額の青筋が数を増す。

ああ、この光景はついこの前見たばつかじゃんか…

「西園学園ですつてえ…?そうね、アソコは可愛いコー杯居るもんね」

もうね、お前ね…

「ああ、詳しくはまた後で話すからっ!」

必死で言う俺をジロツと一瞥し、

「…まあ、良いわ。今夜ゆっくり聞くから」

と後ろの三人に聞こえない様にぼそつと呟き、スタスタと歩き出す遙。

三人組が慌ててその後に続く。

つと、すれ違い様に涼が俺にすつと封筒を渡してきた。

「何だ?果たし状か?…つて!」

封筒には、「シヨウ様へ」とでっかく書いてある。

…ラブレターじゃねえんだからよ…

俺はがくう、と壁に手を突いて頂垂れてしまつ。

「ああ、今日も朝から疲れる日だなあもう…」

俺は帰りたい気持ちを必死で抑え、ふらふらと教室へ向かった。



## 弁当騒動再び！？

キンコーンカーンコーン…

「さー！飯だ飯だ！」

「誰か、買出し行って来い！」

お昼のチャイムと同時に、やたら手際良くガタガタと机を集める男ども。

いつもはてんでバラバラに食ってるのに、何でだ…？

「さあ！楽しい昼べの始まりだな、シヨウー！」

鈴木がガツ！と俺の肩を掴む。

「…なんだ、その昼べ、つてのは…？」

鈴木の手を払い除けながらジト目で睨み付ける。

「タバが有るんだから、昼べがあってもおかしくないだろ？朝べつてのも有るぜきつと！」

「インスタント味噌汁じゃ無えんだからよ…！」

根本から意味も使い方も間違ってるぞ、お前は。

俺は弁当を持ってそそくさと教室を出ようと試みる。が…

「シヨウ！どこに行くんだ！？俺達とのランチをバックれようつてのか？」

「さあ、お前の為に白牛乳とうぐいすパンを買ってきたぜ！もちろん俺の奢りだ！」

…こいつら…

昨日の弁当騒ぎをまだ持ち越してやがるな。

バカめ…

遙には昨日の騒ぎを話したから、ラヴラヴ弁当、略してラヴ弁はも

う作らないだろうし

今朝、遥は俺と一緒に寝てて弁当はおばさんが作ってくれてるから無問題だぜ！

「ああ、じゃあお前達とのむさ苦しくも楽しい昼べって奴を楽しもうかね」

余裕の笑みで答える俺にざわめく男共。ハイエナ

「ちっ！やっぱ昨日のウチに押さえるべきだった…」

「くそう！今日は普通の弁当かよ…」

既に興味を無くした様に半分くらいのヤツらは自分の席に散っていく。

「愚か者め…」

ほくそ笑む俺を見て、残った連中も去って行った…が…

「おい鈴木、佐藤、井熊。お前らは散らないのか？」

悔しそうな顔をしつつ残った三バカに、俺は余裕綽々で挑発する様に声を掛ける。

「ああ、もうメンド臭いからな。たまにはこう言つのも良いだろ」

「右に同じ」「同じ」

「ま、勝手にするさ！いつただきまゝす！」

俺はカパッと弁当箱を開けた…ら…

「ぬおおおおおお！！シヨウ！てめえ！！」

「ななななな！なんだこれはシヨウなんだあ！！」

「うおおおお！マジかよ！！…羨ましい…」

ガバツ！！

急いで弁当箱を閉じる俺。だ、が…

「なんだなんだ！やっぱラブ。弁当だったのか！？」

「見せろ！食わせる！！やらせる！！！！」

「あひょうくへっはははは！！！！」

俺の周りには既にハイエナによって壁が出来ている。

「くっ…！」

じわじわと弁当箱を抱えた俺を追い詰めていくハイエナ共。

「ちよつとお！なに騒いでんのよ！！」

「シヨウくん！大丈夫！？」

異様な雰囲気女子がざわめき、和泉が俺を心配して声を掛けて来るが

目を血走らせた野獣共はもう止まりそうに無い…

「おい、何が書いてあった！？」

三バカに詰め寄る野獣。

「おお、シヨウ大好き！とかハートマークとか有ったぜ！！」

…そう、チラ、としか見てないが確かにハートマークがご飯の上でっかく描かれていた。

しかし、なぜだ！？遥は今朝、まったく弁当作成に関わっていないに！！

…待て、よ？

そう言えば、今朝、遥の家を出る時に、沙里が

「えへへ、シヨウ兄ちゃん！今日のお弁当は沙里も手伝ったんだよ」  
「！」

って言ってたな…

もしかして！？

俺はささっと弁当箱を開けて中身を確認する。

「おおっ！見せる！！」

ダツと集まってくる野獣共。

「…ちつ。もうこうなったら仕方無えな…」

俺は心底悔しそうに演技しながら、自分の席にとさ、と座る。

「ふふふ…観念したか、シヨウ…」

「ああ、お前らの執念には負けたよ。」

さあ、思う存分見るが良いさ！俺の可愛い彼女が作ってくれた弁当をな！！」

俺は叫びながら弁当の蓋をパカッと開く！

どつとどよめく教室。

我先にと俺の机の上の弁当に殺到するバカ共。

「きゃー！シヨウくんの彼女のお弁当！？」

「私も見たい見たいー！！男子邪魔ー！！！」

…女子も殺到して来てるのは大きく予想外だったな…

「どこ？どこ？ああん見えないよっ！！！」

つて、おい和泉。

なんでお前まで目え三角にして殺到してんだよ…

「こ、これはアー！！！」

三バカの叫びがこだまする！

その視線の先には！！

ハートマークと共に「シヨウ兄ちゃん大好きだよ！サリ」とでかかど書かれた弁当が有った。

「…シヨウ、兄ちゃん…？」

呆けた様な声を上げる鈴木。

「兄ちゃん、つて…？」

虚ろな目で俺を見る佐藤。

「サリ、つて…誰？」

「ああ、サリは遙の双子の妹の片割れさ。  
俺に良く懐いているんだ。とつても可愛い娘だぜ」

昼休みの教室に、ハイエナ共の巨大な溜息が響き渡った。

「なんだよ〜！焦らせやがって…」

「俺はもう、てっきり若宮本人の手作りだとばかり…」

「おお、俺もそう思った。ま、よく考えればシヨウウごときに

あの若宮がラヴ。する訳無えよな！」

「ああ、所詮二人は幼馴染だっただけだよな。

若宮とシヨウウじゃ月とスッポン、ウサギと亀だぜ！」

お前ら…いくらなんでも好き勝手に言い過ぎだろオイ。

つてか、小池、お前ウサギと亀、の意味違つてんぞ…

ざわめきながら再び席に戻っていく男&女共。

ああ、ようやく昼飯が食える…

なんの遠慮も無くガツガツと平らげた弁当には、  
おばさんと沙里の愛情がたっぷり詰まっていた。

## 果たし状！（前書き）

こんばんは、作者です。

大変お待たせいたしました！

この一週間、思いつきり充電して参りました！

読者の皆様の暖かいお言葉は本当に嬉しく、思わず涙が出て来ました。

ここの所仕事のストレスも溜まっていたので、先週末の草津行きの後、思い切って有給を使い水曜から今日まで車中泊しながら東北地方をブラブラして来ました。

夜間、キーンと静まる山の中のパーキングで寝ていると、様々なモノの音が聞こえて来た様にも思え、恐ろしくも感動しました。

また、草津での友人カッブルの話で良いネタを仕入れましたので、短編を一つ書こうかと思えます。

ま、それはさておき。

お待たせしていました「それすらもまた、平穏なる日々」、再開させて頂きます。

これからも皆様に楽しんで頂ける作品創りを頑張っていけますので、よろしくご愛読下さいませ！

羽沢 将吾

果たし状！

「お？」

弁当を食い終わり、袋に弁当箱をしまおうとした時、袋の中に封筒が有る事に気付いた。

「ん？なんだ…？」

封筒を取り出して見ると、

「シヨウ兄ちゃんへ　　サリ」

と書いてある。

そういえば、カナサリは昨日の林間学校から今朝早く帰って来て、今日は学校が休みだって言ってたな。

しかし、林間学校って言う位だからもつと山の中に行くのかと思っ  
てたら、

バスで十分程のキャンプ場とは、俺たちの頃とは時代が違うって奴  
か。

そのうち、遠足行くのにバスとか電車とか使う様になるんじゃない  
だろーな？

……それにしても、俺、最近良く手紙もらつよな…

あ！そうだ！

今朝、涼から渡されたラブレターモドキ、まだ読んでねえな。

昼休みはもう終わるから…次の授業は英語か。

って事は、由香里先生の授業だから…ま、ちょっと位余所見して手  
紙読んでても大丈夫だろ。

授業寸前はみんながわらわら通るから、気付かれてもイヤだしな…

キーンコーンカーンコーン…

「さて、諸君！楽しいイングリッシュの時間だぞ  
来た来た、由香里先生。

「起立！礼！」

「よし、今日は前回の続きから行くところか…」

さて、どれどれ、と…

え〜と、親愛なるシヨウ先輩、お元気ですか？

本日はお日柄も良く…

…何書いてんだ、あのオンナモドキめ。

結婚式のスピーチじゃ無えっての。

しかし、前置きだけで一枚使うなよ…ってか、四百字詰め原稿用紙  
で手紙書くなよ…

え〜と、本題は、と。

お、二枚目の半分くらいからが本題の開始だな。  
なになに…

僕は先輩にお話した通り、西村亜里沙さんに恋しています。ブツ

しかし、西村さんのスイートハーツは先輩の方を向いていて、ウプ

ププ…スイートハーツ…

僕のセンチティヴハートはザツクリとブレイク…ク、ククク…クヒ  
ヤツ！

「わはは！…！」

ダメだ！限界だ！

俺は我慢できずに笑い出してしまった！

「そこオ！何笑ってんだ！？」

由香里先生の手からチョークが飛び、俺の額に見事にヒットする。

「痛っ!!」

椅子を後ろ向きに斜めにしていた俺は、見事に椅子ごとひっくり返ってしまった。

ガッターン!どってん!

「あいたたたた……」

急いで起き上がると、

「シヨウ!キミ今内職してたろ?」

ツカツカと教壇から俺の方へやってきつつ、由香里先生がキツイ調子で言う。

内職とは、授業中に他の勉強や宿題をする事だ。

「と、とんでもないです!そんな甲斐性有りません!!」

急いで起きながら手紙を机の中に隠す!が!!

バツ!

「これは何かね?シヨウ」

俺が机の中に隠すより一瞬早く、由香里先生の手到手紙を奪われてしまった。

「ほう、これはこれは……」

クラス全員が固唾を呑んで見守る中、由香里先生が手紙をさっと一警する。

「……プッ」

表情を全く変えずに小さく噴出した由香里先生は、

「あー、これは私が預かる。異存は無いな、シヨウ?」

とニヤニヤしながら俺を見る。

「……はい、有りません……」

まあ、この状態で返してもらったら、授業終了後にまたクラス全員から追われるハメになるだろうしな……

「よし、授業を続ける。シヨウ、キミは授業後に職員室へ来たまえ」

ツカツカと教壇に戻りつつ由香里先生が言う。

そして、何事も無かったかの様に授業が続いた。

キーンコーンカーンコーン……

「よし、今日はここまで！」

「起立！礼！」

由香里先生がカツカツと出て行った後。

「おいシヨウ！！なんだあの手紙！！」

「誰だ！相手は誰だ！！」

「うひえくほつう！！」

…来ると思っただぜ三バカトリオめ…

「ああ、一年生から今朝もらったんだ。果たし状さ」

「ふざけるな！どんな果たし合いをするんだ！Aか！Bか！！Cか

！！！！」

お前…古いな、鈴木。

「弓道対空手の異種格闘技戦だ」

俺の言葉にポカン、とする三バカ。

しかし、俺はまんざら冗談だけで言ったのではない。

涼からの手紙には、確かに書いてあったのだ。

「西村さんを賭けて、僕と勝負して下さい」

と……

何を考えてるんだか、あの小僧は。

さて、とりあえずは職員室へ行かんかね。

ほけつと立ち尽くす三バカを放つといて教室を出る。

ああ…タダでさえ昨日の弁当を見られた件で頭痛いのに、さらに追い撃ち掛けられるとは思わなかったぜ……

職員室のドアをノックし、入室すると昨日と同じ席に由香里先生が座っていた。

「おう、シヨウ。こっちだ」

由香里先生が手を振りながら俺を呼ぶ。

「まあ、座りたまえ」

椅子を勧められ、「失礼します」と言いつつ座る。

「さて、さつきキミが授業中に読んでいたこの手紙、一年の川浪涼かわなみからのモノだね。

確かに彼はへタな女の子よりも可愛い美少年だが、シヨウにはそんな趣味まで有ったのか？

遙が浮気するな、とまた怒るのでは無いかね？」

ニヤニヤしながら言い放つ由香里先生。

…ああ、どうせそう来ると思っていましたとも。ええ。

俺は予想通り過ぎる展開に大きく溜息をつき、なんと答えようかと迷った。

「……えー、その件につきましては……」

「ああ、冗談だから気にするな。

で、だ。悪いが授業中にチラ、と見た時、西村を賭けて勝負がどうこう、という件りが

見えてしまったてな、なにやら穏やかじゃ無さそうなのでスマンとは思ったが読ませてもらった。

この西村、と言うのは一年の西村亜里沙嬢の事だな。





プレイボーイ!?

キーンコーンカーンコーン……

授業がすべて終わり、部活に向かう生徒、帰宅する生徒がガヤガヤと廊下に溢れる。

「さあて、今日は岬と西園かあ……」

大きく伸びをしながら待ち合わせ場所の自転車置き場へ向かう。

「それにしても、なあ……」

俺は歩きながら、さっきの由香里先生との会話を思い出していた。

「ひー、ひー……イヤ、悪かった。ちょっとツボにハマってしまったな」

顔を真っ赤にして、涙を流しながら笑っていた由香里先生がようやく落ち着いた。

「えへん！げほげほっ!!」

さて、この手紙の件だが、川浪はお前と亜里沙を賭けて決闘したい様な事を書いているが、

もちろん受ける積りなど無いだろうな？」

斜め下からの色っぽい視線を俺に送りながら誰何する由香里先生にハッキリと答える。

「もちろんです。大体、涼のヤツ、亜里沙を物みたいに掛けるだなんてふざけてますよ。」

本気で好きなら亜里沙に正々堂々とアタックし続ける、とビシッと行ってやります」

ふむふむと聞いていた由香里先生が満足そうに頷く。

「ああ、お前がそう言ってくれるなら安心だ。」

ま、任せるからよろしくな。だが、もし何か困ったことが出来たら遠慮せずすぐに相談したまえよ」

「はい、ありがとうございます」

「涼のバカに、一体なんて言ってるのか？」  
回想を終えて思わず溜息をつく。

由香里先生に偉そうに言ったのは良いけど、良く考えると結構厄介だよな。

ああ、まったく、何で俺はこうも面倒な事に巻き込まれるんだろーか？

「面倒な事って、なあに？」

突然掛かった声に、

「わあ！びっくりした！！」

と思わず叫びつつ飛び上がる俺。

「きゃ！何よお！ビックリしたのはこっちよ！」

目の前には黒い瞳を見開いて驚く岬の顔が有った。

「…なんだ、岬かあ…」

悪い悪い、ちょっと考え事しててさ」

いかんいかん、またしても口に出してたか。

「……？まあ、良いけど。とりあえず行きましょ！」

西園学園の場所、知ってるよね？」

「ああ、一応な。先生に見付からない様に、校門出るまでは自転車引いていこうぜ」

自転車の鍵を外し、岬と並んで歩き出す。

何気なく岬の横顔を見詰める。

うん、岬も可愛い、というか結構美人だよな。

なんだか大人っぽいし…

そんな事を考えながらほけ、と見詰めていたらふつと岬が俺の方を見た。

「やだ、そんなにジロジロ見ないでよ。」

若宮さんや南さんを見慣れているシヨウウくんから見たら、私なんて凄くブスでしょ？」

頬を赤く染めながら口を尖らせる岬に、

「い、いや、そんな事無いって。お前だって負けないくらいの美人だよ」

と思わずマジで答えてしまう。

「え……もう、ヤダあ！シヨウくんって結構プレイボーイなのね！」  
かあ、と頬を紅潮させながら言う岬。

ぷ、ぷれいぼあい!?

「な、何言ってるんだ！俺はそんな積りじゃ……!!」  
慌てふためきながら叫ぶ俺。

その時、校門を通過する寸前の事。

「あらあ、シヨウくんじゃない？」

これから岬ちゃんと西園までデートなのお？」

地獄の底から響いて来た様な恐ろしい声を響かせつつ、  
ゴゴゴゴゴゴゴ、という音さえ聞こえてきそうな雰囲気だいまじんの遥が  
俺達をついつと走りながら追い越して行った。

「な!!」

その後ろを十人ほどの弓道部員がファイト、ファイト、と声を上げ  
つつ着いて来ている。

弓道部の連中、ロードワークに出る所だったのか！

なんて間の悪さだよ……

遠ざかっていく遥の背中から、怒りの紅いオーラが立ち上っている。  
そして、最後尾を走っていた涼がこちらを振り向きつつ、くす、と  
ほくそ笑んだ……

あ、あのガキいいっ!!

怒りに燃えながらふと横を見ると、岬がたまげた様にポカン、と口を開けて立ち尽くしている。

「お、おい岬、大丈夫か？」

俺の声にハッと我に返り、

「今の、若宮さんよね……まるで鬼みたいに見えたわ……」  
と呆然と呟きつつぎゅっと両手で自分を抱き締めている。

すまん、岬……俺のせいで恐ろしい目に遭わせちゃまって……  
俺は思わず岬に向かって頭を下げてしまった。

校門から少し離れた所から二人乗りで自転車を漕ぎ出す。  
岬は俺の肩に手を置いて楽しそうに歓声を上げている。

「これならあつという間に着くね！」

ああ、と返事をしながら、俺は今夜なんと言って遙に責められるか、またそれに対してどうやって上手い事収める事が出来るかを必死で考えている。

さっきの岬との会話を聞かれていたらかなり不利だな……

だが、あのタイミングならそうそうハッキリとは聞かれて無いと思  
うんだが……

「ちよつとシヨウくん！ストップストップ！！」

肩に置かれた岬の手に力が籠り、ハッと我に返った俺は急ブレーキ  
を掛けて停車する。

「きゃあ！」

思わず前のめりになった岬が俺の背中に体を押し付けた……ら？

むじゅ

「うおうー！」「こ、この感触はあ！？」

「もー！西園の前通り過ぎちゃったよ！」

プリプリと怒りながら文句を言う岬に

「す、すまん。ちょっと考え事してて」

と言いつつ、大きくなった部分を必死で鎮める。

「早く戻る！」

…なんでそんなヘンな格好で自転車漕ぐの？」

前屈みになっている俺を見て不審そうな声を上げる岬。

「あ、ああ、ちょっとな。とにかく戻るぜ！」

わざとらしく大声を上げ、ダッシュする。

「きゃ！」

と、岬が俺の背中にしがみ付いてきた！

むにゅっ

再びやーらかな感触が背中に走る……

……西園に着いても、しばらく動けないぞこりゃ。

今朝、遥と二度もしてきたのになあ……

俺は自分自身の若さってヤツを呪いながら、必死で数式や三バカト

リオの間抜け面を頭の中で思い浮かべていた。

姉妹校!?

西園学園の校門の手前で岬を下ろし、そこからは自転車を引いて歩く。

名門女子校に男女の二人乗り自転車で乗り付けるワケにはいかなからな……

並んで歩き出した岬が、背負っていたデイバックから何かを取り出して

「シヨウくん、コレ着けて」

と俺に渡してきた。

「ん?なんだこれ?」

受け取りながら見てみると、緑色の腕章と水色の名札だ。

「なになに、入園許可証と、交流委員証、ね……」

緑色の腕章には交流委員証、水色の名札には入園許可証と書いてある。

「そ!なんて言っても名門女子校だからね。」

「こつ言うアイテムが無いと、門前払い喰らっちゃうのよ」

へええ、と感心しながら二つのアイテムを身に着ける俺と岬。

「なあ、そう言えば前から疑問だったんだが、

なんでとても名門だなんて言えないウチの学校と

この近辺では最高クラスの名門女子校の西園が姉妹校なんだろうな?」

おそらく、岬も知らないだろうなと思いつつ、なんとなく質問してみる。

「それはね、西園学園の創始である神崎清臣かんさききよひこさんと、

ウチの創始者が親友だったからなんですって」

「……」

まさか答えが返ってくるとは思っていなかった俺は絶句しながら、思わずマジマジと岬を見詰めてしまう。

「…？どうしたの？黙っちゃって？」

「あ、ああ、悪い。まさかホントに知ってるとは思わなかったんだ」  
俺の言葉にプツと噴き出しつつ、俺を色っぽい表情で眺める岬。

「やだあ！シヨウくん、生徒手帳読んだこと無いの？」

最後の方の姉妹学校紹介、って所に小さくだけど書いてあるよ」

いや、普通そんなのマトモに読むヤツ居ないって。

神崎清臣さんねえ…なんだか、高貴そうな御名前だこと。

ちなみにウチの学校の創始者の名前は山田喜兵衛だったか？

「なんでも、神崎家って結構大きな財閥らしいわ。」

あまり一般的な知名度は無いけれど、世界中にいろんな会社とか  
持つてるんだって」

なんでそんな事に詳しいんだ、お前は？

「え？それはね、私のお父さんがそう言う方面に関わる仕事をして  
ると、

実はね…：内緒なんだけど、私、西園も受験して落ちちゃったん  
だ」

つと！また考えが口に出ちゃってたか！

つて……

「え！マジか？」

岬の思わぬカミングアウトに驚く俺。

「うん、マジ。だから、西園学園に入場するの、ちょっとトラウマ  
なんだ」

何ともいえない表情で微笑む岬に、何て声を掛けて良いか迷ってし  
まう。

「あ、でもね！今の学校はとても好きだし、後悔なんて全然無いの！  
でも、なんだか昔フラれた人に会うみたいなのがしちゃってね」

明るい微笑みに戻りながら言う岬。  
そう言えば、亜由美も西園受けたって話を聞いた覚えが有るな。  
亜由美も落ちたんだらうか……？

「さ、とりあえず守衛さんに挨拶しないと！」

岬の声にはつと我に返ると、いつの間にか西園の校門前に辿り着いていた。

しかし、すげえ校門だな……

入って直ぐ右に受付の建物が有って、守衛さんがこっちを訝しげに見ているぜ。

「ちよつと待っててね！」

岬はそう言つとタタタ、と守衛所に掛けて行き説明をし出す。

下校する生徒達が俺の方を見ながら、なにやらきゃいきゃいと騒いでいる様だが、

まあ女子校だけに男が珍しいのだろう。

「シヨウくん！自転車は守衛所の横に置いてくれって！」

岬に呼ばれて自転車を置きに行き、一応俺も守衛さんに挨拶する。

「校内では騒いだりしないで下さい」

守衛さんから幾つかの注意事項と、西園の委員会が指定してきた会議場の場所を聞いて

俺と岬は西園学園高等部の敷地内へと入園した。

……

しかし……どんだけ広いんだ、この学校は。

「校舎、ってというか建物が一杯有るね」

岬が感心した様な声で呟く。

「一体、どれが実際の授業をしている校舎なんだ？さっぱり解らん」

確か、西園の生徒数とウチの生徒数はそんなに変わらないか、  
ヘタすりゃウチの方が生徒数自体は多いのに、

敷地面積はウチの三倍、建物の数は数倍有りそうだ。

オマケに、同じ頃に創立された筈なのに、建物が妙に新しい。ウチのボロ校舎とは雲泥の差だな。

「ここは元からお金持ちな上に、生徒の家庭もみんなお金持ちだからね。」

寄付やら何やらでお金には絶対困ってないから、

改築とか増築とかしょっちゅうしてるって聞くわ」

さすが元志望校の事だけあって、詳しいな岬。

「えと、この校舎の四階に文化祭企画委員会室があるみたい」

って、この校舎そのものが「委員会棟」とか書いてあるぞ。

こういう委員会の為の建物が有るなんてウソみたいだな。

ウチの委員会は、授業後の教室に適当に割り振られて会議するけどな。

「ね！男よ男！」

「そう言えば、交流委員会が有るって言ってたわね！」

委員会棟から出てきた生徒が興味津々、といった呈で俺を見て行く。何か、動物園の珍獣にでもなった気分だな……

「シヨウくん、行きましょ！」

すれ違った生徒の美形度チェックをしていた俺の手首をぎゅっと握り、

ズンズンと建物内に入っていく岬。

「お、おいおい岬！そんなに引つ張るなって！！」

俺は岬に手首を掴まれ、つんのめる様にして校舎内へ入った。

女王様…？

岬に手首を掴まれたまま建物の中に入り、

「おい、岬！待ってくれよ。」

靴をスリッパに履き替えないと！」

と叫んだ俺の言葉に岬がはっと手首を離す。

「ご、ごめんなさい……」

来客用スリッパに履き替え、受付窓口から訝しげな視線を送っている女性職員の所に行き用件を告げると、この建物専用の入館許可証を渡された。

「用心深いこつて……」

呟いた俺の横っ腹を岬が肘で突付きつつ

「それでは、失礼します」

と微笑んで歩き出す。

「失礼しまーす」

と俺も営業用スマイルを振り撒きながら岬の後を追った。

「もう！シヨウくん余計な事言わないでよ！」

「へーへ、すみません」

岬に小言を言われながらエレベーターのドアの前に立つ。

「エレベーターの有る高校なんて聞いた事ないぜ」

半ば感心、半ば呆れながら呟く俺。

その時、チン、と音がしてエレベーターのドアが開いた。

「きゃー！ー！ー！オトコよオトコ！ー！ー」

「ウソ！？きゃー！ー！ホントー！ー！ー」

「マジで？マジでえ？なんでココにオトコが居るのお！？」

あっという間に数人の女生徒に取り囲まれる俺。

「きゃあっ！ー！ー」

岬が一団に突き飛ばされ、悲鳴を上げながら廊下の壁に弾き飛ばされるのが見えた。

「岬！大丈夫か!？」

俺は叫びながら岬に駆け寄り寄りとしたが、

キヤーキヤーワーワーと騒ぎながら俺を取り囲む

女生徒の壁に阻まれて身動きが取れない！

だあっ!!

うぜえっっの!!

「お前ら……!!」

大声を上げ掛かったその時。

「こらあっ!!あなた達!!いい加減にしなさいっ!!」

凜、とした声が響き、一瞬にして静かになる女生徒共。

そして建物の入り口の方から、黄色いリボンで長い髪をポニーテールにした

キリッとした目付きの、いかにも言った雰囲気的女生徒がすつと現れた。

切れ長の瞳は涼やかな知性の光を宿し、すらつとした鼻梁と小さな唇は

そんじよそこらの美人とはレベルの違う造形を見せる。

西園スペシャル、と他校生徒から呼ばれ、憧れの的となっている

高級なセーラー服を着こなしたそのプロポーションは完璧だ。

へえ、さすが西園。レベル激高な美女が居るな。

「大丈夫?ごめんなさいね」

壁に手について呆然と女生徒を見詰めていた岬の手を取りながら頭を下げる。

「貴女は、島津百合華委員長ですね……?」

なぜか頬を染めながら呻く様な声で聞く岬に、につこりと微笑みながら

「はい、私は西園学園生徒会長兼文化祭企画委員長の島津です。

文化交流委員も兼ねてますけどね。

貴女は文化交流委員の岬さんね。ようこそ、我が校へ」

岬を立たせると、今度は俺の方を向きながら声を掛けて来た。

「貴方は…」

「あ、始めまして。俺は……」

一応、胸と腕の許可証を強調しながら自己紹介する。

「そうですか、ようこそいらっしやいました。

私もこれから、委員会室へ向おうと思ってたの。ご一緒しましょう」

俺と岬に極上の微笑を投げた後、

「あなた達、こんな所で油売ってないで、委員会が終わったのなら早く帰宅なさいな。帰りにヘンな所に行っちゃダメよ？」

は、いい、と綺麗にハモリ、ささーっと捌けて行く女生徒達。

「さ、行きましょ！」

ウインクしながら俺達に言うと、島津百合華はさつとエレベーターに乗り込んだ。

「それでは、本日の文化祭企画委員会を開催します。

まず、姉妹校からいらしたお二人を紹介致します」

しーん、と静まった室内に島津の美しい声が響く。

廻りを見回すと、委員達がうつとりと島津の話に聞き惚れており、よく見ると岬まで手を組んで「素敵……」とか呟きながらうつとりしている。

「それでは、自己紹介をお願いします！」

え？

ハツと思えば壇上を見ると、島津がにこやかに微笑みながら俺を見ている。

自己紹介、か！俺は一瞬躊躇したが、ガタと立ち上がって無難に自己紹介をした。

続いて、岬がかなりつつかえながら自己紹介をすると、大きく拍手が起る。

真っ赤な顔で座った岬に

「お前が動揺するとは思わなかったぜ」

と小声で話し掛ける

「そりゃ、いきなりじゃ緊張するわよ！でも、シヨウくん全然平気っぽかったね」

意外そうな顔で俺に言う。

俺はちよつと照れながら、

「あ、ああ。ま、慣れってやつかな」

と岬に答えた。

「慣れ、って……？」

不思議そうな顔をする岬に

「ま、後で話すさ。今は会議に集中しようぜ」

とウインクし、俺は壇上で司会している島津の話に耳を傾けた。

「……各クラスの委員は、明日のホームルームで会議内容の報告をして下さい。

それでは以上で、本日の企画委員会を終了します」

島津の声で会議が締められ、ガヤガヤと席を立つ生徒達。

会議中、岬がウチの委員会の現在の進行状況の報告と、

共同開催するイベントの提案、そして校門に飾るオブジェへの

西園学園の名前の使用デザインと許可を求めて承認された。

ちなみに俺はポケっと座っていただけだったが。

「岬さんと……シヨウくん、で良いのかしら？」

「ああ、そう読んでもらって結構ですよ」

俺達が居るからか、中々部屋から出て行かない委員達の背中を押しながら

島津が微笑みながら近寄ってきて声を掛けてくる。

「そう！じゃあ、私の事も百合華、って読んでくださって結構よ」  
その途端、

「きゃーーーーー！！お姉様がお名前ですべて呼ぶのを許可なさるなんて！  
！」

「しかもオトコに！！いやーーーー！！」

蜂の巣を突付いた様になる女生徒共。

思わずドン引く俺と岬。

「おだまりっ！！早く帰りなさい！！」

島津の一喝でしーん、と静まり返り、なにやら渋々、  
と言った感じだがそろそろと退室していく。

「お二人とも、もし時間が有ればお茶でもいかが？」  
島津の誘いに、

「あ、俺はもう帰り……」と言い掛けた所で

「はい！！二人まとめて喜んで！！」

と言う岬の叫びに俺の言葉は掻き消された……

## 女王様の目にも涙？

俺達を遠巻きに取り囲んで、きゃいきゃいと騒いでいる女生徒達を横目で見ながら、ずず、とブラックコーヒーを啜る。

「高校に喫茶室なんてモノが有るとはね」

小さく呟く俺の脇腹を岬が肘鉄で突付き、横目でキツと睨む。

「うふ、仲がよろしいのね」

目の前に座った島津百合華・生徒会長兼文化祭実行委員長兼文化祭交流委員が

廻りに薔薇の花でも舞っていそうな笑顔で微笑んだ。

「と、トンでも有りません！！私たちはそんな関係じゃ……！！」

おー、岬が見事に挙動不審に陥ってんな。

ウチの学校内では大人っぽく落ち着いて見えてるが、

まあこの百合華（ひやくりか）さんの前じゃ緊張するわな。

「落ち着けよ岬。そんなに慌てると、身に覚えが有るみたいに見えるぜ」

俺は再びコーヒーを啜りながら岬に声を掛ける。

「！な、何言ってるのよ！！バカな事言わないでっ！」

…ダメだ、こりゃ。

穏やかな微笑のまま、音も立てずに百合華さんがミルクティーを飲む。

うーん、確かに絵になるわ、このひと。

「ところで、シヨウくん。ちょっとお聞きしても良いかしら？」

百合華さんがカップをソーサーに静かに戻しながら俺に聞いてくる。

「はい、なんででしょう？」

俺もカップを置きながら聞き返す。

「先ほど、委員会の開始時に私が貴方に自己紹介を振った時、

ほんの少々の戸惑いは見えただけ、直ぐに落ち着いてスラスラと自己紹介をしましたよね？

普通、あの状況で突然指名されれば大抵の人は慌ててしまおうと思うの。

それも、初めて西園ウチに来た他校の男子生徒なら、ね。

貴方はどうしてあんなに落ち着いていられたのかしら？」

両手の膝をテーブルに突き、組んだ手の裏に形の良い顎を乗せてまるで挑発、いや誘惑するかの様な妖艶な微笑を俺に向けて来る。なるほど、俺達を、いや俺を試したんだな。この女王様は……

「そうそう、私もそれを聞いたかったのよ。」

シヨウくんの後だった私でさえあんなにうろたえたのに、どうしてシヨウくんはあんなに落ち着いていたの？」

うーん、どうすっかな……それを話すと不幸自慢するみたいで嫌なんだが。

ま、でもここは正直にいつとくか。

「あー、そうですね。」

岬は知っていると思うが、俺は今年の夏に自分以外の家族を

交通事故で亡くしまして、親戚も殆ど居なかったんで

警察や弁護士、保険屋さんとのやり取りやら加害者との話し合い、葬儀の準備や進行、裁判所での争議、お世話になった人への御礼

なんかで

人前に出る事や大勢の人の前で話することに慣れちゃったんですよ。

まあ、もちろん、俺の近所の幼馴染のご家族に物凄く助けて頂いたんで

出来た事なんですけどね」

ははは、と笑いながらコーヒーを飲み干す。

しーん……

あれ？なんかやたらと廻りが静まり返っている様な気がするぞ？  
カップを置いてふと廻りを見回すと、いつの間にか遠巻きだった女  
生徒達が

ぐるっと俺達のテーブルを取り囲んでいる。

「うお」

思わず声を上げながら百合華さんに視線を向けると、  
麗しの女王様はハンカチーフを顔にあてながら涙ぐんでいた。  
な、なんですかこの状況は！？

「……そうなの、ごめんなさいね、辛い事を思い出させてしまって  
百合華さんがすっと涙を拭い、キラキラとした瞳を俺に向ける。  
その美しき無言の迫力に思わず椅子ごと後退る俺。

ぶにゅ

しかし、ちょっと下がったら後頭部が何やらやーらかい物体に当た  
って止まる。

ふと振り向くと、後ろにいたなかなかグラマーな女生徒の胸に顔が  
埋まった。

「あーご、ごめん！！」

思わず謝りながらテーブルにギユンと戻る。

「本当にごめんなさい。私は、とても失礼な事をしてしまったわ…

…」

静かな呟きと共にテーブルに突いた俺の右手が、  
少しヒンヤリとした柔らかい物で包まれる。

「ほえ？」

バツと振り向くと、そこには俺の右手を両手でぎゅっつと包み、  
大きな瞳からキラキラと涙を零した女王様の姿があった。

「あああああのそのこのどの」

真摯な瞳から流される、宝石のような涙に思わずドギマギしてキョドる俺。

「私は、いえ私達は誤解していました。

今まで、貴方達の学校からやって来る交流委員の男子生徒は例外無く西園ウチの生徒と仲良くなり、あわよくば彼女を作ろう、という気満々の困った人達でした。

今回も間違はなくそう言う方が来るだろうと決め付け、

まずは貴方の出鼻を挫こう等と考えた私をどうか許して下さい…

…」

ハラハラと涙を零しつつ、握った手に力を込める百合華さん。

いえその、そんな大した事じゃないんだってば。多分…

俺は救いを求める様に岬の方を見る。が、

そこには両手を胸の前で組み、少女漫画の主人公の様に

キラキラと瞳を輝かせ、だーっと涙を流している岬の姿を見出し、しまった。

良く見ると、取り囲んだ女生徒達全員がポロポロと涙を流しつつ何とも言えない、生暖かい視線を俺と百合華さんに注いでいる。

誰か…この状況を何とかして下さい。

俺は喫茶室の天井を見上げ、長い溜息を一つついた。

## 山の手お屋敷！

「私は着替えてきますので、寛いでいて下さいね」

優雅に微笑みながら去っていく百合華さんを見送り  
引き攣った笑い顔で手をニギニギする俺。

「コーヒーをお持ちいたしました」

外国映画で見た覚えの有る、お手伝いさん…いや、メイドさんって  
言うのか？

まあとにかく、そんな感じの使用人さんがふかふかのソファに埋  
もれている

俺の前のテーブルに音も立てずにコーヒーカップの載ったソーサー  
を置いた。

「あ、ありがとうございます」

慌ててお礼を言った俺にっこりと素敵な笑顔で笑い掛け、  
メイドさんがテーブルの横にすつと控える。

俺はほけ、っとメイドさんを見詰め、いかんいかんと頭を振って  
本日二杯目のブラックコーヒーを啜りつつ脳内で回想を始めた。

西園の喫茶室から何とか脱出した俺は、瞳をキラキラと輝かせたま  
まの岬を

近くの駅に放り投げてからやれやれと言った風体で自転車を漕ぎ帰  
宅していた。

西園と俺の家は、俺達の学校を挟んで反対側なので家までは結構な  
距離になったが

まあたまには来た事の無い町を散策するのも良いか、と思いつながら  
適当に走っている内に道に迷い、そんな時に限ってパンクなんぞし  
やがる。

更に、いつもサドル下のミニバッグに入れているパンク修理キットの

ゴムのりのチューブに小穴が開いてしまっていて修理不能と来たもんだ。

自転車屋さんで修理してもらおうにも財布には小銭しかなく、そしてATMはもう閉まっていて金もおろせない、と。

泣きつ面に蜂つてのはこの事だな……

仕方なく自転車を引きながらトボトボと幹線道路の歩道を歩いていると、

車道を走っていた黒塗りの高級車がすーっと音も無く停車し、

「あら、シヨウくん。どうなさったの？」

後席の黒いウィンドウが開き、さつき別れたばかりのお嬢様が声を掛けて来た……

そしてその二十分後、なぜか俺は高台の高級住宅街に有る、

島津百合華さんの大邸宅にお邪魔している、とまあこう言うわけだ。自転車は、島津家御用達の車屋さんが引き取りに行き、修理してくれている。

「お待たせしました」

ピンク色のワンピースに着替えて戻ってきた百合華さんの微笑みに一瞬目を奪われてしまい、思わずじっと見詰めてしまう。

「うふ、そんなに見詰められると照れますわ」

言葉と裏腹に全く照れなど見せず、典雅な微笑を俺に向けてくる百合華さんの言葉に思わずドキッとして

「あ、すみません！」と視線を逸らす。

「ふふ、良いのよ。もっと楽にしてね」

俺はふう、大きく息を吐いて平常心を取り戻し、

「百合華さん、何から何まで申し訳有りません」と頭を下げた。

「まあ、気にしないで下さいね。困ったときはお互い様です」

いや、万が一百合華さんが何かで困ったとしても、俺ごときじゃ全く力になんかなれないと思いますけど……

メイドさんが百合華さんの前にすつと紅茶のカップを置く。優雅な動作でカップを口に運び、音を全く立てずに紅茶を飲む百合華さん。

やっぱ、本物のお嬢様ってのは何もかも違うんだなあ……

俺は有る意味、まるで学者が研究対象を見詰める様な視線で彼女を眺めた。

「シヨウくんは、今何か夢中になっている物はありますか？」

と、カップをソーサーに戻しながら唐突に百合華さんが聞いてきた。

「え……？夢中になっているモノ、ですか？」

じつと俺の瞳を見詰めながら、百合華さんが深い微笑を浮かべる。

「そう、夢中になっているモノ。もしくは、夢中になっている事」

その瞬間、俺の脳裏に頬を赤く染めた最愛の少女の笑顔が浮かぶ。

俺の夢中な事……それは間違いなく遙との事だけど、

なんとなく、この場面でそれを言うのはいかにも無粋な気がするな。

そうだ！俺の夢中なモノと言えば……

「そうですね、こんな事を言うと百合華さんの様な人には

誤解されるかもしれません、今夢中になっているのはバイクです。すね。

と言つても、まだ原付しか免許は持っていませんが」

頭の中に浮かんだ遙がムツとしたような顔でアヒル口を尖らせている。

「まあ、オートバイですか。でも、学校で禁止されているのではな

くて？」  
予想通りほんの少しだが、形の良い眉を潜めつつ百合華さんが言う。  
「ええ、基本的には禁止ですが、特別な事情が有る場合は許可が出るんですよ」

「特別な事情……？」

俺の言葉に、不思議そうに首を傾げる百合華さん。

うーん、俺の知る中で、最も完璧な女性だよな……

……さつきから頭の中で遥がキーキーと喚いているがシカトする。  
大体、どんなに百合華さんが綺麗でも、俺の中では遥おまえ以上の女はいないっちゅーの。

「俺の場合、さつきもお話しましたが、家族を事故で亡くしていませんから」

何をするにも、どこに行くにも自分でしなければなりません。

それに、未だに相手の保険屋と話が着いていないので、

生活費や学費も結構苦しくて……お恥ずかしい話ですけどね。

だから色々バイトをするのにも、免許は必要なんですよ」

「まあ！そんなんですの……」

百合華さんが瞳に同情の色を浮かべながら俯く。

むむ、これではさつきの再現になってしまつか？

「で、でも、俺はバイクが好きで、乗っている時には嫌な事も忘れられるんです！

あ、誤解しないで下さいね。俺は暴走族とかそういうのは大嫌いで、

飽くまでもツーリングとか、旅するのが好きなんで、

夜中にうるさく走り回ったりとか他人に迷惑を掛けたりはしませんから！」

「……ええ、解ってますわ。貴方がそんな事をする方では無いって言う事は」

すいっと顔を上げた百合華さんの瞳に、美しい涙が滲んでいる。  
思わずドキツとしてしまう俺の瞳をじっと見詰る百合華さんに  
メイドさんが静かに純白のハンカチを渡した。

「百合華！ドコに居るの!？」

その時、鈴の鳴る様な可憐な声が廊下から響いてきた。

「アイシャ様！百合華様は現在お客様が見えておられて……」

ガチャ！と勢い良く部屋の扉が開き、少し驚きながら振り返った俺

の目に

銀色シルバーと黒色ブラックの鮮やかなコントラストが焼き付いた。

「まあ、アイシャ様！いらっしやるのは明日のはずでは？」

百合華さんの驚いたような声が響く。

「えへへ、お屋敷は退屈だからもう来ちゃった！」

俺の目の前で、煌めく銀髪プラチナブロンドと漆黒のドレスを翻しつつ

生きたアンティークドールが澁刺と動き、喋り、微笑んでいる。

そのあまりの美しさと愛らしさに、我を忘れて見惚れてしまう。

「きゃ！お客様がいらっしやったのね」

俺の視線に気付き、白皙の頬を赤く染めながらもじもじする美少女。

その瞳は燃える様な紅玉色ルビーで、少しキツく上がった目尻には

年齢なりの幼さと、大人の様な艶っぽさを併せ持っており、

天使か女神が地上に現れたのでは、とも思えるその表情に

俺は再びほけつと見惚れつつ、少し古い歌の歌詞を思い出していた。

「アイシャ様！」

開いたままのドアから、大人の色香を強く感じさせる

大柄なメイドさんが小走りに入室してきて少女を抱き上げた。

「あん！もう、ミクったら」

不満げに口を尖らせる少女に小声でお説教しつつ、

「お客様、失礼致しました」

と俺に頭を下げて部屋を出て行く。

俺が少女を見ると、少女の瞳も俺を捉え、にっこりと愛らしく微笑

んだ。

少女を抱いたメイドさんが退出し、少しの間静寂が部屋を支配したが

「シヨウくん、ごめんなさいね。どうぞ座って」

と百合華さんに言われて立ったまま間抜け面を晒していた事に気付

く。

「あ、はい」と答えながら座った俺は、

「地上に降りた最後の天使、か……」

とさっき思い出した歌のフレーズを無意識に呟っていた。

酔っ払ーい！

「ごめんなさいね、シヨウくん。お騒がせしちゃって……」  
まるで嵐の様に銀と黒の天使が現れ去った後、百合華さんが苦笑いしながら俺に詫げる。

「いえ、とんでもないです。それにしても、綺麗な女の子でしたね……」  
どなたなんですか？」

俺は疑問に思ったことを率直に聞いてみた。

あの天使は流暢な日本語を話してはいたが、明らかに日本人では無かった。

サラツと流れるような銀髪ブラチナブロード、くつきりとした高貴な顔立ち、そして、何よりもあの紅玉ルビーの様な輝く瞳……

「……ですの。本当は明日から、遊びにいらっしやるはずだったのですが」

退屈を持って余して早めに来てしまったみたい」

百合華さんの声にハツと我に返る俺。

しまった、彼女の事を説明してくれていたたみたいなのに、彼女の事を思い出しつつポケットとしてたからよく聞いてなかった！自分から質問しておいて、聞いてなかったのもう一度説明お願いします、とは言えないぜ……

「なるほど、そうなんですか」

解かった様に頷きながら、腹の中では大後悔するが後の祭りだ、アフター・フェスティバルだ。……我ながらくだらねえな。

「アフター……？なんですか？」

小首を傾げながら百合華さんが不思議そうに俺に聞いて来る。

「え！？あ、何でもありません！わはは！」

やべえ、また口に出てた！いい加減この癪マジで直そう。

それにしても、あの天使の名前、なんて言ってたっけな……？

確か、ア、愛？秋？……ア、が頭文字だったのは覚えているんだが。

よし、名前だけでも！

「ところで百合華さん、さっきの女の子のなま」

「失礼いたします」

俺が意を決し、百合華さんに正々堂々と掠れた小声で尋ね掛けた時、廊下から声が掛かり、テーブルの脇に控えていたメイドさんがすとドアを開けた。

「お客様の自転車の修理が終わり、こちらに届きました。」

自転車はガレージの方に保管しております」

優雅な動作でお辞儀をしつつ、メイドさんが報告すると

「はい、ご苦労様」

と微笑みながら百合華さんが答えた。

「シヨウくん、お聞きの通りですのでいつでも自転車は使えます。

そろそろ七時を過ぎますが、宜しければお食事をしていかれますか？」

え？もうそんな時間か！

俺の脳裏にぶくつつと頬を膨らませてプンと怒っている大切な娘の顔が浮かぶ。

「いえ、お誘いは嬉しいのですが、明日も学校ですしそろそろ失礼します。」

それに、百合華さんを待ち兼ねている娘さんも居る様ですし」

そう言いながらソファから立ち上がった俺の言葉にくすり、と笑いながら、

「そうですね、彼女もシヨウくんをお気に召したようですから残念がると思えますけれど」

と答えつつ百合華さんも立ち上がり、「玄関までお送りしますね」と言う。

超高級車が何台も停まっているガレージから、百合華さんとメイドさん三人に見送らつつ

自転車を漕ぎ出した俺がふと大きなお屋敷の二階の窓を見上げてみると、

明かりの漏れている窓からさっきの少女が俺を見下ろしている。

逆光のシルエツトとなっていて表情は良く見えなかったが、

俺がなんとなく手を振ってみると、少女のシルエツトもぶんぶんとして手を振ってくれた。

結局、パンク修理代を受け取ってもらえなかったな……

えっちらおっちらと自転車を漕いでアパートに戻ると、俺の部屋に電気が点いている。

おっと、遥のヤツが来てるんだな。

俺は急いで自転車にカギを掛けて、部屋へと入った……ら……

「何やってたのよ!!」

鬼のような表情で腕を組み、頭から湯気を立てる勢いで怒り狂っている遥が仁王立ちで俺を出迎えた。

「何って、文化祭の打ち合わせに西ぞ」

「いくらなんでも遅すぎるわよ! 岬ちゃんとデートでもしてたんじゃないの!?!」

おい、俺に最後まで喋らせるよ……

「だーかーらー、文化祭交流委員の仕事で西ぞ」

「今何時だと思ってんのよ!!! 交流委員会だって、遅くても五時半位には終わってるんじゃないの!?!」

をい……だから俺に最後まで喋らせれ。

「遙、落ち着け。とにかく、最後まで俺の話を聞け！な？」

「……ヤだ！浮気しちゃダメ！私以外の娘とデートなんかしっちゃダメエっ！！」

「……？なんか、遙の様子がおかしいな……？」

「バカバカバカ！シヨウのバカ！大好きだけど大ツキライ！！」

「ふえ〜ん！」

「おい、遙？どうしたんだ？」

俺はイヤイヤをしながら泣き出した遙を抱き締めた。

「……ん？この匂いは……」

俺がふと部屋のテーブルの上を見ると、そこには親父が愛飲していたスコッチウイスキーの瓶と氷の入ったグラスが置いてある。

「……もしかして!？」

「遙、お前！」

「あによう……ういつく」

遙がけぶ、と酒臭いゲップをする。

「お前、酒飲んでるな!？」

「あによう、文句あんのお？ひっく」

よくよく遙の目を覗き込むと、完全にすわっていやがる……

「シヨウのばかあ……ふにゃあ……えっちちかんすけべおんなたらし……」

ワケ解らん文句をブーたれながら俺の腕の中でくた、となる遙。

そして直ぐにく〜く〜と可愛い寝息を立て出してしまった。

「しょうがねえなあ、もう……」

俺は軽い体をお姫様抱っこにし、布団に寝かせてから遙の家に電話をして

遙が寝ちゃったから泊めても良いか、とおばさんにお伺いを立て許可を貰った。

「やれやれ」

溜息を点きながらテーブルを良く見ると、その上には

遙の手料理と思われる麻婆豆腐がラップを掛けて置いてあった。

「いただきます」

味噌汁を温め、ご飯をよそい、俺はくーくーと寝息を立てる

愛しい少女に向かって手を合わせると、遅めの夕食をガツガツと食べ始めた。

宿酔ーい！

ジリリリリリリ！

鳴り出した目覚ましをチン！と止めてムクリと起き上がり、

「ふわあ……」と大きく伸びをする。

時間は、六時半か。

隣を見ると、なにやら顔をしかめた遙がうんうんとうなされている。

「おい、遙、大丈夫か？」

遙に顔を近づけて声を掛ける、と、まるで熟した柿の様な匂いが遙から漂っている。

「遙、おい、遙？」

俺がもう一度声を掛けると、遙の瞳がゆっくりと開いた。

「ジョウ、おばよう……」

死んだ魚の様な目で俺に挨拶をして、のろのろと起き上がるようにした遙だったが、

「あー！」

とかよく解らん発音で叫ぶとぱたたと再び布団に倒れ伏した。

……「げうふっ」

なんだかかへんな音のゲップをして、

「あだまいだい……ぎぼぢわどうい……うええん……」

目をバツテンにしながら呻き出す。

こりゃ、もしかして、宿酔ふっかよいってヤツか？

俺はテーブルの上に置きっ放しにしてあるスコッチウイスキーの瓶を手に取ってみる。

中身は、もう四分の一も残っていない。

確か、このウイスキーは八分目位まで残ってた筈だから……

「おいおい、お前一体どれだけ飲んだんだ」  
呆れながら遙に聞くと、

「うゝ……最初の二杯目位までは記憶があるんだけど……うぷっ  
！」

あ、ヤバい！

俺は台所から急いでボールを出し、俯いた遙の顔の下へ置く！

「うええええええ……」

ケロケロと酒臭いゲロを吐き出した遙の背をこしこしと摩る。

上半身裸の遙の背中は、スベスベな感触で思わずヘンな気分になっ  
ちまう……けれど、

「おええええええ……」

涙と鼻水とゲロを吐きながら苦しそうにせえせえと息をするのを見  
ていると

そんな気分は一気に吹き飛び、可哀想なのと可笑しいのが混ざり合  
い、ついクスクスと笑い出してしまった。

「あによお……バカにしてるんでしょ……」

とりあえず吐き気が治まったのか、ごろんと仰向けになりながら恨  
めしそうな顔を俺に向けてくる遙。

横になっても形が余り崩れない見事な乳房がぶるるん、と震えるの  
に目を奪われながら

「ほら、薬だ。あと、口の中濯げよ」

救急箱から出した胃散に水差しとコップを持ってきて差し出すと、

「……ありがとう」

と言いながらそうつと起き上がって口を濯ぎ、胃散をコクンと飲ん  
で再び仰向けに転がる。

「うゝん……あたし、もう二度とお酒なんて飲まない……」

俺は思わず吹き出しながらボールを片付け、洗面器に新聞紙を敷い

て持って来た。

「遙、今度気持ち悪くなったらコレに吐けよ。」

あと、今日は学校無理だろ。俺も休んで看病してやるから」

苦笑混じりに言った俺の言葉を聞いてガバッと跳ね起き、

「ぬゐー!!」

と再び意味不明な発音で叫んでぼて、と倒れる遙。

「何やってんだよ」

ぬおおお、とか言って唸りながら涙をダァッと流している遙に呆れた様に言つと、

「ダメだよ、こんな事で学校休んじゃ……あたしも大丈夫だから、支度しよ」

と明らかに無理をしている様子で俺を睨む。

「あのな、お前、そんな状態で学校に行った方がマズイだろうに。」

未成年者の飲酒は、法律で禁止されているんだぞ？」

「ぐむむむむ」

頭を抱えて唸る遙の胸がふるふると震えるのをガン見しながら俺は偉そうに言つ。

「じゃあ、じゃあシヨウウだけでも学校に行つてよ。」

私のせいでシヨウウが休むのなんてダメなんだから」

再びつぶ、と吐きそうになりながら必死で堪えている遙の横に寝転び、

「ほら、吐きたいのを我慢するより吐いちまった方が楽になるぞ。」

とにかく、今日は俺も休んでお前と一緒に居るから。」

つて言うか、俺がお前と一緒に居たいんだ。良いだろ？」

「え!……もう、バカ……」

驚いたように俺の顔を見てから、かあ、と頬を染めて照れる遙が可愛くて思わず抱き締めてしまう。

「ちよ!シヨウウ!ダメだつてばげえええええええええ」

俺の腕に抱き締められたまま、俺の最愛の少女は俺の胸に向かって爽快にゲロを吐き出した。

濡れタオルで後片付けをした後に学校に電話をして、職員室に廻してもらおう。

「はい、職員室です」

ラッキー！由香里先生だ！

「もしもし、シヨウです。おはようございます」

「おー、シヨウか！どうした？」

「はい、実は……」

俺は、とりあえず俺と遥の二人とも風邪をひいた事にして、

俺の担任の浅井先生にも由香里先生からその旨伝えて貰える様にお願した。

「ああ、それは構わないが……なんでキミが遥の病欠について代理で報せてくるんだ？」

「あー！」

由香里先生の鋭い突っ込みに絶句してしまふ俺。

「遥はそこに居るのか？居るなら代わってくれないか？」

バツと振り向くと、遥はうーんうーんと唸りながらもうつらうつらと眠り掛かっている。

今起こすのは可哀想だな……

「すみません、遥は熱が酷くて、ようやく眠った所なんです」

「ほほう、そこはキミの部屋だな？と言う事は、遥はそこに泊まった、と」

ぎくうっ！！

センセイ、鋭すぎます。

「あ、別に私が鋭いんじゃないなくて、キミが考え無しなだけだ。

普通に状況分析すれば、導かれる解答だと思わないか？」

くっくっくと声を押し殺しながら笑う由香里先生に、

「ハイ、オッサナルトオリデスネ」

完全ぼー読みで機械的に返答するしかない俺……

「まあ、良い。今回だけだぞ？」

ふう、と溜息を着き、苦笑しつつ言ってくれた電話の向こうの由香  
里先生に

「はいっ！ありがとうございます！！」

俺は思わず正座してから、バツと土下座してしまった。

「けぶ」

電話を切ると同時に遙が可愛らしいゲップをする。

「全く、この娘は……」

俺は苦笑しながら遙の横に寝転び、赤く染まったぶにゅっとした  
気持ちの良い触感のほっぺにちゅっと軽くキスをした。

## ラブラブばすたいむ？（前書き）

こんにちは、作者です。

ながらく停滞しておりました更新ですが、ようやく再開させていただきます。

大変お待たせしてしまい、申し訳ありませんでした。

これからもどうぞ、宜しくお願いいたします！

## ラブラブばすたいむ？

「おっと、もうこんな時間か……」

久しぶりに学校をサボり、うんうんと唸る遥の頭に乘せたタオルを取り替えたりしながら

いつの間にかうつらうつらして、ハッと目を覚ましたらもうお昼だ。

そういえば、遥が宿酔酔ふつかいで学校休んだ事、おばさんに何て言おうか……

一応、由香里先生には連絡しておいたから、遥の家に連絡行く事は無いだろうけどな。

とりあえず、遥が回復したら二人で相談するか。

「うーん、しかし良く寝たなあ」

大きく伸びをして、隣に寝ている遥の顔を見ると大分赤みが増してきて、

真っ青な顔色をしていた朝に比べればずいぶん良さそうだ。

寝息も苦しそうな感じではなく、すーすーと可愛らしいいつものモノになってる。

俺は遥を起こさないようにそっと布団から出て台所に行き、

昨夜、遥が炊いておいてくれたご飯を鍋に移しておじやを作り始めた。

お湯を沸かしながら鰹節を煮込み、グツグツしてきた所で味を見ながら味噌を入れる。

そのままでも飲める位の味噌汁が出来た所で、冷や飯をざーっと投入してじっくり煮込んで、と。

「うにゆう……けぶっ」

簡単味噌おじやが丁度良く煮えてきた頃、布団から遥の声が聞こえてきた。

開き戸を開け、様子を見てみると半分寝ぼけ眼の遙がこつちを見ているのと目が合う。

「お、起きたか。具合どうだ？」

苦笑しながら聞く俺に向かってバツの悪そうな顔をした遙は、

「……うん、大分良いみたい。もう吐き気は殆ど無いよ」

と布団に埋まったまま、恥ずかしそうに答えた。

「ごめんね、シヨウ……あたし、バカだよ」

大きな瞳からすこし涙を流しながら俺に謝る遙。

「気にすんなよ。ま、今度は俺がお前に介抱してもらっからな」

俺はそんな遙の様子に胸がキュン、としてしまい、

お玉をもったまま遙の傍にしゃがんで零れ出している数粒の涙を唇で拭う。

「あん……シヨウのそれ、大好き」

と、泣き笑いになった遙が甘えた声を出しながら俺の首に手を廻し、抱き付いて来た。

「ね、シヨウ……チューして」

俺は遙のおねだりに応え、今度は柔らかく暖かな愛らしいアヒル唇にキスをした。

「にゃ！らめえ……」

しかし、遙は唇を割って侵入しようとした俺の舌をふにゆふにゆ言いながら必死で防ごうとする。

俺は唇を離し、

「どうしたんだ、遙？なんでイヤなんだ？」

と可愛らしい鼻先にキスをしながら哀しそうな雰囲気装って聞いてみた。

「違うの！ぜんぜんイヤじゃないの！ホントはいっぱいして欲しいの！

……でも、今のあたしの口の中、きつと汚いモン……」

再び涙を零しながらふるふると首を振り、一生懸命弁解する遙。

俺はその様子がとても愛しくなり、ぎゅっと抱きしめながら呟いた。

「遙、お前がどんな状態でも汚いなんて思わないぜ。

俺はお前が可愛くて愛しくて大好きなんだ。

だから、そんな事気にするなよ」

と、俺の言葉に遙の頬はカーッと見る見る真っ赤になり、

「もう！バカあ……にやはん。うふん。もう。やだあ！シヨウのバカあ！」

嬉しいんだか恥ずかしいんだか両方なんだか、くねくねしながらバツと布団に潜り込み、

その中で奇妙な叫び声を上げながらバタバタと身悶え始めてしまった。

「おし、それだけ元気があれば食べられそうだな」

俺はうねうねと奇妙な動きを続ける布団を見て苦笑しながら呟き、台所へと戻っておじやの蓋を取ってお玉で少し掬い上げて味を見る。

「うん、OKだ！遙、卵は幾つ食べる？」

俺が振り返りながら尋ねると、まだ赤いままの顔を布団から出して俺が何をやっているのかと興味津々に見ている遙と目が合った。

「え……？シヨウ、何してるの？」

まだ状況把握が出来ていない遙が不思議そうに俺に尋ねる。

「ああ、そろそろ腹減っただろ？味噌おじや作ったから、一緒に食べようぜ」

「え！シヨウが、あたしの為に作ってくれたの」

嬉しそうに微笑みながら、布団から遙が出て来た、が

「おいおい、そんな刺激的な格好で出て来られると参っちゃうぜ」

カタチの良い、豊満な胸は露わになり、身に着けているのはクマさんのショーツだけ

と言う実にアレな格好の遙に、思わず俺も赤面してしまう。

「きゃ！やだあ！」

もうすっかり見慣れている、また見られ慣れている筈でも

さすがに真昼間の明るい光の下で見せ付けられるとお互い照れるよな……

飛び込むように布団に戻り、ピーピーと恥ずかしさの余り喚いている遙に

洗濯済みのＴシャツを投げてやりながら、俺は膨張している一部分を必死で鎮めた。

「ごちそうさま！」

結構な量だったおじやを二人でぺロっと平らげ、お茶を飲んでいると時計の針が午後二時を指しているのに気付く。

「そろそろ沸いたかな？」

俺が、食事を始める前に焚きつけておいた風呂の様子を見ると、ちよつど良い湯加減になっていた。

「遙、風呂入っちゃえよ。さっぱりするぜ」

食器を台所を持って行き、洗おうとしている遙を背中から抱き締めながら耳元で囁くと

「あん……シヨウも一緒に入る」

頭を捻り、俺の頬に唇を当てながら遙が熱の籠った声で答える。

「ん。ゆっくり入ろうぜ」

俺はそう答えながら、遙の着ているＴシャツを優しく脱がせた。

「もう……シヨウのエッチ」

俺は、嬉しそうに言う遙の唇を自分のそれで塞ぎながら、最後に残ったクマさんのシヨーツもささつと脱がせ、

自分もささつとマツハの速さで裸になり、遙の滑らかな背中を抱き締めながら浴室へと入った。

## 罪と罰？

「ふー、さっぱりしたあ！いろんな意味で」

満足そうににんまりとしたアヒル口を晒した遙が、鼻歌交じりにドライヤーを掛けている。

まさか狭い風呂の中であんな事やこんな事させられるとは思わなかったぜ……

俺は、無理な体勢で痛めた腰をミシミシ言わせながら伸びをした。

「ね、ね、シヨウ！まだ三時だよ。ちよつと散歩でもしない？」

俺のＴシャツを羽織っただけの格好で、むぎゅつと背中に抱きついて来る遙の

ふわふわな胸の感触を感じて体の一部が膨張して来る。

おまえ……さつき頑張ったばかりなのに、大概にしてくれよ……

我が息子ながら、若いってもんだよな。

「ふうっ」

思わず大きく溜息をついてしまった俺に、

「なによつ、あたしと一緒に居るのが退屈なの？」

とぶくつと頬を膨らませて文句を言う遙。

「違つって。だけどお前、どうするんだ？」

振り向き様にぶにゅつと頬にくっ付いた遙の頬の柔らかな感触にニヤけそうになりながら、

いかんいかんと自分を律して厳しい声を絞り出す。

「ほえ？何を？」

大きな瞳をパチクリさせ、不思議そうに俺を見詰める遙。

「はあ……能天気だな、もう。今日の休みのことだよ。」

一応由香里先生には電話して風邪ひいた、って連絡しておいたけど、

おばさんには何て言う積りだ？」

「あー！」  
俺にズバつと言われ、良く解らん発音で絶句した遥の顔がサーっと青ざめていく。

コイツ、なんも考えてなかったんだな……

「あうあう……えと、んと……」

ナ〜イシヨ、ってのはダメ……？」

背中に抱きついていていた遥がゴソゴソと俺の前に這って来て、胡坐をかいた俺の膝の上にちょこんと乗り首筋に唇をつけて甘える様にボソボソと呟く。

「内緒になんて出来る訳ないだろ。」

もし後でバレたら、どうなると思っ？」

「ひいひい」

遥のおでこを指でつい、と押しながら首筋から離し、ちょっと怖い顔で睨んで言った俺の言葉に  
可愛い顔をくしゃ、と歪めて世にも情けない顔を見せる。

おばさん、怒るとマジで怖ろしいから……

「こつ言う時にはこつちから正直に話して謝っちゃうのが一番だぜ。それも、出来るだけ早い方が良い」

家族が亡くなった後、嫌な事や辛い事を後回しにして収拾付かなくなつた事を

何度も経験している俺が実感を込めて諭すように言うと、

「……そうだね、じゃあ、これからすぐウチ行って来る」

遥はしょぼんとしながら呟き、服を着替え始めた。

「待てよ、俺も一緒に行くから」

「え……でも、悪いのは私なんだし」

ほつとした様な表情を俺に向けながら、バツが悪そうにもじもじす

る遙を軽く抱きしめ

「何言つてんだ。俺達はいつでも一緒だろ」とピンク色の唇にキスをする。

「えへへ……シヨウ、大好き!」

遙は嬉しそうに笑うと、もう一度唇を重ねてきた。

「なるほど、ね。

そういう訳だったの」

遙の家の居間の床に正座する俺達の前で、今晚のカレーを作り掛けていたおばさんが

お玉をヒュンヒュンと振りながらスタスタと往復している。

「さつき、由香里先生からお電話があったの。

大丈夫だとは思いますが、遙とシヨウくんの様子はどうですか、  
つてね」

遙の体がビクッと震えるのが横目に見え、思わず苦笑してしまう。

それにしても、内緒にしてたらエライ事になっていただろうな……

俺は自分の経験則に思わず感謝してしまった。

「ま、今回は二人で正直に言ってきたからパパには内緒にしておく  
わ。

あと、シヨウくんには殆ど責任は無いんだから良いとして……

遙。

「ひゃい!」

遙が思うさまキョドリながら半泣きの顔を上げるのを見て、俺も一緒に顔を上げおばさんの顔を見る……と……

穏やかな微笑と声なのに、おばさんの姿が途方も無くデカく見える！俺は思わず天井に向かってその姿を見上げてしまった。

遙はカタカタと小刻みに震えながらおばさんの顔に視線を向けてい

るが、

その瞳はまるでトンビに追い詰められたスズメの様な印象を感じさせた。

「あなた、来月のお小遣いナシね。後、今日から再来週いっぱいまで、

シヨウくんの部屋に行くのを禁止します」

あちゃー……ま、でも無期限禁止に比べれば相当マシか。

俺の予想としては、期限切らずにしばらく禁止、位言われると思っ  
てたけど。俺は罰が思ったより軽かった事に安堵しながら遙を見る  
と、遙はまるで魂が抜けたかの様にあんぐりと口を開けたまま呆け  
ていたが、

瞳からぶわあっ！と涙を溢れさせながら突然叫びだした。

「へ……ええ！？そ、そんな！そんなのヤダ！ヤダ！

ヤダようっ！！シヨウの部屋につちゃけなひだんで！！」

をい、遙さん。落ち着け。最後の方は日本語になってないぞお前。

「お黙りっ！！

あなた自分が何をしたか解ってるの！？

今までお酒なんて飲んだ事無かった娘がいきなりそんな事して！  
下手すれば急性アルコール中毒で死ぬ所だったのよ！

大体、最近のあなたはシヨウくんに頼り過ぎです！

シヨウくんが大好きなのは構わないけど、

あなたがシヨウくんに大きな負担を掛ける事を自覚なさいっ！  
！」

それまでの穏やかな表情から一変し、キツとなった怖い顔で遙を睨  
みつけ叫ぶおばさん。

「ひん！……れも、れも……ヒヨウに逢えなひなんへあらひ死んひ  
やうもん！」

ポロポロに泣きじゃくってぐぐりながら、それでも食下がらうとする遙。

さて、どうしたもんかね……

俺はこの状況をどうやって収めようかと必死で考えを巡らせ始めた。

## お説教！

とりあえず、ビビりながらもおばさんをキッと睨みつけている遙をなんとかしないと状況は悪くなるばかりだ。

だが、この状態で俺が普通に嗜めようとする、遙はきつと

「なによ！シヨウはあたしと一緒に居たくないの！？」

とか駄々を捏ねるだろうから、その時の対応策も考えて、と……

「いい加減にしなさい！そんなに我が儘ばかり言うのなら、私にも考えが有るからね！」

鬼の形相のおばさんが今までよりも一オクターブ高い声で遙を怒鳴りつけた。

つと、ヤベエ！おばさんの堪忍袋の緒が切れそうだぞ！？

急いで対応しないとヤバい事になる！

「おばさん、ちょっと良いですか？俺が遙に言い聞かせますから」

俺はかなりビビりながらでは有るが、勇気を振り絞りおばさんに向かって懇願した。

「……シヨウくん、ちょっと黙っててくれる？」

今、私がこのバカ娘にしつけをしているのだから」

……ハイ、スミマセンでした……

と半泣きでビビりながら引つ込み掛かる自分の根性を叱咤激励し、俺はもう一度おばさんに懇願する。

「はい、すみま……じゃなくて、確かにおばさんの言われる通りなんです、

今回の一件には俺も深く関わっているワケですし、今ヒートアップしているおばさんと遙が

このまま話しても事態は悪化する一方だと思えますし」

切れ長な、色っぽいおばさんの瞳を気合を入れて真摯に見返しながら

ら俺は一言一言確認するように言葉を吐き出す。

「……………そうね、貴方たち二人の問題でも有るものね……………良いわ、シヨウくん。」

遙にあなたからお説教してみてください。その後の遙の態度によって罰を決めます」

あちゃー……………さっきの二週間俺ん家出入り禁止よりも重い罰が来る事は間違いないぞ、これは。

だが、最悪の方向への展開だけは回避できたみたいだが。

「じゃあ、失礼します」

俺はひとつ深呼吸し、おばさんから遙に振り返った。

「ぐすつ、ひぐつ、ふえつ……………」

と、俺の目に涙と鼻水でぐしゃぐしゃの遙の可愛らしい顔が映る。

「プッ」

俺は我慢し切れずに、しかつめらしい表情は全く崩さずに、本当に小さく、聞こえるかどうか位のレベルで噴出してしまった。

「……………シヨウくん、今「プッ」とか言わなかった？」

背後から凄まじい怒気とともにおばさんの穏やかな声が掛けられる。

「と、とんでもないです！」

俺は自分の腿をぎゅむうと抓り上げながら、平然とした様子を装いつつおばさんに答えた。

危ねえ危ねえ、自分で全てをぶち壊すところだったぜ……………

冷や汗を掻きつつも再び深呼吸をし、改めて遙に向き直ると、

遙は俺の顔をじっと見詰めながらしゃくり上げ続けていた。

「さて、遙、俺の話聞いてくれ」

「なによー！シヨウはあたしと一緒に居たくないの！？」

おま……………いきなり予想通り過ぎんだろ。

ってか、まだ何も言って無えだろが。

思わず額を抑えながら溜息を一つつき、

「まだ何も言ってないだろうがよ……ちょっと落ち着けよ」

と言ってティッシュを取り出し、遥のつんとした形の良い鼻に当てる。

「ほら、鼻水出てんぞ。ちーんしなさい」

ちーん！

俺の言葉にほぼ状況反射でちーん！と鼻をかむ遥。

その時、背後からピンピンに吹き付けてきていたおばさんの怒気がふつと緩んだのを感じた。

「なあ、遥。俺達、今までおばさんにはかなり自由にやらせてもらってきただろ？」

いくらお前と俺が幼馴染で、俺んちとお前んちが家族同然の付き合いだったからって

普通、こんなに大らかに見守ってくれる状況なんてちょっと無いぜ」

大きな瞳にキラキラ光る涙をいっぱいに溜めながら、じつと俺の声に耳を傾ける遥。

うあ、やべえ、むちゃくちゃ可愛いじゃねえか……むぎゅっと抱きしめて頬擦りしたりキスしたりアレしたりしたくなっちまう……

ムクムクと湧き上がってくる欲望を必死で抑え付け、俺は話を続ける。

「だけど、俺達はちょっとその状況に甘え過ぎてたよな。

もちろん、お許しの有る限り甘え続けて行きたいけれど、今回みたいな事が続いたら

せつかく俺達を信頼して自由にさせてくれているおばさんやおじさんを裏切る事になるんだ。

そうになると、俺達は信じて貰えなくなっ行ってしまっ……解かる

よな、俺の大好きなお前なら」

噛んで含めるように、一句一句をしつかりと発音し、遙の目をじつと見詰めて離す。

遙の瞳から少しずつ涙が退いて行くのがわかり、俺は少し胸を撫で下ろした。

「だから、今回でかしまった事に対してキチンと罰を受けて反省し、誠意をおばさんに見て貰うんだ。

そうすれば、きっと今まで通りに俺とお前が付き合っていくのをおばさんも許してくれる筈さ。

ね、おばさん？」

俺は内心かなりビクビクしながら、だがそれを表には出さずに勤めて明るい笑顔でおばさんを振り返った。

「……しょうがないわね、シヨウくんには適わないわ。

遙、本来ならシヨウくんの説明した事をあなた自身に気付いて欲しかったわ。

でも、シヨウくんラブラブで頭の中がピンク色のあなたには無理だったみたいね」

すっかり穏やかな雰囲気に戻ったおばさんが、腰に手を当てながら遙に向かって優しく問い掛ける。

「……はい、ごめんなさい、ママ……」

遙もすっかり大人しくなり、しゅんとして俯き深く反省している様子だ。

「うん、解かった様だから良いわ。じゃあ、さっき言った通り、来週一杯はシヨウくんの部屋に行く事は禁じます。

だけどそれ以外は今まで通りで良いから。シヨウくんも家にご飯食べに来るのも遠慮しないでね」

本来なら二週間出入り禁止、だったのを微妙に来週一杯の一週間半におまけしてくれながらおばさんがウインクする。

「はい、ありがとうございます」

「はい、解かりました、ママ……」

俺と遥は八毛る様に応えながらバツと頭を下げた。

「あ！そうだ！今週末……」

お説教も終わり、おばさんが入れてくれたお茶と手作りのフルーツタルトを頂きながら談笑を始めた途端、遥が大声で叫んだ。

「あ！そうだ！忘れてた！！」

そして俺も今週末の、亜由美に俺達の事を話すという大事な仕事を思い出して叫んでしまう。

「え？今週末がどうかしたの？」

叫んだ後に顔を見合わせながら困ってしまった俺達に、おばさんが不思議そうに声を掛けて来た。

「えーとですね、今週末、実は……」

俺はおばさんに今週末の事をかいつまんで説明する。

先日、亜由美のお義母<sup>かあ</sup>さんであるまどかさんが来て、亜由美に俺と遥が付き合っている事を知らせる事をお願いされた事、

また、その時には俺だけじゃなくて遥も一緒に行くと約束した事……

「ああ、そのお話なら聞いてるわ。すっかり忘れてたけど」

うふふ、と微笑むおばさんの口から飛び出た言葉にびっくり仰天する俺と遥。

「ええ！？だ、誰から聞いたのママ？」

遥の疑問は俺の疑問と正確に一致している。まさに俺もそれを聞きたい！

「昨晚ね、まどかさんから電話が有ったの。今週末、ショウちゃんと遥ちゃんを辛い目に遭わせてしまって申し訳ありません、ってね」

……はあ、さすがというべきか何と言うべきか……

凄く有能な雰囲気を感じたけれど、こりゃ予想以上に手抜き無いな。

「だから安心して行ってらっしゃい。ご飯もご馳走になってくるん

ですってね。

「だけどあんまりハメを外しちゃダメよ？」

優しいな微笑のまま、俺達に言うおばさんには苦笑を向ける他無い。つつつても、ハメを外すような楽しいイベントじゃないって事は百も承知で言ってるんだろうけど、ね……

予感……？

お茶を頂いてから俺は一度自分の部屋に戻る事にして、遥の家を後にした。

「シヨウくん、今日はバイトでしょ？」

カレー有るから、帰ってきたらおいでなさいね」

ニコニコしながら俺を見るおばさん。

「シヨウ……頑張ってるね」

メソメソしながら俺を見る遥。

玄関先まで出た俺を見送りながら、キスしちゃう気満々だった遥の目論見は

「たまには私もシヨウくんを見送ろうかな」

と言いながら一緒に出てきたおばさんによって、もの見事に潰えたワケだ。

そりゃもちろん、俺だって遥とキスをしたかったがこの状況下で、しかもまだ真昼間の玄関先で

堂々とキスなぞするのはヤバイ事この上ないのだが、脳みそピンク色と化した遥は一向に気にしない。

先日も、夕方帰り掛けに遥がどうしてもとせがむので軽くキスをしたのをお隣のおばさんに見られ

「あらあら、熱々ねえ」

と冷かされた上にご近所中に話されてしまい、途轍もなく恥ずい状況となっているワケだが……

「さ、バイト行かじゃ」

俺は小走りで家に帰り、DT50に跨りバイトへと向かった。

「おう、もう今日は片付けようぜ」

社長に言われ、表に並べてある中古車を店内に入れ様と外に出ると、綺麗な星空が見えている。

「うっん、明日も天気良さそうだな」

うっん、と伸びをしながら独り言を言った時、

「そうね、しばらく良い天気が続きそうね」

と聞き覚えの有る声で応えられ

「うわ!？」

と驚きながら声の主を探し、

「あ、亜由美！」

人影もまばらになった歩道に、可愛いミニのワンピース姿の亜由美が微笑みながら立っているのを見出した。

「こんばんは、シヨウくん！アルバイトお疲れ様！」

遥ちゃんもシヨウくんも、もう風邪は大丈夫なの？」

ぎくっつ!!

そう言えば、今日は二人揃って休んだんだよな。

亜由美の事だから同じクラスの遥はもちろん、俺が休んだ事も知ってるだろうし……

休んだのにバイトしてる俺って、かなり怪しいな、常識的に考えて

「あ、ああ。」

沙里と香奈に風邪貰っちゃったみたいで、二人纏めてダウンしちまった。

だけど俺は午後から熱も下がったから、バイトには来たんだよ。

生活費を稼がなきゃならないしな」

あたふたしながらも、なんとか言い訳を思い付き捲し立てる俺。

しかし、逆に怪しまれちゃったかな……?」

「シヨウくん、こんばんは。無理しちゃダメよ」

その時、助け舟を出す様に色っぽい女性の声が響いた。

「え?」

間抜けな声を上げながらふと見ると、亜由美の後ろには、艶っぽく

微笑むまどかさんが買い物袋を持って立っている。

「あ、こんばんは。お買い物ですか？」

俺はまどかさんに挨拶しながら、そう言えば、俺のバイトしている店から亜由美の家が近い事を思い出した。

「そうよ。今晚は亜由美と私で土曜日の仕込みの為準備をするの。じっくりと煮込んだおいしい〜いものをご馳走するから、楽しみにしててね」

まどかさんの料理の腕はプロ並みだからな……こりゃ、期待出来そうだ。

つて、そんな事喜んでいる場合じゃ無いんだけどな。

「シヨウくん、バイトは何時までなの？」

俺の腕に自分の腕を絡ませながら、亜由美が軽く抱き付きつつ聞いて来るのに

思わず胸の鼓動が2オクターブ程跳ね上がる。

むにゅ、と押し付けられた柔らかな胸の感触で亜由美の魅力的な裸か体を思い出しちまうよ……

「あ、ああ、後は片付けだから三十分位かな」

「じゃあ、ウチに来てご飯食べてきなよ！今日はまどかさん特製の焼豚と八宝菜だよ！」

豊かな胸を更に押し付けながら、亜由美が俺にぎゅっと抱き付く。

や、やべえ……反応し始めやがった。

この馬鹿息子、見境無しかよ。

ついついニヤけ面になりながら一瞬戸惑った瞬間、まどかさんから視線を感じて顔を上げる。

すると、優しく微笑みながら、しかし強い光を持って俺を見詰めるまどかさんの瞳があった。

「ありがとう、亜由美。だけど今夜は遥の家でカレーを作ってくれているから、遠慮させてもらうよ。」

まどかさんとお前の料理は、土曜日の楽しみに取っとく事にさせ

てくれ」

俺がそう言いながら抱きついていている亜由美の肩に手を掛け、そつと体を離させると

「そう……残念だな」

哀しげな声で言いながら、潤んだ瞳で俺を見詰めて来る。

「ゴメンな」

その瞳にいたたまれなくなった俺は、亜由美から目を外してバイクを片付けを再開した。

「亜由美、シヨウくんのお仕事の邪魔になるから帰りましょ。」

「じゃあね、シヨウくん。おやすみなさい」

「あ、はい。おやすみなさいまどかさん。」

……おやすみ、亜由美」

まどかさんの声にハツとしながら亜由美を見ると、その瞳に少し涙が盛り上がってるのを見付けた。

だけど、俺は気付かない振りをしてしながら亜由美に向かって、精一杯の笑顔で微笑んだ。

「うん、おやすみシヨウくん。また明日ね」

くすん、と小さく鼻を嚙った亜由美がぱあつと微笑みながら俺に応える。

亜由美、もう薄々気付いてるんだな……

俺は心の底から湧き上がって来る罪悪感に苛まれ、亜由美の可憐な笑顔から瞳を逸らした。

## 夏休みスペシャル：さよなら、夏の日 前編（前書き）

こんにちは、作者です。

いつもご愛読頂きましてありがとうございます。

最近は生活の変化により多忙となりなかなか小説を更新できなくて申し訳ありません。

八月後半には一段落着きそうなので、定期的に更新出来ると思います。

お待たせしてしまいましたが、どうぞお待ち頂ければと思います。

また、今回から前・中・後編にて夏休み特別企画をお届けします！  
高校三年生の夏、つまり本編から約一年後のシヨウと遙の夏休みタ  
ンDEMツーリングを描いた本作は、近い内に番外編として投稿しよ  
うと思ひ執筆していた物です。しかしまさにシーズン真っ盛りの今  
を逃しては勿体無いと思ひ、投稿させて頂きます。

本編は少々お休みしますが、楽しんで頂ければ幸いです。

それでは、お楽しみ下さいませ！

## 夏休みスペシャル：さよなら、夏の日 前編

「きゃ〜！海よ海〜！！」

昨夜泊まった野沢温泉の旅館を出てから細い山道を駆け上り、やっとの思いで頂上を過ぎて下り始めた時にキラキラと輝く日本海が姿を現した。

その雄大な景色に感動し、タンDEMシートで歓声を上げながらひよいと立ち上がる遙。

つて、おい！

「ちょ！おま！危ねえつつの！！」

いくら遙が軽いと言っても、たかだか125ccの小型バイクでは、急激な荷重変動に耐え切れずグラグラとフラ付いてしまう。

「んきゃ！」

スツテン、と言った感じでシートに転び座りながら悲鳴を上げ、

「もうバカシヨウ！危ないじゃない！」

と自己中心的な不満を漏らしながら俺にむぎゅっとしがみ付いて来る。

ふにゅ

ぬお、遙のバカでかいおっぱいが背中に押し付けられる感触に、俺の一部に元気が漲って来ちゃった……

「んふふ〜、あたしのおっぱい、気持ちイイ？」

見なくてもどんな顔をしているかハッキリと解るような甘え声で言ってくる遙に

「バカもの。気持ちイイに決まってんだろ！」

と照れ隠しも含めて吐き捨てるように応え、ギアを一気に二段落としてアクセルをワイドに開けると、

ギューオーーーン！と元気な排気音エキゾーストを響かせながらGS125Eカ

タナは穏やかに加速を始めた。

……やっぱ、荷物満載で二人乗りの4スト125シングルCC単気筒じゃ猛ダッシュってワケにはいかねえな……  
るるー、と哀愁を漂わせながらしくしくと涙を流す俺の気も知らずに、

ふんふんふん とか軽快なメロディで鼻唄を奏で出した遙が再び俺にむぎゅっとしがみ付いてきた。

「やったあ！パパとママの許可が下りたわよ！」

夏休みに入って三日程経った暑い日の夕方、俺のバイト先のバイク屋に

満面の笑顔にアヒル口を張り付かせた遙が飛び込んで来た。

「え！？マジか？」

十中八九ダメだろうと思っていた俺が思わず大声を出しながら遙を見詰めると

「マジマジ！一週間位だったら息抜きにね、って！これで二人っきりのタンデムツーリングに行けるわね！」

心の底から嬉しそうに笑っている遙がドーン！と俺に抱き付いて来る。

「お、遙ちゃんいらっしやい」

社長がタンクトップから零れ落ちそうにぼよんぼよんと揺れている遙の胸に向かって嬉しそうに声を掛けると、

「あ、社長さんこんにちはー！シヨウは真面目にやってますかあ？」  
とウキウキした気分を隠そうともせず遙が応える。

「ああ、汗だくになりながらやってるぜ。自分のGSカタナの整備をな」  
少し意地悪そうに言う社長に、

「な！何を言ってるんですか社長！今日はもう自分のバイク整備しろ

つて言ってくれたんじゃ……」

あたふたしながら俺が言い掛けた時、俺のバックを取った遙がチョークスリーパーを掛けて来た。

「こゝらゝ！ダメじゃないバカシヨウ〜！」

「ぐええ、ギブギブ！」

むぎゆうとくつ付いてジャレあう俺達を見て、

「いいなあ、シヨウ。遙ちゃん、俺にもその技掛けておくれ」

唇に油塗れの人差し指を当てながら物欲しそうに呟く社長。

「え〜、でもそんな事したら奥さんに怒られちゃうモン」

俺から離れないまま、可愛ゴぶりながら答える遙に向かって深い深い溜息をついた社長が

「なあに、大丈夫さ。もう俺とカミさんの間にはキミ達のようなトキメキなんざ残ってないから。」

大体、カミさんにそんな技掛けられても、胸がムギユツと来る前に三段腹がモギユツと来ちまつて

色気もへったくれもありやしなげ。十年前はそんな事無かった……んだが」

と半笑いで答えつつ、俺と遙がサーッと青ざめて行く様子に気付いた。

もう遅いけど、社長、後ろ！後ろ……

「あ、あ、だがな二人とも！長い年月を一緒に越えてきた夫婦ならではの味つてもんが痛い痛い母ちゃん痛いよ！！」

そう、社長の後ろにはいつの間にか菩薩様の様な微笑を湛えた奥さんが立っていたのだ……

「シヨウくん、自分のバイクの整備は終わった？」

生きたままヒグマに喰われているような社長の声にならない悲鳴を縫って、

社長の耳朶を掴んだ奥さんの穏やかな声が俺に向けられる。

「ひゃ、ひゃい！終わりましゅた！」

俺がその迫力に恐れ戦きながらカミカミで答えると

「そう、じゃあ今日はもうアガって良いわよ。バイクの片付けも宿六に全部やらせるから」

と神々しいほどの微笑を俺に向ける奥さん。

「で、でもまだ時間も残ってるし……」

涙目の社長が俺を拝んでいるのに負け、なんとか奥さんに食下がろうと試みたのだが、

「いいのよ、もう帰りなさいね。遙ちゃんも迎えに来てくれた事だし?」

奥さんの全身から噴出す圧倒的な迫力と怒気に心臓を掴まれてしま  
い、

「ひゃ、ひゃい！お疲れ様でした！」

俺は愛車<sup>カタナ</sup>を店の外に引っ張り出し、遙を乗せてエンジンを掛け暖気もせずに走り出す。

社長……死なないで下さいね……

俺は心の中で手を合わせ、アパートに向かってカタナを走らせた。

「おじさん、おばさん、ツーリングの許可頂きましてありがとうございます  
ございました」

遙の家で夕食を頂いている時、俺はおじさんとおばさんに向かって  
頭を下げる。

香奈と沙里は三泊四日の林間学校に今朝方出掛けたばかりなので、  
今日の夕食はいつもよりかなり静かな時間となっていた。

「そうね、三年生の夏休みなんだから本当ならとんでもない話なん  
だけど、

遙もシヨウくんも期末試験で二十位以内に入ったし、ま、あなた  
たちが付き合いだして

最初の夏だからね。高校生最後の夏でも有るし、少しくらいは大  
目に見るわ」

やれやれ、と言った風に微笑みながらおばさんが俺を見詰める。

「そうだな、ま、シヨウと遙なら大丈夫だろうし。」

但し、本当に安全運転で行ってくれよ。後、能登のおばさんに迷惑を掛けない様にな」

「はい、肝に命じます」

俺は、以前から俺と遥が行きたがっていたタンデムロングツーリングの許可が意外にあっさり下りた事に喜びながらも、

おじさんとおばさんの信頼に必ず応えなければ、と気を引き締めた。ふと隣に座る遥を見ると、珍しく神妙な顔をして俯きながら話を聞いていた様だ。

「パパ、ママ、ありがとう。あたしもシヨウも必ず元気に帰ってくるから」

ふうつと頭を上げた遥の大きな黒目勝ちの瞳から、ポロポロと涙が零れている。

「なあに、遥。泣くほど嬉しいの？」

それを見たおばさんが苦笑しながら遥にティッシュを渡すと、ちーん！といい音を立てて遥が鼻をかんだ。

「うん。だって、あたし、シヨウと一緒に……」

そこまで言うと再び涙を溢れさせて言葉に詰まってしまう。

俺は遥の肩を抱きながら、

「遥をお預かりします。必ず元気に帰って来ますから」

と言い、再び深く頭を下げた。

「わあ、綺麗な夕日……」

砂浜の海岸にカタナを停め、しばらく二人で海で戯れていると空が紅く染まりだし、

程なく辺りは真っ赤な夕日の中に溶け込み始めた。

「ねえ、シヨウ……」

さっきまできやあきやあとはしゃいでいた遥が、メインスタンドを立てたカタナのシートに座った

俺の隣にひよい、と身を寄せて座りつつぴと、とくっ付いて来て大きな瞳を潤ませながらじつと俺の顔を見詰める。

「……お前は夕日よりもずっと綺麗だよ、遥」

俺は普段だったら絶対に言えない、齒の浮く様なセリフをすらっと言えた自分に驚きながらも、

嬉しそうに微笑んで瞳を閉じた遥の愛らしい唇にそっと自分の唇を重ねた。

## さよなら、夏の日 中編

「まあ遙ちゃん、大きくなって！」

午後八時ジャスト、俺と遙を乗せたカタナは能登半島の先に有る小さな村の、

遙のお母さんの親戚の家へ無事に辿り着いた。

海岸でキスした後、二人してガマンしきれなくなって人気の無い岩場で

大汗掻きながら頑張ってしまったので到着が随分遅れたのはナイシヨの話しだ……

「こんばんは、おばさん！本当に久し振りだね」

来るのは中学生以来だと言う遙は涙を浮べながらおばさんに抱き付いている。

おばさん、とは言え、遙のお母さんの従姉妹だというその女性はまだまだ若く、また遙にどことなく似ていてかなりの美人だ。

「おばさん、彼があたしの幼馴染で彼氏のシヨウよ！よろしくね！」

しばらく再会を喜び合っていた二人だったが、一段落着いた所で遙が俺をおばさんに紹介してくれた。

「まあ、あなたが噂のシヨウくんね。遠い所をようこそ！」

私は遙のおばの美里みさとです。よろしくね」

「あ、初めまして！厚かましくお邪魔してしまって申し訳有りませんが、お世話になります」

線の細い、儂げな雰囲気を漂わせる美里さんにちょっとドキツとしながらバツと頭を下げる俺。

「さあ入って！今日はあなた達が来るからご馳走にしたの。」

あ、でもその前にお風呂に入って汗をながしちゃった方が良いかしら？

まだ克弥かつやも帰ってきてないし」

嬉しそうに俺達を玄関に誘う美里さんの言葉に、

「え！カツちゃん帰って来てるの!？」

と遙が驚いたように声を上げた。

「ええ、今年の春に名古屋から帰って来たの。」

こっちでは本家の手伝いをしてるのだけど……」

一瞬、遙に答える美里さんの表情が曇ったのを不審に思った俺だが、克弥、と言う人物が誰なのかも解らないのだから反応しようも無い。

「懐かしいなあ……カツちゃんと会うのは、中学一年の時以来かな。」

あ、カツちゃんはね、おばさんの弟さんなの。

あたし達より四つ年上だから、えと、二十二歳になるのかな？

あたしン家が能登にちよくちよく来てた頃には、あたしやカナサリはカツちゃんに凄く可愛がってもらってたの」

遠い目をして想い出に浸りかかった遙だったが、ハッと俺の事を思い出した様で急いで俺に説明してくれる。

「さ、いつまでもこんな所で話し込んでないで、お風呂に入ってさっぱりしちゃってね！」

克弥ももうそろそろ帰ってくると思うから」

俺達はニコニコと笑う美里さんに導かれ、大荷物を抱えて家の中に入った。

「ふゝ、極楽極楽！」

真っ黒に日焼けした背中を石鹸でゴシゴシと擦ってやると、気持ち良さそうにオジン臭さ全開で遙が溜息をついた。

お風呂に入る前、さすがに別々にしないとまずいだろうと思った俺達だったが

「あら、遠慮しなくたって良いのよ！おねえさんからあなた達がどれだけラブラブなのかは聞いているから」

とにこやかに微笑む美里さんに言われ、それでは遠慮なく、と二人して入浴させてもらう事にした。

それにしても、だ……

「なあ、遙。でかい家だな、ここ。風呂も五、六人入れそうだし」

着いた時から思っていたのだが、この家はかなり古いのは確かだが、驚くほど広い。

カタナを停めた玄関も古い農家によくあるタタキ、ってヤツで、普通に軽自動車位なら車庫代わりに駐車できそうだ。

部屋もたくさん有る上、タタキを上がってすぐの広間は十数人で食事出来そうだ。

「ええ、このお家は昔の庄屋さんのお屋敷だからね。

でも、ここよりも本家の方がもっと広いのよ。本家はこの辺りの漁師さんの元締めだから。

と言つてもね、この辺りの家の人はみんなほとんど親戚なのよ。

だから苗字も同じ人が多いし、あんまり他の地域との交流もないみたい」

遥の解説にほう、と感嘆の声を上げながらザバっとお湯を掛けて石鹸を流してやる。

「今度はあたしが洗ったげる！」

にんまりとしたアヒル口でくるっとな振り向いた遥の胸がぶるん、と揺れるのを見た俺は

「あ、ああ頼むぜ」

思わずぎゅるん、と元気を増してしまう不肖の息子をタオルで隠しながら急いで後ろを向く。

「んっふっふっ、なんだか一部がとっても元気になつてるみたいなんだけどお？」

ぐわば！と背中に抱き着いて息子を掴んできた遥に

「バ、バカもの！何をしているのだ己はあ！」

と大声を上げながら抵抗しようとする俺だったが、肝心要の息子を握られては迫力無い事夥しい。

「あたしの胸をスポンジ代わりにして背中洗ってあげるね」

ひよい、と片手で石鹸を胸の谷間に入れた遥が、むぎゅっとな押し付けた胸をんしょんしょと上下させて背中を洗い出す。

「ちよ！おま！気持ち良過ぎるっっーの！！」

「えへへ、嬉しいな。もつと気持ち良くしてあげる」  
……結局、一時間近くも風呂でジャレていた俺達は、美里さんが心配して様子を見に来た頃には  
すっかり茹蛸の様になってのぼせてしまっていた。

「いただきます！」

「いただきます」

大きなテーブルの上には海の幸がドンと広がり、俺と遥は瞳を輝かせながらがつつき始めた。

「おいしー！」

「うん、ホントに美味しいです」

刺身の盛り合わせ、焼き魚、煮魚、うに、カニ、漁師汁……

新鮮なのはもちろん、美里さんの料理の腕前は相当なものだと言う事が解る。

「あら、嬉しいわ。たくさん食べてね」

にっこりと微笑みながら給仕をしてくれる美里さんに頷きながら、俺と遥はガツガツと料理を貪り食った。

「ふい〜、満腹満腹」

ぽこつと出たお腹をぽむぽむと叩きながら満面の微笑を見せる遥を見て美里さんが楽しそうに笑い、

「遙ちゃんはホント変わらないわねえ。あの頃の、元気でやんちゃなまま」

と少し遠い瞳を見せながら独り言の様に呟く。

「美里おばさんだってぜんぜん変わらなくてビックリしちゃった！  
いつまで経っても綺麗なままだし。ママなんて結構目尻の皺が目立つようになってきたのよ」

にんまりとしたアヒル口でとんでもないセリフを吐いた遥に、俺は思わず真っ青になってしまう。

「おい遥！そんな事をデカい声で……」

つと、ここにはおばさんは居ないんだっけな。

しかし、遥も懲りないよなあ……

「だ〜いじょうぶ！ママ居ないモン！」

ぺろっと舌を出しながら遥が言い、俺と美里さんが思わず顔を見合わせて苦笑した時。

ガラ、と玄関の戸が開き、「ただいま」と小さく誰かの声が響いた。

「あら、克弥。お帰りなさい」

一瞬嬉しそうに、哀しそうに、なんとも言えない表情を見せた美里さんが立ち上がりながら答え、「え！カツちゃん帰って来たの！」  
と言いながら遥もバツと立ち上がり嬉しそうに美里さんの後に着いて行く。

一瞬、俺はどうしようかと迷ったが、俺一人で残っても仕方ないし、ちゃんと挨拶をした方が良さだろうと思いついて俺も二人の後を追って玄関に向かった。

「お帰りなさい、カツちゃん！」

「お邪魔してます！ホント、久し振りだね！」

少し遅れた俺が玄関に着いた時、満面の微笑みの遥が克弥さんに挨拶をしている所だ。

「……ああ、遥か。久し振りだね」

遥を見て優しげに微笑んだ克弥さんだったが、俺の姿を認めた瞬間にその表情が一瞬で険しくなった。

「誰だ、貴様」

挨拶をしようと口を開き掛けた俺の口から声が出る前に、克弥さんの口から敵意が形となった様なセリフが吐き出され、

俺は思わず口をパクパクさせながら言葉に詰まってしまふ。

「克弥！なんて事を言うの！？彼は遥ちゃんの幼馴染で彼氏のシヨウくんよ！」

今日、二人で来るって言って置いたでしょ！」

美里さんが厳しい口調で咎めるが、克弥さんはフン、と鼻を鳴らし「……ああ、そうだった。姉さん、遥がバイクで来るって言ってた

ね。

「って、バイクってこれかい？」

相変らず険悪な雰囲気を漂わせた目で俺を見ながら、俺の力タナを見てせせら笑う。

俺は、カツと熱くなる激情を苦勞して抑えながら

「……シヨウです。お世話になってます」

とだけ、辛うじて平静さを装って挨拶をした。

「遙、こんなチンケな原付でよくココまで来たね。」

帰りは運賃出してあげるから、電車で帰った方が良いんじゃないか？」

美里さんや遙に見せていた優しげな顔の面影も無い、憎しみの籠った表情で

俺を睨みながら吐き捨てる克弥さんに、遙が大口を空けたままポカンとしてしまっている。

「克弥！いい加減にしなさい！！」

切れ長の瞳から、怒りの余りだろうが涙まで零しながら怒鳴る美里さんを一瞥した克弥さんは

「今日は晩飯要らないから」

とだけ言い捨て、ドタドタと激しい足音を響かせつつ去っていった。

すっかり興を削がれてしまった俺と遙は、必死で謝る美里さんに気にしてませんから、と答えて

美里さんが用意してくれた一階の奥に有る客間の布団に寝転んでいた。

「ゴメンね、シヨウ……あんな態度を取る様なひとじゃなかったんだけど」

遙もすっかりシユン、となってしまう、しきりに俺に謝ってくる。

「いいさ、気にしてないから。きつと克弥さん、なんか嫌な事でも有ったんだろ。」

誰だって虫の居所の悪い時は有るさ」

俺がそう言いながら、シヨンポリとしてしまった俺の最愛の少女のグラマラスな体をぎゅっと抱き締めると

「…………えへへ」

と、嬉しそうにアヒル口をニンマリとさせ、さっきまでのシヨゲ具合はどこへやらで

嬉しそうに俺の背中に手を廻して、むぎゅっと抱き締め返してきてくれた。

「シヨウ、大好き」

俺の瞳をじっと見詰めながら、大きな瞳を潤ませて唇をそっと突き出す遙に堪らなくなり、

「ああん…………」

俺は遙を布団の上に組み敷きながら、可愛らしい唇を少し強引に奪う。

「ん…………」

遙が小さく喘ぎながら瞳を閉じ、俺の首に手を廻して唇の感触を楽しむ様に軽く擦り合わせて来る。

と、その時、俺の耳にどこからか叫び声の様な、悲鳴の様な声が聞こえて来た。

「…………んむ？」

遙の唇の感触を惜しみながらそっと顔を上げると、

「やあん…………もっとチュウしてよお…………」

とイヤイヤをする様に首を振りながら遙が文句を言ってくるが

「何か、聞こえないか？」

「え？」

俺の真剣な顔に驚いたのか、遙も体を起こしながら耳を澄ました。

「…………ええ、何か、怒鳴り合うような声が聞こえて来るわ」

やはり、空耳じゃないな。

時計を見ると、いつの間にか午前二時近くになっている。

「気になるな…………」

「そうね…………」

俺と遙は顔を見合わせて頷くと、下着姿かた短パンとＴシャツに着替え、足音を忍ばせつつそっと廊下に出て、声のする方を探りながら歩き出した。

さよなら、夏の日 後編（前書き）

こんばんは、作者です。

お待たせしてしまいました。再開させて頂きます。

当初は三本完結の予定でしたが夏休みスペシャル、

もう一編増えまして四部構成となりました！

明日、完結編を投稿致しますので、どうぞ楽しみに！

## さよなら、夏の日 後編

「……!」「……!……!」

うん、確かに何か、まるで言い争うような声が聞こえてくる。

「もしかして、おばさんとカツちゃんかケンカしてるのかな」

俺の後ろで、俺のTシャツの裾を握り締めて心細げについてくる遥が小声で呟いた。

「ああ、そうかもしれないな」

俺も小声で遥に答え、先程の二人の様子を思い出す。

克哉さんが帰ってきた時の美里さんの様子は、普通の姉弟と言う関係だけではない、

なにか違う雰囲気を感じさせられたよな………なんというか、うーん

……

俺が先程の二人から感じた違和感をうまく表現出来ずに、自分の中だけで戸惑っている

「ねえシヨウ、あの部屋から聞こえてくるみたい」

と遥から掛かった声で現実を引き戻された。

つと、いつの間にか階段を上って二階に来てるじゃないか。

「あ、ああ。あそこは誰の部屋なんだ?」

「うーん、確かカツちゃんの部屋だった様な、おばさんの部屋だったよな………ごめん、覚えてないよ」

そりゃ、以前来たのは中学の頃だって言うし、これだけ広い屋敷じや覚えてるわけないよな……

しかし二階にもいくつも部屋があるし、廊下は途中でクランク状になってるし、本当にただっ広い家だよな。

「シヨウ、やっぱりあそこの部屋から聞こえてくるよ」

暗闇の中、じつと俺を見詰めながら不安そうな声で囁いて来る遥の唇に軽くキスをしてから、

「よし、そつと近づいて見よう」  
俺は足音を殺して、怒鳴りあうような声が響くその部屋に近付いて行った。

「……メーやめ……」

「……つて、……くせに！」

部屋に近付くに連れ、段々と聞こえてくる声が美里さんと克哉さんのモノだと言う事が解ってくる。

なにか、言い争っている様だけど、さっきの克哉さんの態度を美里さんが責めてるんだろうか？

「ああっ！ダメ！遙ちゃん達が居るのよっ！！」

その時、一際大きく美里さんの叫び声が響いた。

「あたしが居るから、何がダメなの？」

二人の声が響く部屋の唐紙の前で身を伏せた俺に重なるようにもたれた遙が当惑した様に呟く。

俺は心えずに、そつと唐紙を少しだけ開けて隙間を作り、部屋の中を覗き込んだ。

「！」「あ！」

上下に重なりながら部屋の中を覗き込んだ俺は絶句し、遙は囁く様な小声で呟いてしまう。

一瞬、遙の呟きでこちらに気付かれるのではと心臓が冷たくなったが、二人の耳には届かなかった様で気付く素振りはない。

それにしても、だ……

俺と遙は部屋の中の光景に、啞然としながら固まってしまった。

「ダメよ克哉！もうしないって、約束したじゃな……あつっっ！」

「そんな約束してないよ！姉さんが勝手に言っただけじゃないか。俺は、俺には姉さんしか居ないんだ！」

布団の上で、克哉さんに組み敷かれた美里さんの上半身の衣服は剥ぎ取られ豊かな乳房が露になり、

美里さんに覆い被さった克哉さんが荒々しく愛撫している。

俺と遥は一瞬何が行われているのか理解できず、啞然として見詰め続けてしまう。

「あ……うっ……」

少しの間、絡み合う二人を呆然と見詰め続けていたら美里さんが涙を溢れさせながら悶え、顔をこちらに向け

「あ……！」

と小さく驚きの声を上げる。

それを切っ掛けに俺が我に返った時、美里さんの潤んだ瞳と俺の目がモロに合ってしまった！

ヤバイ！

俺は美里さんが俺達に気付いたので、大声でも上げてしまうのではないかと身を硬くした。

が、美里さんはこちらを見詰めたまま、悲しげな表情で瞳から涙を溢れさせているだけ……

俺は居た堪れなくなり、ぼかんと口を開け惚けている遥を背中に乗せたままそつと立ち上がり、足音を殺して自分達の部屋へと戻った。

部屋に戻った俺達は、黙ったまま別々の布団に入り電気を消した。

俺ももちろん驚いたが、遥にとっては相当衝撃的な光景だっただろうな……

あのくっ付きたがりの遥が、一言も発することなく、俺の布団にも入って来ない。

どれだけシヨックだったんだろう……

だけど、遥になんて声を掛けたら良いか、俺も解からないぜ。

布団に入ったものの、全く眠ることが出来ずに悶々とするばかりだ。きつと遙も眠れてないだろうな……俺がひとつため息をついて寝返りをうつた時、

「シヨウ、起きてるの……？」

遙が俺に、おずおずと声を掛けてきた。

「ああ、起きてるよ」

俺が遙を見ながら応えようと、小電球だけ点けたオレンジ色の薄闇の中、遙の大きな瞳がこちらを見詰めている。

「そっち、行って良い？」

心細げな声で尋ねて来る遙に、

「ああ。おいで」

と布団を捲って優しく答えようと、おずおずと俺の布団の中にしなやかな身体を滑り込ませてむきゅっと抱き付いて来た。

俺は遙の小さな頭を肩に載せる様にして抱き締めながら布団を掛け、石鹸の香りのするおでこにちゅっとキスをする。

「シヨウ、大好き」

遙は小さく呟くと、俺の首筋に唇を押し当てて軽く噛み付いて来た。遙の背中を優しく撫でて上げていると、五分ほどですやすやと可愛らしい寝息が聞こえて来る。

「おやすみ、遙」

俺の最愛の少女が眠りに着いたのを確認して安堵したせいか、俺も急激な眠気に襲われ、一つ大きく欠伸をした後に意識がすうっと遠退いて行った。

「シヨウくん、シヨウくん……」

「ん……んあ？」

誰かに呼ばれ、ふと目を覚ますと目の前に美里さんの綺麗な顔がある。

「あ……おはようございます」

俺は寝ぼけ眼で挨拶しながら、すーすーと寝息を立てている遙の柔らかな身体をそつと退かせて身を起こす。

「シヨウくん、ちよつと良いかしら」

「え……はい」

美里さんの声は憔悴し切った様子がひしひしと伝わってきて、何やら穏便な様子ではない。

枕元に置いた時計を見ると、まだ午前五時ちよつと。

俺は不審に思いつつ美里さんに導かれるまま、遙を布団に残して部屋を出た。

「シヨウくん、ごめんなさい……」

部屋を離れ、歩き出した途端に美里さんが涙を溢れさせながら俺に謝ってくるのに面食らつてしまい、

「え……？一体、何なんですか？なにが有ったんですか？」

俺は狐に摘まれた様に驚いて間抜け声で美里さんに尋ねた。

しかし、美里さんは何も答えずに俺の手を握り、すたすたと廊下を歩いて行く。

俺は美里さんの少し冷たい手の感触に少しドキつとしながら、手を引かれるまま黙つてついて行くしか無かった。

と、玄関まで来た時、差し込んで来る朝日の中、たたきに停めた筈のカタナが見当たらないのに気付く。

「あれ……？」

俺が不審げに上げた声に併せ、俺の手を握る美里さんの手にぎゅつと力が籠つた。

「ごめんなさい、シヨウくん……あなたのバイクで、弟が……」

そこまで言つて、美里さんがぐつと言葉に詰まり、瞳から涙をぶわと溢れさせる。

「へ……？」

俺のカタナを、克哉さんが……？

「克哉さんが、俺のバイクをどうしたんですか？」

一体何が起こつたのか、さっぱり解からずに混乱してしまいながら

美里さんに問うが

美里さんはそれ以上何も言わずに、いや、言えずにボロボロと涙をこぼし続けるばかりだ。

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

突然、美里さんが俺にぎゅうつと抱き付きながら号泣しだし、「は！？」俺は更に混乱する。

「何だって言うんだ、一体……」

俺にしがみ付いたまま泣き続ける美里さんを見詰めながら、俺はほとほと困り果ててしまった……

「な！何やってんのよう!?!」

と、突然響いた金切り声に驚き、混乱した頭のままそちらを振り向くと遙がワナワナと震えながらこっちを睨んでいる！

「なんでシヨウとおばさんが抱き合ってたのよ!?!」

真っ赤になつて湯気を上げている遙に何かを言おうとして、一体何を言ったら良いのか迷いバカみたいに口をパクパクさせてしまう俺。

「おばさん！一体どうしたの？シヨウがおばさんに何かしたの!?!」

鬼のような表情で叫びながらツカツカとこちらに向かつて来た遙が、俺にしがみ付いている美里さんを優しく引き剥がしながらギン！と俺を睨んだ。

「ち、違うの遙ちゃん……シヨウくんは何もしてないわ。」

克哉が……あの子がシヨウくんのバイクに乗って、どこかに行っちゃったの」

「……は?……つて!」

「「ええっ!!」」

一瞬の間を置いてから、俺と遙がほぼ同時に叫び声を上げる。

「な、何でカツちゃんかシヨウウのバイクを!?!」

「どこに行つたか見当はつかないんですか?」

俺と遙に詰め寄せられ、悲しそうな顔で首を振る美里さんの口からは

言葉が出て来ない。

あまりの事に混乱し、何をすれば良いか、どうしたら良いのか考える事も出来ずに俺達が右往左往し始めた時、

ブルルル、と車のエンジン音が近付いてきてキー！っと急ブレーキの音が聞こえ、

「美里ちゃんは何を居るかね！！」

間髪入れずにドンドンと玄関が叩かれて外から大声で美里さんと呼ぶ声が聞こえて来た。

「は、はい！孝光おじさん？」

少し掠れた声で答えながら美里さんが鍵と門を外して玄関の戸を開けると、いかにも漁師さんといった風情の屈強な中年男性が血相を変えて立っている。

「美里ちゃん、克哉の奴が、バイクで海へ落ちた！」

「え……！！！」

美里さんと遙が孝光さんの言葉に絶句したまま、呆然と立ち竦む。

「克哉さんは無事なんですか！？」

一瞬、沈黙が支配し掛けた場の空気を破って俺が叫ぶと、

「あ、いや……あんだ、誰だ？」

言い辛そうに言葉を濁した孝光さんが俺を不審げな目で見ながら誰何した。

「あ！この子はおねえさんの娘の遙ちゃんと、お友達の……」

はつと我に返った美里さんが遙のお母さんの名前を出しながら説明すると、

「ああ、そう言えば遊びに来てるって聞いたな……いや、それどころじゃない！」

とにかく来てくれ！早く！！」

警戒を解いた孝光さんがはつとした様に叫びながら美里さんの手を引っ張り、

美里さんも慌ててサンダルを履きながら俺達に

「は、はい！シヨウウくと遙ちゃんは家で待ってて！」

と言い捨てて玄関から飛び出て行ってしまった。

「……シヨウ、どうしよう……」

少しの間を置き、掠れた声で呟いた遙の声に我に返った俺は、  
「俺達も行ってみよう」

と遙に答え、庭の納屋に自転車でも無いかと思いついて行く。

しかし、ガタガタと納屋の戸を開け、中を覗いた俺の目に飛び込んで来たのは自転車なんかじゃ無かった。

「！これは……」

真っ白なタンクに、鮮やかなブルーのライン。

ブラックに鈍く輝くエンジンと、丸いモナカの様なカタチのマフラー。  
！。

そして、サイドカバーに誇らしげに描かれた「350」のエンブレム。  
△。

「これは、RZ！」

そこには、かつてナナハンキラーの名を欲しいままにした、ヤマハ・RZ350が静かに眠っていた。

## さよなら、夏の日 完結編

「シヨウ、どうしたの？自転車あった？」

納屋の入り口で固まっている俺に心配そうに声を掛けて来る遙。

「あ、ああ、自転車は無いけどバイクは有った。とんでも無いのがね」

俺は遙に答えながら、RZ350に近付いてザツと状態を確認する。キーは付いているし、ナンバーも有る。車検も……うん、切れてない。

バッテリーは、と……

カチ、とキーを捻ると、ニュートラルランプとオイルランプが明るく点灯した。

「あとは……エンジンが掛かるかな？」

「シヨウ、大丈夫なの？」

俺は不安そうに見守る遙に微笑んでから、二、三回キックを軽く踏み降ろし、

「よし」

少しドキドキしながらチョークレバーを引いて一気にキックを踏み降ろした。

ヴォルン！ヴォロヴォロヴォロヴォロヴォロ……

「掛かった！」

呆気ないほど簡単に、かつてその加速の凄まじさによってポケットロケットと呼ばれた高性能マシンが目覚ます。

「遙、とにかくこれで行こう。崖の方って言ってたよな」

「う、うん！ヘルメット持って来るね！」

俺がRZを納屋から引き出そうとするのを見た遙が本棟へと掛けて行く。

水温計の針が少し動いた時、遙がジャケットとメットを持って玄関から出て来た。

「それにしても、中免取っておいて良かったな」

俺はジャケットとメットを身に着けながら独り言を呟く。

半年前になんとか一発試験で中免は取ったけど、金が無くて中型のバイクは買えなかったワケだが……

RZに跨り、タンデムステップを引き出して遙を乗せる。

「行くぜ、遙」「うん」

俺はそつと一速にギアを入れ、注意深くクラッチを繋いで走り出した。

パアアーン!!

「うお!」「きゃあっ!!」

門を潜って道路に出た俺は、三速にシフトアップしてぐいっとなセルを開けRZを加速させた、が

その余りの加速に俺にしがみ付いた遙のみならず、加速させた当の俺まで唸ってしまう。

「なんだこりや……こんなに速いなんて!」

「シヨウ!怖い怖い怖いようっ!!」

後ろから蹴飛ばされたかのようなRZの加速に驚愕しつつも酔いかけた俺の背中に、

悲鳴を上げながら遙がむぎゅっとなしがみ付く。

いつもなら遙の爆乳を押し付けられてデレっとなってしまう所だが、

RZの速さにそれ所ではない。

「こりや、気を付けないとホントにヤバいな」

俺はアクセルを開けると誘惑してくるRZに抗いながら、背中にしがみ付く最も大切な少女の為に

理性のブレーキを最大限にかけて減速しながら崖の方へとハンドルを向けた。

十分後、俺と遙が村人総出で大騒ぎとなっている崖下近くの海岸に着いた時、

岩場の上には俺のカタナが変わり果てた姿で引き上げられていた。

「シヨウくん！そのバイク……」

特徴的な排気音を奏でながら近付く俺達に村人達が道を開けて行くうち、

俺のカタナの側でしゃがみ込んでいた美里さんが真っ赤に泣きはらした目を向けて驚いた様に声を掛けて来る。

「美里さん、RZを勝手に使っバイクてすみません。だけど、俺達だって当事者なんだから……」

俺が美里さんに謝りながら言い掛けると、

「うっん、それは良いの。でも、あなたのバイクが酷い事になってしまって……」

美里さんが目を伏せながら申し訳無さそうに呟く。

俺はRZのエンジンを停めて遙を下ろし、スタンドを掛けてから俺も下りた。

そして、変わり果てた姿となった愛車カタナに近付き、状態を確認した。

フロントフォークは折れ曲がり、前輪がエンジンに接触してしまっていて、

ビキニカウルやガソリントank、サイドカバーなんかの外装部品がほとんど見当たらない。

マフラーからはまだ水が滴り、恐らくエンジンはたっぷりと海水を飲んでいる。

……こりゃ、ダメだな。

俺は、約一年の間、俺と遙、それに亜由美や亜里沙を乗せて様々な所に連れて行ってくれたカタナの、

想像もしなかった無残な最期に目頭が熱くなってしまう。が、それよりもだ。

「美里さん、克弥さんは無事なんですか？」

俺は哀しみと怒りをグツと飲み込み、俯く美里さんを見詰めながら聞いて見た。

「……克弥は、まだ、見付かってないの」

俺の問いに一瞬ビクン、と身を震わせた美里さんが血を吐く様な掠れた声で応える。

「え……」

遙が小さく呻き、ふら、と倒れ掛かるのを俺が支えたのを見て

「今、漁師総出で必死で探しているんだ。キミ達も気になるだろうが、ココに居られても邪魔なだけだ。

何か進展が有ったら知らせに行くから、とりあえず家に戻っていでくれ

キミのバイクは後で家に届けるから」

と孝光さんが厳しい顔でこちらを見ながら言う。

「……はい、解りました」

俺は遙を抱き上げてRZに跨らせ、美里さんに一礼してからその場を後にした。

家に帰り、美里さんに言われた様にご飯に卵を掛けて簡単に朝食を済ませる。

「シヨウ、寝てようよ」

食器を片付けていると、青い顔をした遙が半べそで言ってきたので、俺は遙を抱き締めながら布団に入った。

一体、なんでこんな事になっちまったんだ……

俺達が遊びに来たのが引き金になっちまったのか？

それとも、そんな事は関係無く起こってしまう事だったのか？

泣きながら眠り込んでしまった遙の頬を撫ぜながら自問自答を繰り返すうち、

いつの間にか俺の意識も白い闇の中へと落ち込んで行った。

「シヨウくん、遙ちゃん、起きて……」

美里さんの声にハツと目を覚ますと、そこには瞳を真つ赤にした美里さんが俺達の顔を覗き込んでいる。

「！美里さん、克弥さんは！」

ガバツと跳ね起きながら俺が尋ねると、美里さんは哀しげな顔で首を数回、ゆっくりと横に振った。

「ひ……ひ……ひ……」

少しの間の後、遙が俺の胸に顔を付け、声を殺して嗚咽し出す。

同時に、美里さんの綺麗な顔がくしゃ、と歪んで大粒の涙がポロポロと零れ出す。

その時の俺に出来る事は、遙と美里さんをぎゅっと抱き締める事くらいだった……

「克弥はね、ずっと私の事を好いていたの……そう、小学生の頃から」

一頻り泣いた後に、かなり落ち着きを取り戻した美里さんが静かに語り出した。

「私も、そんな克弥が可愛くていじらしくて、私が高校三年、克弥が中学三年の時につい受け入れてしまったの。

そして、私と克弥はお互いに溺れてしまった……でも、すぐに家人に感付かれてしまったわ。

私はその時、地元近くの街の短大に入学が決まっていたから、

克弥は無理矢理名古屋の高校へ入学させられたの。だけど、それは逆効果だったわ。

克弥にも、そして私にも……」

自嘲気味に微笑みながら、俺と遙に自分と克弥さんの事を説明する美里さん。

「二年前、家人が亡くなるのを待っていたように克弥は地元へ帰って来たわ。

そして私達の爛れた生活が始まった……。気付いたのは、孝光おじさんだけだった。

おじさんは戸惑いながらも私達の事を理解してくれ、だけどなんとか止め様と骨を折ってくれた……

徳光おじさんは私や克弥と齡が近くて、伯父とはいえお兄さんの様に慕っていたから

克弥も徳光おじさんには心を開いていたわ。

私も、なんとかこの異常な生活を終わりにしなければと思って色んな手を打ったの。

だけど、それは克弥をいたずらに刺激するだけになってしまったのね……

シヨウくん、遙ちゃん、あなた達が来たから克弥があんな事をした訳ではないわ。

それに、あれは事故なの。シヨウくんが乗ったRZ350は克弥のバイクだけど、

克弥は一年前に仕事中の事故で右足首を痛めて、RZには乗れなくなってたの。

RZの車重を支えられないのと、キックスタートが出来なくなっていたわ。

RZに乗れないなら他のバイクなんか要らない、って言いながらもRZの整備はしていた……。

もう、二度とバイクに乗れることは無い、と思いながらもね。

でも、シヨウくんの乗って来た125ccなら乗れるかも、って思ってたんですよ。

今朝、私と口論になった克弥はシヨウくんのバイクで家を飛び出して、

久し振りの、それも慣れないバイクだったからカーブを曲がり損ねて……

ごめんなさいね、シヨウくん……あなたの大切なバイクを……」

俺と遙の前で再び泣き崩れる美里さんに、俺は優しく声を掛けた。

「バイクの事なんか気にしないで下さい。それよりも、美里さんも少し休んだ方が良いですよ」

正直、カタナの事は泣きたいほど辛いし悔しいが、そんな事で嘆き悲しんでもカタナは元に戻らないし、な……

「でも……」

俺の顔を見詰めながら、美里さんが尚も謝ろうとした時

「美里ちゃん、いるかね？」

車のブレーキ音が聞こえ、間も無く玄関先から徳光さんの声が響いた。

「あ、俺が出ます」

立ち上がり掛けた美里さんを制し、俺が玄関まで出ると

「ああ、キミか。軽トラでカタナを運んで来たから確認してくれ。

一応タンクも見付かった。

「ところで、美里ちゃんはどうしたね？」

と、孝光さんが微妙に視線を外しながら俺に言う。

「美里さんは今休んだ所です。とりあえずカタナを下ろして確認させて下さい」

俺はにこやかにだが、有無を言わさぬ強い調子で徳光さんに言いながら軽トラへと向かった。

カタナの状態は完全廃車、としか言いようのないモノで、徳光さんと二人掛かりで

とりあえずなんとか納屋の中へ放り込む。

「キミ達はこのカタナで来たんだろ？どうやって帰るかね」  
気の毒そうな表情で俺に聞く徳光さんに

「……まだ何も考えていません」とだけ答える俺。

本当に、どうすっかな……電車で帰るしかないか……

俺がカタナを見詰めながら大きく溜息をついた時。

「シヨウくん、もし良ければ、克弥のバイクに、RZに乗って行って……」

納屋の入り口から響いた声に振り向くと、そこには遙に支えられた

美里さんが立っていた。

「美里ちゃん、だが……」

一瞬の沈黙の後、徳光さんが口を開きかかるが、美里さんの瞳をみて黙ってしまう。

だが俺は、美里さんの瞳をしっかりと見返しながらハッキリと言った。

「いえ、あのRZ350は克弥さんのモノです。

克弥さんが、乗れなくなっても大切に保管しておいたRZを、俺が貰う訳には行きません」

美里さんと徳光さんが驚いた様な表情を見せ、そして同時に安堵の表情へと変わる。

「そうだよ、美里ちゃん。彼の言うとおりだ。

克弥は昔から、俺が死んだらRZを墓石代わりにしてくれ、

とまで言っていたからな……」

徳光さんが独り言の様に呟くのを聞いていた美里さんの顔がくしゃ、と歪んだ。

「克弥…… 克弥……！！バカな克弥…… 可哀相な、かつ…… や……」

そして、顔を両手で覆って号泣しだした美里さんを徳光さんが抱き締める。

「シヨウ……」

小さな呟きと共に、俺の胸に飛び込んできた最愛の少女を抱き止めながら、

俺の瞳からも止め処なく涙が溢れ出してしまっていた。

翌朝五時半、突然やって来た徳光さんの軽トラに乗った俺は徳光さんの家のガレージへと連れて行かれた。

「ポンコツだが、キミにあげよう。乗って帰って要らなくなったら、売っ払うなり下取りに出すなりすれば良い」

寝惚け眼の俺は徳光さんの言葉の意味が良く解らず、「はあ」とだ

け答えてガレージの中に入った。

が、ガレージの壁際に置かれたバイクを見て一気に目が覚める。

「こ、これは！」

鈍く光る、特徴的な縦置きクランクのVツインエンジン。

750ccナチハンと見紛わんばかりの巨大なパールホワイトのボディ。

サイドカバーに光る、ヨーロッパ・ツアラーを主張する「EURO」の立体エンブレム。

「……CX - EURO！」

そこには400ccとは思えない威風堂々とした体躯を持つ400ccツアラー、

ホンダ・CX - EUROがどん、と鎮座していた。

「デカくて重いがそこそこ走るし、ツリーングにはもってこいのバイクだよ。」

車検は後一年くらい残っているからそれまで乗るもよし、乗って帰って買い換えるもよし。

ワシはもう乗らないから、キミにあげよう」

俺は白く輝くCX - EUROに近寄り、125カタナの倍ほどもありそうなタンクに手を置いて見た。

タンクから感じるひんやりとした感触に、心臓の鼓動が早くなってくるのが解る。

ヨーロッパ・ツアラーが好みの俺には、まさにストライクゾーンど真ん中のバイクだ。

「本当に、良いんですか？」

徳光さんはポンコツ、と言ったが、走行距離こそ三万キロを越えているが程度はかなり良さそうだな。

「ああ、俺ももう全然乗らなくなっちゃったしな。」

克弥が足を痛めて、一緒に走れなくなっちゃってから……」

少しだけ、哀しげな色を含ませた徳光さんが呟くのを聞きながら俺は努めて明るく振り返り、

「それじゃあ、お言葉に甘えます！名義変更は帰ったら直ぐにやり

ますね！」

と笑顔で徳光さんに礼を言った。

「ああ、任意保険もまだ有るから、名義変更が終わるまでは付けておこう。」

あと、あのカタナの処分も任せておきなさい」

俺は徳光さんのありがたい申し出を謹んで受け、巨大な白鯨ゴロに跨り、柔らかなVツインサウンドを愉しみながら遥と美里さんが待つ家へと戻った。

「それじゃあ、気を付けて。」

……また、遊びに来てね」

翌朝、喪服を着た美里さんに見守られながらEUROに荷物を括り付け、エンジンを掛けて暖気する。

俺と遥も出席しようと思ったのだが、徳光さんと美里さんに

「田舎の堅苦しい、閉鎖的な式になんか出る必要は無い。」

それよりも早く帰らないと、受験勉強出来ないだろ？」

「そうよ、それにまだツーリングで行く場所が残ってるんだから楽しんで行きなさいな。」

……今年の夏休みは、もう二度とやって来ないんだから」

と説得され、村が騒がしくなる前に発つ事になったのだ。

「おばさん、気を落とさないでね……ママにはあたしから説明しておくから」

少し涙ぐんでいる遥をぎゅっと抱き締め、「ありがとうね、遥ちゃん」と呟く美里さん。

「お世話になりました。今日から忙しくなるのにお手伝いできなくてすみません」

俺は抱き合う二人を見ながら、美里さんに声を掛ける。

「いいのよ、そんな事……シヨウくん、本当に色々ありがとう。」

余計な事かもしれないけど、遥ちゃんを大切にしておいてね」

「はい、約束します」

俺をじつと見詰め、美里さんが泣き笑いの様な表情を作る。

その時、遙が

「あ、ごめんなさい、あたし一応トイレに行っておくわね」

と言いながら母屋へと小走りに向かう。と同時に、徳光さんが

「ワシもちよつと小便してくるかな」

と言つて裏手にある外便所に向かつて姿を消した。

二人の姿が消えた後、俺がなんとなく気まずい雰囲気を感じていると、美里さんが俺を見詰めながら口を開いた。

「良いわね、遙ちゃんは……シヨウくんみたいに素敵なお氏が居て」

「あ、えくと、いやその、ありがとうございます」

俺はなんと答えて良いか迷いまくり、頓珍漢なお礼を言つてしまいかあつと赤面してしまう。

「ごめんなさい、シヨウくん……ちよつとだけ、胸を貸して」

突然、綺麗な顔をくしゃ、と歪めた美里さんがぎゅつと俺に抱き付き、小さな嗚咽を漏らし出した。

「美里さん……」

俺は何か言わなければ、と焦つてしまつが、こういう時に限つても気の利いた言葉が浮かんで来ない。

その時、突然オヤジの言葉が脳裏に閃いた。

” いか、シヨウ。女の子が泣いていたらぎゅつと抱き締めてキスをしてやれ。

そして、涙をキスで拭つてやるんだ。そうすれば、きっとその娘は笑顔になる”

……キスは無理だけど、ね。

「あ……」

俺が震える美里さんの華奢な体をぎゅつと抱き締め、綺麗な黒髪を優しく撫ぜると

美里さんが小さく、本当に小さく驚いた様に喘いだ。

そして俺は大きく見開かれた美里さんの瞳から流れている涙を、そっとキスで拭う。

「シヨウ、くん……」

もう一度ぎゅっと抱き締めると、小さく俺の名を呟きながら美里さんが俺の体に廻した手に力を込めた。

「ありがとう、シヨウくん」

そして、俺の胸に手を当ててすっと体を離し、切なげな微笑を見せてくれた。

「じゃあ、また落ち着いたら遊びにおいで。今度はワシの家でご馳走してやるう」

トイレから戻った徳光さんが微笑みながら声を掛けて来るのに、

「ええ、必ず来ますね！楽しみにしています」

と微笑み返し、EUROに跨る俺。

遥はEUROの広く快適なリアシートに感動し、ニコニコしながら美里さんと談笑している。

「それじゃあ、また来ます！」

「さよなら！また来ます！」

しっかりと俺に抱きついた遥の感触を確認してから、俺はEUROをスタートさせた。

バックミラーに手を振る二人の姿を写しながら、村道から国道へと曲がり、スピードを上げる。

柔らかなVツインサウンドを響かせながら快調に南下する途中、あの崖の上に差し掛かったので、

俺はEUROを停めて遥と一緒にひしゃげたガードレールの上から用意しておいた花束を海に投げ込んだ。

「さよなら、カッチャん……さよなら、カタナ」

小さく呟く遥の肩を抱き寄せ、俺はしばらく黙祷する。

「さあ、行こうか」「うん！」

俺と遥は再びEUROに跨り、琵琶湖を目指して走り出した。

「ねえシヨウ、本当はこのバイクよりもカッチャんのRZの方が欲しかったんじゃないの？」

しばらく国道をノンビリと走っていると、遙がメットをコツンと当てながら悪戯っぽく聞いて来たのに

「いや、俺はこのEUROの方がマツタリした走り好みだよ。

じゃじゃ馬は一人でたくさんだしな」

と何気なく答える俺。

「ふん。……ってシヨウ、じゃじゃ馬って誰のことお？」

……あ。

「いやこのそのあのどの……！！！」

「なによ！あたしがじゃじゃ馬だって言つのね！！」

「うわばか止める遙危ねって！！」

チヨークスリーパーを掛けて来る遙に必死で抵抗する俺だが、遙は離れない。

「おい遙、マジで止めろって！！」

必死の俺の叫びが通じたのか、ふっと遙の腕から力が抜ける。

「ねえシヨウ、また来れるよね……おばさんの所へ」

俺の腰に廻した手に力をこめながら小さく呟いた遙に、

「……ああ、必ず来ような」

と優しく答える。

その時には、美里さんの心からの笑顔が見られるだろうか……

「ずっと、ずっと一緒に居ようね。約束だよ……」

遙が耳元で呟くのを聞いた俺は

「もちろんだよ」とだけ答え、何故だか妙な気恥ずかしさを感じてしま

「よっし、ちよつと飛ばすぞ！」  
と叫び、心が温かなモノで満たされるのを感じながらアクセルを開  
けて穏やかに加速を始めた。

また来年も、遥と一緒に幸せな夏の日を迎えられる事を祈りながら。

さよなら、夏の日 完結編（後書き）

Ending Image Song : さよなら夏の日

Artist : 山下達郎

それすらもまた、平穏なる日々 夏休スペシャル

「さよなら、夏の日」

Presented by Syogo Hazawa

2008・Aug・28

バレ……た？

「おはよ！」

俺の部屋のドアをバン！と開けて元気な声を響かせながら、にんまりとしたアヒル口を晒した遥が入って来る。

「おはよう、早いな」

俺は苦笑しながら、ムぎゅっとしがみついてくる愛しい少女を抱き締めた。

「それにしても、おばさんも甘いよな……有難いけどさ」

俺の独り言を耳聴く捉えた遥が、

「えへへ、だってママはシヨウの事が好きだもん。」

あたしはともかく、シヨウが落ち込んでたらほっとけなくなるわよ

胸をくいっと反らしながら、なぜか偉そうに言う遥のおでこをツンと突付き、

「じゃあ、なおさら真面目に生活しないと。さ、学校行こうか」

と遥の背中を押し出すようにして玄関に向かう。と、

「なにそれ！？せつかく三十分以上早く迎えに来たのに意味ないじゃない！

だいたい、シヨウなんてまだ寝巻きのままの癖に！」

見る見る内に可愛らしい頬をぶつくりとフグの様に膨らませ、プンスカと怒り出す。

「あはは、ウソウソ。おいで、遥」

大きな胸を強調するかのように腕を組んでギン！と俺を睨んでいる遥に謝りながら手招きをすると

「バカ！シヨウなんてだいつきらい！」

と言いながらにへらっと顔を蕩けさせ、再びむぎゅつと俺に抱きついて来た。

「あゝ、もう今日の体力半分終わっちまった」  
遙を自転車の後ろに乗せ、キコキコとペダルを漕ぎながら俺がボヤくと、

「なに言ってるのよう！あたしは一回で我慢しようと思ってたのに、シヨウがあつという間に元気になっちゃうからもう一回しちやったんじゃない！」

……ハイ、スンマセン……

「それにしても、今日も良い天気だな〜！」

俺は後ろから頬をくっ付ける様にして文句を言ってくる遙から目を反らしながら誤魔化した。

校門のちよつと手前で遙を降ろし、

「じゃあ、今夜はバイトも有るし、昨夜もご飯ご馳走になりにお邪魔してるから

お前の家には行かないから。おばさんとおじさんによろしく言うておいてくれよ」

「えー……」

もの凄い不満気な顔で唇を尖らし、ブーたれようとした遙だが、

「しょうがないだろ？つて言うか、あんまり甘えすぎるとそれこそ出入り禁止になりかねないんだから我慢しろよ」

と言う俺の言葉にしぶしぶと頷く。

「……じゃあ、今キスしよう」

……ハア？おい、お前……

「お前な……いくら朝早くて廻りに他の生徒が見当たらないからって、学校の目の前でキスする訳に行くかよ」

俺が深い深い溜息をつきながら遙の肩をつかんでしみじみと言うと、  
「だって！だって、今夜はチュー出来ないんでしょ？だったら……」  
大きな瞳に涙を溢れさせる遙の顔を見てみると、心の底から愛おし

くて堪らなくなつちまうぜ……

あー、もう！ったく。

「しょうがないな、ほら」

俺はそう言い様、遥の柔らかな唇に自分のそれを重ねた。

「にゃん……」

遥は嬉しそうに鳴きながら、すいっと瞳を閉じる。

俺と遥はそのまま、しばらくお互いの唇の感触を楽しんだ。

「うーす」

「おはよー」

遥と別れ、教室に入ると何人かのクラスメイトが登校している。

「お。三バカがこんなに早く来てるなんて珍しいな」

俺はその中に、なじみの三バカの姿を見かけてからかう様に声を掛けた。

「……」

しかし、いつもなら軽口で返してくる三バカが、じろっと俺を睨んで大きく溜息をつく。

ん？なんだ？

「どうした、元氣無えな」

俺のからかう様な言葉に、

「……シヨウ、お前俺たちに何か隠してねえか？」

と、三バカを代表する様に木村が低い声で俺に言ってきた。

「は？隠し事？なんだそりゃ？」

俺はさも意外そうに聞き返す、が、木村の言葉にまるで心臓を氷の手で掴まれた様な気分になっていた。

まさか……まさか、今朝の遥とのキスシーンを見られたんじゃないだろうな？

こんな状況で、しかもあの三バカが軽口っぽくでなく、マジモードで俺にこんな事を言ってくるなんて……

それ以外考えようが無い、が……いやしかし、あの時は絶対誰も居なかつたはずだ！

内面世界インナーワールドで右往左往しながらダラダラと冷や汗を掻きつつ作り笑いを向ける俺に、

「お前がこんなに友達甲斐の無いヤツだとは思わなかつたぜ。

自分だけ、抜け掛けしやがって！」

吐き捨てるように、村木が悪意の籠った言葉を叩き付ける。

「もう、学校中の噂だぜ？お前の秘密は！」

あ……こりゃ、もう間違い無いか……？

くっ！だからヤバいつて言ったのに！

……いや、遥のせいにするのは止めよう。

俺自身が、自制出来なかつたのが悪いんだ……

「なんだ？黙ってちまつて。

言い難いなら、俺が言つてやるよ！

シヨウ、お前は……！」

木村が燃える様な目で俺を睨みながら声を上げる。

よく見ると、俺たちの廻りに登校して来たクラスの連中が何事かと集まってきたいて、

このままで木村にバラされたらどうしようも無くなっちまいそうだが……

だが俺は、俯きながら木村の言葉を待つ事しか出来なかつた……

## 潔白証明？

「おまえ……！」

木村の鋭い視線が俺に突き刺さり、俺は無意識にゴクリ、と唾を飲み込む。

くそ、とうとう……

俺の焦りを見透かした様に、木村が怒りの咆哮を上げた！

「おまえ、一昨日、西園学園生徒会長にして超お嬢様の、島津百合様のお屋敷に招かれたんだろ！」

なんて、なんてヤツだ！この裏切り者！卑怯者！！」

……は？

呆気にとられる俺を怒りの目で睨みながら、更に声を上げる木村。

「大体だな、お前が文化祭企画委員をやってる事が間違いなんだ！」

しかも、交流委員にまで選ばれやがって……どうなってるんだこの世の中はあ……！」

とてつもなく狭い範囲の世の中への燃えるような怒りに震えながら叫ぶ木村を眺めつつ、

俺は心の底からの安堵感を感じてヘナヘナと近場の椅子に座り込んだ。

良かった……遥と学校の目の前でチューしてた事がバレたんじゃなくって……

ふにゆ

「おあ？」

と、座り込んだ椅子が妙にやーらかい事に気付き、ふと振り向くと

「重いよ〜」

そこには我がクラスの男子に高い人気を誇る天然ボケ系美少女、坂巻絵里が困ったように俺の背中に顔をくっつけてじたばたしている。

「うわっ！すまん坂巻！」

バツと飛び退いた俺に

「シヨウ！貴様、坂巻にまでコナ掛けるつもりかあっ！！」

光の速さで木村&残りの二バカが詰め寄ってくるのにマジで恐怖した俺は

「ま、待て！今のは事故だ！」

と必死で後退して逃げようとした。が、

ぼによん

俺の背中に再びやーらかい感触が走り、

「今度は何だ！？」

もう半泣きの俺がバツと振り向くと、そこには腰に手を当てて微笑む岬が立っている。

「み、岬！良い所へ！こいつらに何か言っちゃってやってくれ！！」

と縋るように叫んだ俺の悲痛な叫びを聞いた岬は微笑みの色をぐっと濃くしながら、

「ねえ、シヨウくん？一昨日、私を駅に送ってくれた後、百合華様のお屋敷に招待されたってホント？」

と、夜叉もかくやと言った感じで俺の襟首をきゅっと締め始める。

げえ、岬まで敵に廻るなんて……

それにしても、百合華様、って、お前まで西園の連中みたいに様付けしてんじゃねーよ。

そんな事をふと考えているうちにも、岬の手の締め付けが厳しくなってきたがる！

「ぐえ！ま、待て岬！」

俺の顔に自分の顔をすーっと近づけながら上目遣いに睨む岬の恐ろしい微笑にビビり、

必死で事情を説明しようとする俺だったが

「私を帰した後、一人で百合華様のお屋敷に行くなんて……」

俺にしゃべらせる積りなど毛頭ないと言った風情の岬には、何を言っても聞く耳無さそうだ。

つて、ぐえええ！マジ苦しいんすけど！

「待て、聞け！誤解だ！理由が有るんだ！！」

必死で叫びながら首を振りまくり、視界の端に映る教室内の違和感に気付く俺。

「……げげ」

良く見ると、俺と岬の廻りに、俺たちのクラス以外のヤツまでが鈴生りになっていたのだ。

「シヨウのやつ、西園の生徒会長と良い仲になったらしいぜ」

「なんだって！？あの、噂に名高い女王様と？」

「シヨウくんって女なんかに興味ないみたいなの雰囲気出してたのに、意外とスケコマシなのね……」

「文化祭の交流委員の癖に、そんな事してるなんて！職権乱用なのだわ！」

「汚いぞシヨウ！俺にも西園の子を廻せえ！」

……をい、おまえら、いい加減にしるよな……

余りのアホらしさに天井を仰ぐ俺の首根っこからようやく手を離れた岬が、

「さあ、弁明が有るなら言ってみなさいよ。聞くだけは聞いてあげる」

と両手を組んで俺に詰め寄る。

ようやく解放された俺がぜえぜえと荒い息をつきながらふと野次馬

に視線を投げると、  
その中に頬をぷっくりと膨らませてブンむくれた遙の顔を見出して  
しまい、

俺は絶望の余り体中の力が抜けて行くのを感じながら床へとへたり  
込んでしまった。

「早く言いなさいよ！」

しかし、岬の高圧的な態度にさすがにムカつと来た俺はバツと立ち  
上がり、

「あの日、お前を駅に放り投げてから帰ろうとしたら、自転車がパ  
ンクしちまったんだ！」

んで、仕方なく自転車を引いて帰ろうとしたら百合華……島津委  
員長が通り掛って、

自転車の修理を手配してくれて、それを待っている間にちよつと  
お邪魔しただけだ！

どこで知ったか知らないが、俺みたいな男をあの島津委員長が相  
手にする訳無えだろうが！」

と大声で一気に捲し立てる。

「……え？そうなの？だって、鈴木君が……」

俺の言葉を聞いた岬と廻りの生徒連中がポカン、と間抜けな顔で三  
バカの一人、鈴木を振り返る。

「え……？だ、だって俺の中学時代の連れの妹が西園に通ってて、  
そいつがシヨウウが百合華委員長の家に特別ご招待されたって昨夜

騒いでたらしくて……」

鼻白んだ様に喋り出した鈴木だったが、最後の方は消え入りそうな  
調子で尻すぼみとなった。

「お前、ちゃんと連れの妹に確認したのかよ？」

島津委員長は西園学園の女王様なんだから、ちよつとした事でも  
大げさになつちまうだろうが！

事実関係も確認せずに、風説の流布をするんじゃないか！」

俺がここぞとばかりに畳み込みながらぐつと鈴木に詰め寄ると、

「……スンマセン」  
と小さくなった鈴木が小声で謝った。

「なんだよー、人騒がせな」

「そつよねー、あの島津百合華委員長がこのシヨウくんとなんて有り得ない」

「まったく、驚いて損したぜ」

野次馬連中がてんでに勝手なことをホザきながら教室から出て行く中に、

ブンむくれながら俺を睨みつつ出て行く遙の顔を見つけた俺は自分の失敗に気付いてしまった。

そつだ、遙にまだこの件を話してなかったからな。

こりゃ、後で面倒な事になるだろうな……一難去ってまた一難かよ。俺はようやく静かになった教室の自分の席に座り、大きな溜息をつきながら窓の外に視線を移した。

葛藤……？

「それでは、本日の文化祭企画委員会を終了します。

起立、礼！」

委員長の号令により、長めの委員会が終わると同時に

「シヨウ、ちよつと良いか？」

と由香里先生から声が掛かる。

「はい？なんでしょう」

俺と一緒に教室に戻る積りだったらしい岬に先に帰りなよ、と声を掛けてから

俺は由香里先生に導かれるまま職員室へと足を踏み入れた。

「実はな、亜由美の事で話が有るんだ」

「亜由美の事、ですか？」

もしかして今週末の事だろうか……？

不審げな俺の様子に気付いたらしく、由香里先生が

「ああ、週末の事とは関係無い……事も無いかもしれんが」

と、妙に歯切れの悪い感じで話を始めた。

最近、亜由美の様子がおかしいのを気にした由香里先生が

何か有ったのか、と問い質してみた所、まずはやはり俺の事が出て来たそうだ。

だが、由香里先生が気になったのはもう一つ、

かつて亜由美がまどかさんに反発して夜遊びしたりしてちよいとグシ掛かっていた時、

少々ガラの悪い不良連中と付き合い合っていた事が有ったのだが、

その時の連中が、最近付き合わなくなった亜由美にしつこく絡み始めたと言っただけ……

「なんですって？あの連中が？」

俺の脳裏に、チャラチャラとした遊び人風の男の顔が過る。

あの野郎、なんて名前だったかな……？

「ん？キミもそいつらを知ってるのか？」

俺の顔を見ながら意外そうに聞いてくる由香里先生に、

「ええ、実は……」

俺は以前その中の一人のチンピラに亡くなった家族の事を馬鹿にされたのに腹を立て、

夜の公園であわや殴り合いになりそうになったが、亜由美の必死に制止で事なきを得た事を打ち明けた。

「何イ？そんな事が有ったのか！」

俺の話聞き終わった由香里先生の表情が見る見るウチに険しくなつて来たのを見て、

俺は余計な事まで喋りすぎた事を後悔した。

「……シヨウ、キミの亡くなったオヤジさんが古流武道の師範だったのは知っているし、

君自身が空手二段、柔道二段、そして当然古流武道のかなりの遣い手だつても知ってはいる。

だが、そんな不良相手にケンカなんぞしたら勝つても碌な事にならないのだよ。

キミの気持ちは良く解るが、以後は軽はずみな行動は謹んでくれ」「……はい、すみませんでした」

じつと俺の瞳を見詰めながら厳しく叱る由香里先生の言葉に、俺は後悔しながら頂垂れてしまう。

「うむ、解つてくれれば良い、が……」

話がズレたが、その連中が亜由美の帰り道で待ち伏せまでしている事があるらしい。

だから、キミにしばらく亜由美のボディ・ガードを頼もうかと思つたんだがな。

今話を聞くと、逆に危ない事になりそうだな……」

くう……なんてこつた……あの連中、亜由美に何かしやがったらタダじゃ置かないぜ。

「シヨウ！さっきの話、理解してくれているだろうな？

キミがカツカしたらダメだろうが！」

俺の顔色が変わったのを見て、由香里先生が再び厳しい声で叱咤してくる。だが……！

「だけど、このまま放つて置く訳には行きませんよ！

亜由美は俺の大切な幼馴染です！あんな奴等に傷付けられてたまるもんか！」

俺は、由香里先生の瞳をキッと見詰め返しながら吼えた。

「む……だが、だからと言ってキミが奴等とケンカをするのを許す訳には行かない。

この件については、なにか対応策が無いか、慎重に考えてみよう」「そんな悠長な事で良いんですか？

とにかく、俺は直接亜由美に聞いてみます！」

「待て、シヨウ！」

俺は由香里先生の制止を振り切り、急いで自転車置き場に向かって走る。

そして自転車に乗ると、亜由美の家に向かって大急ぎで走り出した。

必死で自転車を漕ぎながら、俺は様々な事を考えた。

そして、最近、遥との甘い毎日に溺れすぎていた自分の情けなさを思い叫び出したい様な衝動に駆られる。

「くそっ！亜由美は、俺の事を想ってくれて、辛い想いをしてるってのに……！」

その上、あんなチンピラ連中に付き纏われて……！」

昨夜、俺の前で儂く微笑んだ亜由美の寂しげな表情が俺の脳裏を過る。

「亜由美……」

俺は自分の情けなさや亜由美への、なんと表現してよいか解らない胸を締め付けられる様な感情に身を焦がれそうになりながらひたすら自転車を漕ぎまくった。

亜由美の浸かっているバス亭を通り過ぎ、亜由美の家までの道を夕日に照らされながら走り、

亜由美の家に程近い公園の入り口を通り過ぎようとした時。

俺の視界の端に公園内に数人の人影が映った。

その中に、見覚えの有る制服を着た女の子の姿を見出した俺は急ブレーキで停止し、バツと振り返る。

「ビンゴ！」

そこには、数人の男女に囲まれて立ち尽くす亜由美の姿があった。

まだ誰も俺に気付いては居ないが、あれは間違いなくあの時夜の公園で見掛けた連中だ。

どうやら、亜由美が連中に責められている様に見える……。

俺は自転車を降り、とりあえず茂みに身を隠しながら亜由美達の近くまで静かに近付き、聞き耳を立てた。

## トラブル！

「なんとか言えよ、亜由美」

茂みから様子を伺う俺の耳に、荒い声で亜由美を責める声が飛び込んで来る。

……この声は、あの時俺に絡んできたチンピラだな。

「そうよ、最近全然付き合わなくなっちゃってさ。散々付き合ってたあげた私達にそういう態度で良いワケ？」

娘の一人も、亜由美を睨みつけながら咎める様に声を荒げる。

「……ごめん。でも、私はもう夜遊びとかしない事にしたの。」

お父さんやまどかさんに心配掛けたくないから……」

「はあ！？なんだよそりゃ！お前、そのまどかさんってのが気に入らなくて

グレてやる、って俺たちにグチってたんじゃないかよ。」

今更何勝手な事言ってるんだ！オヤジやまどかさんってのと仲直りするんのは勝手だけだよ、

だからって俺たちと付き合えなくなるなんて勝手な事言ってるんじゃないよー！」

チンピラの言葉に、哀しげに俯いてしまう亜由美。

だが、チンピラの言う事にも一理有る、な……

俺は飛び出して行きたい衝動を必死で抑えながら、この場で最善の行動は何か、と必死で考えた。

「とにかく、今日は付き合ってもらうぜ。」

前話したことのある、高梨さんがお前に会いたって言うてんだ。

高梨さんはカイザーの相談役やってる人で、逆らったらどうなるかお前も解ってるんだろ？」

俺の考えが纏まる前に、チンピラが放った言葉に驚いてしまう。  
カイザーっていや、この辺で結構有名な暴走族じゃないか。

「……でも！でも、私……」

俯いていた亜由美が顔を上げながら、涙声で何か言おうとしている。  
「うるせえ！グダグダ言ってねえで行くぞ！」

と、チンピラが痺れを切らした様に怒鳴りながら、亜由美の腕を掴んでぐい、と引っ張った。

「きゃあ！痛いよ！」

つんのめる様にしながらよろけた亜由美がバタッと転ぶ。

「おら！わざとらしく転んでんじゃねえよ！さっさと立てよ！」

パンツ！

「あうっ！」

チンピラが癪癪を起こし、へたり込んだ亜由美の頬を引っ叩くのを見た俺の中で何かが弾けた。

「貴様あ！」

バツと茂みから飛び出した俺は、まだ亜由美の腕を掴んだままのチンピラに向かって突進する！

「おわ！？」

「だ、誰だ！」

突然現れた俺に驚いたチンピラが亜由美から手を離し、俺の方へ向き直った瞬間。

「せいっ！！」

ガッ！！

「ぎゃあ！」

俺のショルダーアタックがチンピラにヒットし、数メートル程チンピラが吹き飛んでぶっ倒れる。

「シヨ、シヨウくん！！」

「亜由美、大丈夫か？」

俺は亜由美の腕を取って立たせながら、不良たちを睨み付けた。

「お前！確かあの時の……」

突然現れた俺に驚いていた不良達だったが、一人の男がハツとした様に声を上げた時、

「てめええええ！ブツ殺してやらああ！！」

俺に吹き飛ばされたチンピラが怒号を上げながら飛び掛って来た。

「シヨウくん！危ない！」

亜由美が頬に両手を当てながら叫ぶのを聞きつつ、俺は体を後ろに引きながら

チンピラの突進を交わし、勢い余ったチンピラの背中をドン！と押す。

「うわっ！？」

自分の突進の勢いを殺しきれない所に俺の軽い突きを加えられたチンピラは、

そのまま凄まじい勢いで立ち木に激突して

「くえ」

とか妙な悲鳴を上げて動かなくなった。

「ひ、秀雄！」

娘達の悲鳴と共に、気を失ったチンピラの名前を呼ぶ男の声に、俺もチンピラの名前を思い出す。

「てめえには関係無えだろ！」

一人だけ、悲鳴を上げずに俺を睨み付けた茶髪の娘の上げた怒声にあるね。俺の大切な亜由美を悲しませるヤツは許せないんだよ！

俺はダン！と脚を地面に叩きつけながら怒鳴り返した。

「シヨウ、くん……」

俺の後ろで亜由美が小さく、すこし涙を含んだ声で呟くのが聞こえたが

「あんた達、アイツをやっちまいなよ！」

と言う娘の声に応えるように三人の男が俺に向かってこようとすのに備え、呼吸を整える。

「おらあっ！」

次の瞬間、三人の男が一斉に俺に向かって飛び掛って来た。

「亜由美、下がってる！」

俺は叫び様に、真正面の男に向かって飛び掛りながら蹴りを放つ。

「げえっ！」

拳を振り上げていた所にカウンターで俺の蹴りを入れられ、男がもんどりうつて倒れるのを

確認してからその右に居る男の鳩尾に向かって自分から倒れ込む様な型で右肘を軽く打ち込む。

「ごはっ！」

狙い違わず俺の肘は男の鳩尾に突き刺さり、ゲロを吐き出しながらへたり込んだ男の後ろに回り込みながら

振り返ると、残ったもう一人は既に戦意喪失した様で、呆気に取られて立ち尽くしている。

「まだやるかい？」

俺は拳を目の高さに構えながら、立ち尽くす男と脅えた様に固まっている娘達に向かって言い放った。

「く……」

さつき、威勢良く俺に罵声を浴びせた茶髪娘が呻き、

「お、覚えてるよてめえ！カイザーの高梨さんを怒らせたらどうなるか思い知らせてやる！」

と再び罵声を張上げる。

だが、俺がそれに反応すること無く

「二度と亜由美に近付くな。もし今度亜由美に絡んだら、タダじゃ置かない」

と言いながら茶髪娘を睨み付けると

「ひ……」

と悲鳴を飲み込んだ娘がへナへナと崩れ落ちた。

少しの間を置き、もう誰も向かって来ない事を確認した俺が振り返ると、

涙を流しながら俺を見詰めている亜由美と目が合う。

「行こう、亜由美」

「うん……うん」

俺は優しく声を掛けながら震えている亜由美の肩を抱き、公園の外へと歩き出した。

嘘……

「大丈夫か、亜由美？」

俺が倒れていた自転車を起こしながら亜由美に声を掛けた瞬間、

「…………シヨウくん…………シヨウくん!!」

俺の背中にガバツと抱きついた亜由美が、声を押し殺して嗚咽し出した。

「亜由美…………」

俺はどうして良いか解らずに、しばらく亜由美の熱い涙が制服越しに染み込んで来るのを感じていたが、

「亜由美、帰ろう」

俺の腹に回された亜由美の細い腕を優しく解いて振り返りながら言った。

「…………シヨウ、くん…………」

亜由美の大きな瞳から、大粒の涙がポロポロと流れ出ている。

俺は無意識に、本当に無意識のその涙をキスで拭ってしまった。

「!あう…………」

亜由美が小さく叫び、すつと瞳を閉じ、俺の背中に手を廻してぎゅつと抱き付いてくる。

そのまま、亜由美がすつと顔をズラし、いつの間にか俺の唇は亜由美のそれに重なっていた…………

どれ位そのまま唇を重ねていただろうか、ガヤガヤと公園の出口に向って来るヤツらの気配に

我に返った俺達は、茂みの中に身を隠した。

「なによあんたら! たった一人に蹴散らされちゃって! 情け無い!」

この声は、さつき俺に罵声を投げた茶髪の娘だな…………

「そ、そんな事言ったってよ、アイツマジ強かったぜ」

「ああ、そう言えば亜由美が空手二段とか言ってたよな」

亜由美を背中に隠して、そつと様子を伺うと、亜由美を引つ叩いた秀雄ってヤツは

まだ気を失ったままだしく、男の一人が背負っている。

「なあ、高梨さんになんて言おうか……秀雄のヤツが今日、亜由美を紹介するって言っちまったんだろ？」

俺は、さつき秀雄ってヤツが言った言葉を思い出す。

高梨、つてのはこの辺りで有名な暴走族……カイザーの相談役だつて言ってたな。

「そのまま言うしか無えだろ。亜由美の彼氏に邪魔された、つてな」「そうだな、そうすれば俺たちは責められないだろ。秀雄もこの体たらくだし」

「なんにしる、もう時間無えからこのまま行こうぜ」

チンピラどもが去つたのを確認した俺は、亜由美を自転車の後ろに乗せて亜由美の家へと走り出す。

「シヨウくん……大好き」

自転車を漕ぐ俺の背中に顔を押し当てた亜由美が小さく呟くのを感じながら、俺は無心にペダルを漕いだ。

数分ほど一心不乱に自転車を漕ぎ、亜由美の家が見えてきた所でプップー！

と、後ろから来た車に突然クラクションを鳴らされ

「うおっ!!!!」

驚いて振り向くと、コロツとした可愛らしいシルエットの車がスピードを落として近付いて来る。

「こら！自転車の二人乗りはいけないんだぞ！」

コロコロした可愛らしいシルエットの、ローバーミニ・メイフェアの窓から乗り出して

微笑みながら声を掛けて来たのは、亜由美の現在のお義母かあさんである、まどかさんだった。

「まどかさん!!」

俺と亜由美が声を八もらせながら叫んだ時、

「私もいるけれどな。二人とも、何か無かったか？」

と言いながら助手席からぬっと顔を出したのは……

「由香里先生！」

亜由美や遥のクラスの担任、由香里先生だ。

「とりあえず、ウチに行きましょ」

まどかさんがウインクしながらミニ・メイフェアを加速させ、俺はその後に続いて亜由美の家へと向った。

「と、言うわけで、シヨウが飛び出して行った後に亜由美のお義母さんに連絡し、

とりあえず学校に来てもらってから私も便乗してキミ達を探してたんだ。

だが、結局見付けたのは、ついさっきになってしまったがな」

亜由美の家の応接間で、俺と亜由美が並んで座った

ソファとテーブルの前を行ったり来たりしながら

由香里先生が現在までの状況を説明してくれたが、

「で、何が有った？ 亜由美、キミの頬が腫れているのは叩かれたからだな？」

悪いようにはしないから、正直に話してくれたまえ。

とりあえず、亜由美のお父さんや遥……若宮さんのお宅には内緒にするから」

とす、とソファに座り、まどかさんが出してくれた紅茶を静かに啜った由香里先生が

優しい調子で諭すように俺と亜由美に言っってくる。

どうする、ここは正直に話した方が良いだろうか……

あの様子じゃ、またアイツらが亜由美を待ち伏せしないと限らないしな。

よし、由香里先生とまどかさんになら良いだろう！

「実は、さつき……」

俺が覚悟を決めて正直に話そうとした時。

「さつき、帰り道で中学校の頃に私に片思いしてた男の子が待ち伏せしてて、

付き合ってくれって言われたんです！私がそれを断ったら、いきなり私の事引っ叩いて……

その男子はそのまま直ぐにいなくなっただけど、私が泣いてたらシヨウくんが来てくれて、

それで私を送ってくれたんです」

亜由美がテーブルの下で俺の手をぎゅっと握りながら、俺の話を遮った。

そして、俺に哀願する様な視線を向けつつ、涙を流している。

亜由美……まどかさんに心配掛けたくないんだな……

俺が、自分はどうするべきか、迷いの中に思考回路を落とし掛けた瞬間、

「ふむ、シヨウ、そうなのか？」

と由香里先生が俺をひた、と見詰めながら誰何して来た。

くっ……

俺が由香里先生から目を逸らしそうになった時、亜由美の指が俺の指にぎゅっと絡められる。

「……はい、そうです。俺が亜由美を見つけた時には、

もう亜由美を引っ叩いたヤツはいませんでした」

俺は、迷いまくりながら、由香里先生に向かって嘘を吐いてしまった

……

嘘つき！！

眠れねえな……今日はバイトも休んじまったし……  
何より、遥とあんな大ゲンカをしちまうなんてな。  
くそっ！ダメだ！

俺は布団から起き出して、Tシャツの上に革ジャンを羽織り、Gパンを履いてDT50のキーを持つ。

「走ってくるか……」

部屋から出ると、空には煌々とした満月が浮かび、青白く街を照らしていた。

DT50を自転車置き場から引き出し、アパートから表通りまで押して行き、軽いキックを踏み下す。

パラン！パパパパ……

ヘルメットとグローブを付ける間だけ暖気してから、俺は夜の街を走り出した。

海の方へと向かいながら軽く流していると、つい数時間前の苦い記憶がフラッシュバックする。

また……また、遥を泣かせちまうなんてな。

俺は苦い記憶を頭から追い出せないまま、DT50を急加速させた。

「シヨウ！こんな時間まで何やってたのよ！」

亜由美の家の電話を借りてバイト先のバイク屋に休ませて欲しいとお願いし、

必死で自転車を漕いでアパートに帰りついた俺を待っていたのはユダダコもかくや、と言った風情で真っ赤になって玄関に仁王立ちしている遥だった。

「委員会の後、由香里先生に呼ばれて話してたんだ」

俺は、由香里先生から、とりあえず遙にはそう言っとけと言われた通りのセリフを返す。

だが、亜由美の件もあり、意識はしてなかったが不機嫌そうな返し方になってしまった様で、

「何よ、その言い方。まるであたしの事が鬱陶しいみたいなのぶり！」

遙が棘の有る返事を返す。

遙の言い方に俺もイラツと来たが

「そうか？そんな積りは無かったんだけどな。気に障ったんならすまん」

と、一応謝る。が、

「ぜんっぜん心が籠ってないんだけど？」

大きな胸の前で両手を組み、フン！と鼻を鳴らしながら言い放つ遙の機嫌は直りそうも無い。

「じゃあ、どう謝れば良いってんだよ？」

いかんとは思いつつも、荒くなってくる自分の口調を抑える事が出来ず、

俺は遙の大きな黒い瞳を睨み返しながら吐き捨てた。

「！なにそれ？ケンカ売ってんの？」

臆する事無く俺をギン！と睨み返しなからずい、と迫る遙の肩に手を掛け

「お前が勝手にケンカ腰になってんだろっが。とにかく、風呂入るから」

熱い体を横に退かしつつ俺は玄関から部屋に上がり、制服を脱ぎ始めた。

「ちよつと、まだ話は済んでないわよ。」

シヨウ、あんた今日の放課後どこに行ってたのよ！」

服を脱いでいる俺の背中、初めて聞く遙の厳しい声が響く。

「だから、さつきも言っただろ？」

委員会が終わった後、由香里先生に呼ばれて話してたんだ。

嘘だと思っんなら、明日由香里先生に聞いてみるよ」

俺は遥の厳しい調子に少々戸惑いながらも、さっきの答えを繰り返した。

「あたしの聞いているのはその後よ！」

由香里先生の話が終わった後、まっすぐ帰って来なかったでしょ！」

と、さすがに鈍い俺もようやく遥が何かに気づいている事に気付く。これは、もしかして亜由美やチンピラ連中との一件を誰かに見られて、

そいつが遥に報告でもしやがったんじゃないか……？

「なんで黙ってるのよ！なんとか言いなさいよ！」

だが、あの件は遥には内緒にする様に由香里先生、まどかさん、そして何より

亜由美本人から頼まれているし、俺も亜由美とキスをしてしまった後ろめたさも有り、

絶対に言うワケにはいかない……

俺は黙ったまま、服を全部脱いで風呂場のドアを開けた。

「そう！言いたくないならあたしが言っただけよ！」

今日、バイトサボって亜由美の家に行っただんでしょ！

亜由美の家の近所に住んでるコが、わざわざ電話して来てくれたわ。

別に亜由美の家に行くのは構わないわよ。でも、なんであたしに隠すの！？」

俺はドアを開けたまま、ピタリと固まってしまっ

ちっ！嫌な予想は当たりやがるぜ！誰だ、わざわざ電話までしやがって……！

「ああ、お前の言う通り、亜由美の家に行っただんだ。

だが、お前に隠そうとしたワケじゃない。

大体、俺が帰って来た瞬間からお前は湯気噴いて怒ってんだから、話しようもないだろ！」

俺が遙に振り返って怒鳴ると、一瞬の静寂の後

「なに言ってるのよ！最初にあたしが何してたか聞いた時、

由香里先生に呼ばれて話してた、って嘘ついたじゃない！

たしかにあたしは怒ってたけど、なんでその時嘘ついたのよ！！」

遙が凄い大声で俺に向かって怒鳴り返した。

「あのなあ！あの時俺が” 亜由美の家に行ってみました ” なんつった  
ら、

お前はどんな反応するか手に取るように解るだろうが！」

いかん、と理性がブレーキを掛けているのだが、俺は亜由美の事や暴走族の事など、

心に刺さっている心配事やストレスに負けて遙に向かって怒鳴ってしまっつ。

「……………！！なによなによなによっつ！！

そんなの嘘つくことの原因になんかならないじゃない！

今まではあたしがヒートしてたって嘘つかずに説明してくれたのに、何で今日は嘘つくの！？

なにかやましい事でも有るんでしょ！？」

でっかい瞳に涙をたっぷりと溜めながら怒鳴る遙を見て、

遙の涙を止める為に行動するべきだ、と俺の理性は判断して命令を下す。のだが、

「うるさいよ！お前がしつこく絡むから鬱陶しくてつい誤魔化しち  
まっただんだ！

あんまりキーキー喚くんじやないよ！」

実際に口を突いて出た言葉は、自分から見ても最低最悪のモノだった。

「……………！！

っ！鬱陶しいですってえ！？」

真っ赤だった顔をあつという間に真っ青にした遙が、

怒りの余りか言葉を見つげられずに口をパクパクと開閉させた後、

「もういい！もうこんなのやだ！

シヨウなんか大ツキライ！！そんなに亜由美が良いなら亜由美と付き合えばいいじゃない！

あたしの事なんかどうでも良いんで……っ！！」

ひぐ、と喉を鳴らした遙の瞳から、まさに川のように涙が溢れ出した。

「ばかあつ！！！！」

そして、玄関のドアをバーン！と勢い良く開けて裸足のまま走り出す。

「おい、遙！待てよ！！」

一瞬呆気にとられて見送った俺だったが、はっと我に返って遙の後を追おうとしたが、

「寒っ！って、俺素っ裸じゃんか！」

自分が風呂に入る寸前だった事を思い出し、ドアを閉めて室内に戻る。

「くそっ！何だってこんな事に……」

俺はとりあえず風呂に浸かりながら、数分前の自分のバカさ加減に呆れ果ててしまった……

星空……（前書き）

こんにちは、作者です。  
いつもご愛読ありがとうございます。

さて、大変申し訳ないのですが、しばらくの間、投稿と執筆が出来ない状況になってしまいました。

何とか年内には片付けて復帰したいと思っておりますが、まだなんととも言えません。

楽しみにして下さる皆様には本当に申し訳無く心苦しいのですが、出来る限り早く復帰出来る様に努力いたしますのでどうぞご容赦下さいませ。

それでは、続きをお届けできる日まで、皆様も健康にお気を付けてお過ごし下さい。

2008年12月2日 羽沢 将吾

星空……

ざっと暖まって風呂から出た俺は、服をさっさと着てから頭も乾かさずに遥の家に向う。

ピンポーン

「はい、どちら様？」

「シヨウです！」

おばさんの声に俺が名乗ると、すぐにドアがガチャ、と開いた。

「おばさん、遥が……」

俺が息を整えつつおばさんに言い掛けると

「まあ落ち着いて、シヨウくん。上がってちょうだい」と、俺を招き入れてくれたので、

「はい、お邪魔します」

俺はおばさんの後について玄関に入り、持って来た遥のサンダルを玄関に置いた。

「あら、持ってきてくれたのね、ありがとう。」

あの子、裸足で駆け込んで来てそのまま自分の部屋に上がったやつだから、

廊下も階段も砂だらけになっちゃったわよ」

くすり、と笑いながらおばさんが言った言葉に胸がズキン、と痛む。

「すみません、俺が……」

にっこりと微笑んだおばさんの顔から微妙に目を逸らしながら口を開いたが、

「俺が」の後になんと言って良いのか解らずに口籠ってしまっ。

「とりあえずお茶でも飲んで落ち着いて、ね。」

遥は帰って来てるんだから心配無いわ」

「……はい」

しかし、お茶を飲んで、その後どうするべきだろう……

おばさんにも、亜由美との事を話さない方が良いのだろうか……

由香里先生は、若宮さんのお宅にも内緒にしておけ、と言っていたよな……

「どうしたの、シヨウくん。早くおいでなさいな」

リビングの入り口からおばさんの声が掛かり、はっと我に返った俺はおばさんの後を追ってリビングに入る。と、

「シヨウ兄ちゃん、いらっしやい」

嬉しそうに微笑んだ沙里が、すつと俺の腰に抱き付いて来た。

「やあ沙里、こんばんは」「こんばんは」

俺が沙里を抱き上げると、沙里が俺のほっぺたにちゅっと軽くキスをしてくれる。

俺も沙里のつやつやした可愛らしいほっぺたにキスを返した。

「えへへ、大好き」

俺の首に手を廻してぎゅうと抱き付く沙里の暖かい体の感触が、ささくれ立った神経をスーッと楽にしてくれた気がして、一気に体が弛緩する。

「シヨウくん、コーヒーで良いかしら？」

ソファにでも座って楽にしてね」

おばさんの声に「あ、はい」と答え、俺は沙里を抱いたままソファに身を沈めた。

「香奈はもう寝ちゃってるの。パパはまだ会社よ」

俺の横にとす、と座ったおばさんが、俺の聞きたい事を先読みしたかのように教えてくれる、

「コーヒー、飲んでね。」

あら、沙里ったら甘えちゃって」

と苦笑しながら沙里の頭をこつん、と軽く叩く。

「だって、沙里はシヨウ兄ちゃんが大好きなんだもん。」

今日は香奈もハル姉も居ないから、シヨウ兄ちゃんを独り占めするの」

俺は、抱きついたらまま嬉しそうに言う沙里の頭を優しく撫でながら「ごめん、沙里。ちょっとおばさんと話があるんだけど、部屋に行つててくれないかな？」とお願ひする。

「ええ〜っ！？せつかくシヨウ兄ちゃんに抱っこして貰えると思つたのに……」

くしゃ、と可愛い顔を歪める沙里のおでこにちゅっとキスをして「ごめんね。今度、必ず埋め合わせするから」

と言うと「……うん、解つた。今度また抱っこしてね」と哀しそうに答え、沙里は俺の膝から下りてくれた。

「いい子ね、沙里。ご褒美にあなたの欲しがつた筆箱買ってあげるから」

「ほんと！わあい！！」

おばさんの声に嬉しそうに喜んだ沙里は、

「それじゃ、もう歯を磨いてお部屋行くね。おやすみなさい」ペコリ、と俺に向かって一礼してから洗面所へ向つた。

「さて、シヨウくん。

遙が泣きながら帰つて来た理由、聞かせてもらえるのかしら？」

「コーヒーをくいと飲み干し、ソーサーにカップを力チャ、と戻したおばさんが

「ついつと俺の方へ寄りながら聞いて来たのに、

「……俺の帰りが遅かつたんで、遙がカンカンに怒つてて……」

それで、俺も今日ちょっと嫌な事が有ったから、つい売り言葉に買い言葉になっちゃって……」

もぐもぐと不明瞭な言葉で、しどろもどろに説明するが……

「今日のシヨウくん、何かおかしいわね。」

いつものまっすぐなシヨウくんじゃないみたい」

ズバツと決るようなおばさんの言葉に、ぐう、と言葉が出なくなつてしまふ。

「シヨウくん、私はあなたの事を本当の息子だと思ってるわ。だから、何か心配事が有るのなら隠さずに話して。」

それとも、私の事は信じられない？息子だなんて思って欲しくないのかしら？」

「！そんな事無いよ！俺だっておばさんの事は母さんだと思ってる

……けど……」

「けど、なあに？」

じっと俺を見詰めるおばさんの大きな瞳から、すっと目を逸らしてしまふ俺。

と、ふう、と溜息をついたおばさんが

「今日は話せないみたいね……シヨウくん、今日はひとまず遙には会わずに帰って。」

二人とももうちょっと頭を冷やしてから様子を見ましよう。ね？  
と、俺の手を握りながら諭すように言う。

「……はい、解りました……」

俺はそれ以上、何も言う事が出来ずにソファから立ち上がり、玄関へと向う。

「シヨウくん、待って」

靴を履いて立ち上がり、ドアに手を掛けた時におばさんから呼び止められ

「はい？」と振り向くと、

「あ……」

おばさんが俺の体に手を廻し、俺をぎゅっつと抱き締めてくれた。

俺もおばさんも何も言わず、玄関の時計の針の音だけがコチコチと響いている。

抱き締められていたのは五分ほどだったろうか、すっと俺から離れたおばさんが

「お休み、シヨウくん」

と微笑みながら言ってくれた。

おばさんに見送られ、部屋へと帰る道で見上げた空は、満天の星空だった。

## 転倒！（前書き）

新年、明けましておめでとございます！

昨年は自分の作品をご愛読頂きまして真にありがとうございます。

大変お待たせいたして申し訳ありませんでしたが、本日から復帰いたします。

ただ、ほぼ一ヶ月間留守にしていたので、やる事や片付ける事が山積みとなっていて

中々更新は出来ないと思いますが、出来る限り頻繁な更新を心掛けて頑張りますので、

どうぞ暖かく見守って頂ければ幸いです。

また、評価／感想への返信は順次行わせて頂きますので、少々お時間をお待ち下さいませ。

それでは、本年もどうぞよろしくお願い致します！

2009年1月10日

羽沢 将吾

転倒！

「くそっ！」

先ほどまでの事を思い出し、俺は自分のバカさ加減に毒つきながらDT50を加速させる。

と、その時、突然道路に飛び出して来た猫を認め、

「うわっ!!！」

慌てて急ブレーキを掛けた！

が、次の瞬間視界が反転し、全身に強い衝撃を感じながら世界が回転する。

ガッシャーン！ギャギャギャ……！

俺の目に、火花を散らしながら道路の上を滑って行く愛車の姿が瞬だけ映り、

背中にドン！という衝撃を受けて悶絶した。

「ぐはっ！」

痛いというより、息が出来ない苦しさに悶えながら倒れたまま必死に口をパクパクさせる。

だが、呼吸が戻って来ず、意識が遠のき始め、

ヤバイ、このまま死ぬのか……？

一瞬そんな思いに囚われ、

こんなめんどくさい状況にいる位なら死んじまった方が良くもな……などと思った時。

” ショウ！このバカやろう!!！”

突然、凄まじい勢いで誰かに怒鳴られて

「か……かはっ！」

驚きの余り意識が一瞬で覚醒し、

「はっ、はっ……がはっ！げほげほっ！」

なんとか呼吸を再開する事が出来た。

「はっ、はっ……今の声は……」

一瞬だが、確かに聞こえたあの声。

あれは、親父……？

そんなまさか……な。

混乱する思考を必死で落ち着けながらガードレールにもたれる様に  
して起き上がり、

なかなか上手く行かずに荒れる呼吸を整えていると

「オイお前、大丈夫か？」

ボボボボボ、と言う集合マフラーの重低音を響かせながら

俺の前に止まったバイクのライダーが声を掛けて来た。

「げほげほっ！……は、はい、何とか……」

俺はまだフラつく頭をヘルメットの上から手で押さえながら、その  
ライダーに視線を向け、

「GPZ400F……」

ライダーの下で図太い排気音を奏でているバイクの名前を呟く。

黒いボディに赤いストライプが走り、シャープな造形の大柄なハー

フカウルを持つそのバイクは、

Kawasakiのエンブレムを誇らしげに光らせている。

「人のバイクの車種を気にする位なら、大丈夫そうだな」

全身を黒い革のツナギで固めたライダーは苦笑しながらそう言つと、  
バイクのエンジンを停めて降車してスタスタとどこかに歩いて行っ  
てしまう。

「……………？」

ようやく息が整ってきた俺が、痺れている手足の感覚を持て余しな  
がら見ていると、

ライダーは俺のDT50を引き起こしてこちらへと引いて来てくれ  
た。

「思ったより壊れてないぞ、オフロードバイクで良かったな。」

「ロードスポーツだったらヤバかったかもな」

そう言いながらライダーがDＴのキックを数回蹴ると、ビィィィン！と元気良くエンジンを始動する。

「あ、ありがとうございます」

手足の痺れが段々と痛みが変わっていくのを感じながら俺がフラフラと頭を下げると

「気にすんな。それより早く病院に行つた方が良いぞ。」

見た所高校生っぽいのが、保険はちゃんと入つてんのか？

学校にはバレない方が良いなら、警察には知らせられんから保険は使えんかもしれんが」

ライダーは俺の体をざつと確認しながらそう言う

「うん、どこも折れては無さそうだ。」

だがヘルメット越しとは言え頭も打つてるから病院には行つとけよ。

出来れば今日中にな。市立病院なら救急受けてくれるだろ」

ポン、と俺の肩を叩きながらヘルメット越しにニヤツと笑い掛けてくれた。

「っ！」

だが、俺は叩かれた肩から始まつた激痛に顔をしかめ、声にならぬ悲鳴を上げてしまふ。

「お？痛かつたか？」

「ははははは！その痛みは生きてる証拠だ！」

「じゃあな、ボウズ！」

そんな俺を見て豪快に笑いながらG P Zに跨り、キウル、ボウン！とエンジンを掛けてゆっくりとスタートさせる。

「あ、ありがとうございます！」

痛みを堪え、俺が走り出した男に向かって声を掛けると、

男は左手をぐいっとサムアップしてからコーーーン！

と抜けの良い排気音を響かせて夜の街の光の中に溶けて行つた。

激痛……

ジリジリジリジリ……

目覚ましの音が響き、起き上がるうとした俺は

「ぐわっ!？」

全身の痛みに叫びながら、再び布団に倒れ伏してしまった。

「ぬおおおおお……」

こ、これは……手も足も胴体も首も……頭以外の全身が悲鳴を上げている。

まさか、こんなに痛くなるとは、ね。

昨夜、派手に転倒した後、通り掛かりのGPZのライダーに助けられて

病院に行く様に忠告を受けたが、結局行かずに帰って来て寝てしまった。

寝る前は気も張ってたので痛い事は痛くても、

そんなに大した事はないと思っていたのだが起きて見たらこの有様だ。

やべえ、これじゃまともに起き上がる事も難しいぜ。

時計を見ると六時五十分、目を覚ましてからもう二十分も経ってやがる。

いつもなら、もうとっくに遙が来てるはずなんだがな……

やはりと言うか当然と言うか、いつもの様に元気にやっては来ない。

俺は体の痛みを忘れる位にズン、と心が沈むのを感じながら、

テーブルや壁にもたれて何とか立ち上がった。

朝飯は……今日はしょうがないな。

早く部屋を出ないと、万が一沙里や香奈が朝飯持って来てくれて

今の俺の状態を見たら、おばさんや遙に知らせてしまうかもしれないな

い。  
それで、また余計な心配を掛けちまう事だけは避けたいぜ。  
俺はそう考えて、全身を襲う痛みになんとか耐えながら支度を済ませ、  
体を引き摺るようにして自転車を漕いで走り出した。

いつもの倍近い時間を掛けながら学校へと辿り着き、へろへろになりつつ階段を登っていると

「おはようございます、シヨウ先輩」

背後から、元気一杯の愛らしい挨拶が聞こえて来た。

「やあ、おはよう亜里沙」

俺がギギイ、と軋む首を無理矢理振り向かせ、何げない風を装って挨拶を返すと

「どうしたんですか？何だか動きが変ですよ？」

と可愛らしく首を傾げた亜里沙が不思議そうに尋ねて来た。

「あ、ああ。昨日、ちよっと運動したら筋肉痛がね」

自分でもちよいと無理が有るかとは思うが、幸いにも外傷的なモノは少ない上に

冬服になっていたので手足の露出も無く、恐らくパツと見は解らないだろう。

「あまり無理しないで下さいね」

俺の言葉を信じた亜里沙は、心配そうな表情で俺に優しい声を掛けてくれた。

ヨチヨチと階段を登り切り、一年の教室に向う亜里沙と別れた俺が教室に入ると

「おはよう、シヨウくん。今日の放課後、文化祭企画委員会が有るから忘れないでね」

と岬から声が掛かったので、

「ああ、解った。今日は西園に行く必要は無いよな？」

と別に他意も無く聞くと

「……………今度行くのは来週ね。島津委員長に会いたいからって、そんなに焦らないですよ」

ジトつとした目付きで俺を睨んだ岬が、しょうもない文句を言ってきた。

「おい、お前なあ……………」

「何よ」

一瞬、ムツとした俺は何か言い返してやろうかと思ったが、ここで何か言おうと岬がムキになりそうな予感がしたので

「……………何でも無えよ」

と口を噤む。

「言いたい事が有ったら言えば？」

俺が黙つたのを見て、逆に面食らった様に食い下がって来た岬に向つて

「何でも無いって。俺は寝るよ」

と返した俺は、全身のズキズキとした痛みを堪えて机に突っ伏した。  
キーンコーンカーンコーン……………

「さー、メシだメシだ！」

「誰か購買行って来いよ！」

「五十円貸してくで〜！」

午前中の授業を乗り切りようやく昼休みを迎えたが、俺の全身の痛みは酷くなる一方だ。

「くそ……………朝抜きだからなんか喰わんと」

本当なら動くのも勘弁な状況だが、さすがに腹の虫がグーグーと不満の声を上げている。

痛みを必死で堪えつつ、なんとか椅子から立ち上がった時、

「シヨウくん！」

教室の出口から、聞き覚えの有る澄んだ声で呼ばれて振り向くと、そこには大きな包みを抱えた亜由美が微笑みながら立っていたので

「亜由美か、どうした？」

俺は出来るだけ自然に振舞いながら、ヨチヨチと亜由美の元へと歩いて行った。

「どうしたの？なんだか歩き方がヘンだけど」

数メートルの距離を十秒以上掛けて歩いた俺に向かって、心配そうな声を掛けて来る亜由美に

「あ？いや、ちょっと昨夜トレーニングしたら筋肉痛になっちゃってますな」

と、亜里沙にしたのとほぼ同じ言い訳をする。

「大丈夫？無理、しないでね」

心配そうな瞳で、俺をじっと見詰める亜由美に手首を掴まれた俺は「心配しんなよ。で、どうした？」

昨夜の亜由美とのキスを思い出してドキドキと早くなる鼓動を感じ、少しぶっきら棒に尋ねた。

「うん、シヨウくん、お昼はどうするの？」

教室の中から、こちらに向って微妙な視線が注がれているのに気付いた亜由美が声を潜めて聞いて来たのに

「これから買いに行こうかと思ってるけど」  
と答えると、

「じゃあ、私と一緒に食べようよ。シヨウくんの分も作ってきたの」  
ぱあっと嬉しそうに微笑んだ亜由美が、俺の手首を引っ張って歩き出す……って！

「痛ってええ……亜由美、もうちょっとゆっくり頼む」

俺は激痛に絶叫しかかって、ダーツと涙を流しつつ亜由美に懇願した。

「ご、ごめんなさい……でも、そんなに酷いの？」

「ああ、ちよいと気合い入れ過ぎてな……」

俺の痛がり様に驚いて謝りながら尋ねてくる亜由美に苦笑を向け、ヨチヨチと歩き出した俺の目の端に、さーっと小走りに掛けて行く良く見覚えの有るシルエツトが映り、「！遙……」と思わず呟く。

「え？なあに？」

俺は、袋の様な物を抱いて走り去って行く最愛の少女の後姿を見送り、

「……なんでも無い、よ。行こうか」

砂を噛むようなもどかしく苦い思いと、胸を刺す激しい痛みを感じながら亜由美に笑顔を向けた。

病院……？

「はい、シヨウくん。たくさん食べてね！」

人影もまばらな屋上の隅で、輝く様な笑顔で嬉しそうに亜由美が開いた包みから現れた

二つのタッパーウェアには、これでもかと言う程の量の色取り取りなおかずが溢れている。

「ごはんはね、おにぎりなんだけど、いいかな……？」

なぜかちよつと心配そうな声で俺に尋ねる亜由美に

「ああ、もちろん！おにぎりは大好きだよ」

と笑顔で応えると、

「良かったあ！もし、私が握ったおにぎりなんかじゃイヤ、って言われたらどうしようかと思ってたの」

ふくよかな胸を押さえながら安心した様に亜由美が呟いた。

「何言ってるんだよ、お前が握ってくれたおにぎりを俺が嫌がるワケ無いだろ？」

俺は、妙な事を心配するもんだと思いながらいただきます、と声を上げ、

綺麗な三角形に整えられたおにぎりを掴んでぱくつき始めた。

「うん、美味い！やっぱ亜由美は料理上手いよな」

朝飯を抜いていたせいもあり、とことん腹が減っていた俺が、おにぎりもおかずもバクバクとガツつきつつ亜由美に言くと

「ホント！嬉しいな。私、シヨウくんの為にお弁当作るのがとっても楽しいの。」

……ね、もし良かったら、明日も作って来ても良い？」

と頬を赤く染めながら亜由美が遠慮がちに聞いて来た。

俺は反射的に「ああ、もちろ……」とまで言い掛かったが、

瞬間、脳裏に遙の泣き顔が閃いてむぐ、と喉におにぎりを詰まらせ

てしまう。

「……っ！むぐ、ぐほっ！！」

そのまま、物凄い勢いで咽始めた俺に

「きゃ！シヨウくん大丈夫！？」

驚き慌てた亜由美が、水筒を取り出して麦茶を注いで渡してくれた。

「げほがはっ！ぐはっ！

んぐんぐんぐんぐん……ぷはっ！ああ、苦しかった……

ゴメンな、亜由美、ありが」

俺はまだ正常には戻らない呼吸でゼハヒ八言いながら、亜由美に礼を言おうとしたが

咽た勢いで、転倒で傷めた箇所が激烈な痛みを訴えだした！

「っ！？ぬおおおおお！」

特に、派手に転んでヘルメットを地面に叩き付けた時に捻ったらしい首筋が、

まるで千切れでもしそうな勢いでイヤな感じに痛むのに堪らなくなり、

「くっくくく……」

妙な声で呻きながら四つん這いになって突っ伏してしまった。

「シヨ、シヨウくんどうしたの！？」

俺の背中に手を当てた亜由美がオロオロと声を掛けて来るが、あまりの痛みに返事も出来ない。

と、カーッと熱くなった頭を押さえようとした瞬間、ふっと意識が遠くなるのを感じる。

「シヨウくん！シヨウくん！！シヨウク……」

そして、俺の事を必死で呼ぶ亜由美の声が段々聞こえなくなり、俺の意識は漆黒の闇へと落ちて行っった。

……ん？あれ、ここはどこだ？俺は何してるんだ……？

あれ？あそこに居るのは遙、か？泣いてる、のか？

” ショウウのバカ……”

え？どうしたんだよ、遙。俺がバカだって？

” ショウウなんて、大っ嫌い。バカ、バカあ……”

遙……ごめん、俺が愛してるのはお前だけだよ。  
お前を一番愛してるんだ！

” バカ、バカ、バカ……うそつき……”

なんでだ……さつきから、遙のところへ行こうと必死で走ってるのに、全然近付けないじゃないか！

遙！遙！！泣かないでくれ！俺はお前だけを……愛して……愛してる……んだ……

「う……」

くそ、頭が割れる様に痛え……

「 ショウウ！」

ん？遙……か……？

俺の擦れる視界に、真っ赤に泣き腫らした瞳の遙が映る。

なんか呼吸がし難いな……鼻になんか入ってる感じだ……

「 ひゃ、ひゃうか……」

あれ？遙、って言うおうと思っただのに声がまともに出ねえ。なんだこりゃ？

俺が右手を動かして鼻の辺りを触ると、なにやらチューブの様なモノがテープで固定されている。

って、右手が痛え？……ありゃ、なんか刺さってる、な。こりゃ、

点滴か？

「ダメよ、動いちゃ！ちよつとガマンして」

と、俺に向かつて厳しい声を上げた遙が、枕元に向つて突然叫び出した。

「今、シヨウの意識が戻りました！先生！シヨウの……」

……え？何なんだ？一体何が、どうなつてんだよ？

ようやくまともに視界が定まって来て、俺の目に映つたのは見知らぬ天井。

……いや、どこかで見た事が有る様な気もする、けど……

俺はひたすら混乱する思考を必死で落ち着かせながら、現在の状況を確認しようと頭を巡らせた。

「……と言つワケで、病院（ユウ）に運ばれたのよ」

俺の意識が戻つてから二時間後、医師の診断も終わって一息ついてから、遙が状況を掻い摘んで説明してくれた。

時間は午前二時、部屋の明かりも落とされているが月が出ているのでそう不自由はしない。

だけど、俺のベッドサイドで窓に背を向けて座つた遙の表情は逆光になつていて良く見えなかった。

「なるほど……それにしても、それから三日も経つてるとはね」

俺が屋上でぶつ倒れた時、亜由美はパニック状態でどうして良いか解らずに泣き叫んでいたらしい。

そこに、偶然？やつて来た遙が保健室に走り、へたに動かさない方が良くと判断した先生によつて

救急車が呼ばれ、俺は病院へと搬送された、と言ふ事らしいのだが

……

「もう、大変だったんだから。亜由美は半狂乱になつちやつてるし、

あたしも……あたしも、倒れたまま動かずに、泡噴いてるシヨウを見た時には……

本当に、心臓が止まるかと、思っちゃ……」

俺に向かって説教する様に言い掛けた遥の声が途中から涙声に変わり、

そのまますん、すんと鼻を嚙って泣き出してしまった。

「ごめんな、心配掛けて……」

両手で顔を覆って泣き出した遥の膝に手を起き、俺が謝ると

「バカ……シヨウのばかぁ……」

遥ががば、と俺の首筋に掻き付きながらひくん、と声を押し殺して泣きじゃくり始める。

俺は、遥の小さな頭を優しく撫でてやりながら、心の底から暖かいモノが溢れてくるのを感じた。

## 決意（前書き）

こんにちは、作者です。

長らく更新をお待たせしてしまい、申し訳有りませんでした。

出来る限り頻繁な更新を心掛けたのですが、まだ生活上のドタバタが片付かずご迷惑をお掛けしております。

どうか暖かく見守って下さいます様お願い致します。

さて、皆様にお知らせです。

昨年度開催されました「春エロス2008」への自分の参加作品、

「アンダーエイジ・シスター」の続編

「アンダーエイジ・シスターIEI フラクタル・マインド」

を中篇作品として連載開始致しました。

この作品は、本年度も春エロス企画が開催されたら投稿しようと考えていた作品ですが、ご一読頂ければ幸いです。

URLは、

<http://ncode.syosetu.com/n9636g/>

となります。

それでは、これからもどうぞよろしくお願い致します。

2009/5/26

羽沢 将吾

## 決意

「ごめんな、遥……」

俺は、泣きじやくる遥の髪を撫せてやりながら心の底から詫びる。

あの時、いくら疲れて気が立ってたとはいえ、こんなに俺の事を想ってくれる最愛の遥に何て酷い態度を取っちゃったんだ……

俺は自分の器の小ささに唇を噛みながら、ひたすら遥の髪を撫ぜ続けた。

「んつく、ひつく……ごめんね、怪我してるのに。」

あのね、シヨウ、あたし……あたしね、考えたの。

このままじゃ、あたしはシヨウを悩ませて負担を掛けるばかりになっちゃっつ。

それに、こんなあたし、あたしらしくなくて、自分で自分が嫌いになりそう……」

「え……？」

少し落ち着いてきた遥が、抱きついていて俺から離れながら掠れた声で発した言葉を聞いた俺は、

急速に広がる嫌な胸騒ぎを感じて視線を遥の愛らしい顔に張り付かせる。

「あのね、あのね……あたしはシヨウが大好きだけど……」

でもね、シヨウの事ばかり考えて、シヨウといつも一緒に居たくて、

シヨウがあたし以外の娘と一緒に居たりすると胸が苦しくて、泣きたくなっちゃって……

香奈や沙里に八つ当たりしたり、部活の後輩にキツくあたっちゃったり……」

遥の大きな瞳から、ボロボロと涙が零れ落ちるのを、俺はどうする事も出来ずに見詰めている。

ちがうんだ！遥、そうじゃない！  
俺が悪いんだ。お前が一番大切なのに、嫌われたくないとか、良い顔をしていたいとか、  
そんな損得勘定みたいなもので動いてお前を悲しませている俺が全部悪いんだよ！

最愛の少女が零す涙を止めようと俺の思考回路が様々な文章を羅列する、が、

肝心の口が、舌が全く動かず言葉として発することが出来ない。

これでは、このままでは遥の口から最終的に紡ぎ出されるのは……

「シヨウ、ひぐ、もう、こんなの、イヤだよ……」

こんなあたしも、こんな関係ももうヤあ……」

遥の顔が涙でグシャグシャになっっている。

あの涙を、遥の悲しみと苦しみを止めなきゃ！

「遥、遥……」

だが、俺の口は最愛の少女の名前を二度発したただけで、それ以上の言葉が出て来ない！

なんでだ、なんでなんだ！！

くそっ！どうしたんだ俺！なんで口が動かないんだ！！

「遥！あのな、俺は」

よし、なんとか言葉を絞り出せる、が……

そのまま遥を慰め、謝ろうとした俺だったが、俺の口からはやはりそれ以上の言葉が出て来ない。

少しだけ、俺の言葉を待つ雰囲気を感じさせた遥だったが、俺の口から言葉が

出てこないのを確認した後、ぶわ、と大粒の涙を更に溢れさせながら

「別れ……よ……」

と呟き掛けて、

「っ……ふ、ふええええん……」

真っ赤に泣き腫らした顔を両手で覆って、すすり泣き出してしまっ

た。

「ひいーん……えーん……」

まるで小さな子供の様に、肩を落として泣き続ける遙を呆然と見詰めた。俺の中で爆発的な感情が渦巻く。

誰だ……誰だ！俺の命よりも大切な遙をこんな風に泣かせているのは！

俺の精神が、今までに感じた事の無いほどの怒りを噴出させつつ軌む、が……

これは、この光景は、俺自身が招いた結果なんだ。

ぶっ倒れて病院に運ばれる前、俺は一体何をしていた？

遙とケンカした直後だったのに、呑気に亜由美の弁当を食わせてもらってたじゃないか！

週末には、亜由美にハッキリと俺と遙は付き合っていると言う積りだったのに……

亜由美が作って来てくれた弁当が勿体無いとか、そんなのは言い訳だ！

俺が、俺自身が……

俺は泣きじゃくる遙を見詰めながら、何一つ言葉を発せられずに呆然としている。

今、俺が何を言っても説得力も何も無い事だけは自覚できているから……

だが、このまま遙を泣かせておいて良いワケはない。

俺は、瞳を閉じて少し考えた後、遙の肩にそつと手を置きながら慎重に言葉を絞り出した。

「遙、お前をこんなに苦しめて……悲しませちまってすまない。

今、俺はお前を抱き締めて、心の底から謝りたい。

そしてこれからはお前以外の誰ともイチャついたりしないって誓いたい。

でも、そんなの説得力ゼロだよな……俺の今までの行動をみてれば。

だけど、一つだけ約束する。退院したら全てにケリをつける。

それから、もう一度お前に謝って、誓うよ。

お前だけを愛する、ってな……だから今は抱き締めない。キスもしない。

だから、もう一度チャンスをくれ。頼む……」

途中から声が擦れ、涙と鼻水がポロポロと溢れて来ているのを感じたが拭うこともせず、俺は遥に向かって言い切った。

遥の華奢な体をぎゅっと抱き締め、零れている涙を拭い、愛らしい唇に口付けをしたいと言う

身を焦がすほどの熱い想いもすべて封じ込め、ただ淡々と、遥の肩に置いた掌にその思いを込めた。

「……うん」

と、遥の肩に置いた俺の手に、柔らかく暖かい手を重ねながら、遥が小さく呟いてくれる。

「……待ってて、くれ」

俯いたまま、何も言わずに頷く遥を確認した俺は、天井を見上げてから静かに瞼を閉じた。

明日から始めるべき、様々な事に思いを巡らせながら……

## 尋問（前書き）

こんにちは、作者です。

大変お待たせしてしまいました。更新再開させて頂きます。  
まだ短期的で迅速な更新を行う事は難しいと思いますが、出来るだけ頻繁に更新出来る様に努力して行きます。  
頂いた評価や感想への返信もまだ残っておりますが、少しずつお返しして行きますのでお時間を頂ければと思います。

それでは、どうぞお楽しみ下さい！

2009・9・3 羽沢 将吾

## 尋問

「さて、と……シヨウ、今回の件なんだが」

俺のベッドの横の椅子に腰掛け、いつもとは違う真面目な顔で由香里先生が口を開く。

「ちょっと前に同じ様な事をした様な気が……デジャヴを感じるが、まあそれは置いて、だ」

そう言えば、亜由美のオヤジさんにマグライトで殴られて入院してから

そんなに月日が経ってるワケじゃ無いのに、またしても同じ様な状態で病院に運ばれたんだよな、俺は。

「今回もキミは結構な重傷だ。」

頸椎捻挫に全身打撲、脳には異常無かったとは言え、前回の挫傷から間もない状態だから

ヤバイと言えばヤバかったんだが……学校の屋上でぶっ倒れる前に一体何をしでかしたんだ？

医者が驚いていたぞ。制服を脱がしてみたら全身青アザに傷まみれだったとな」

俺は由香里先生の鋭い視線から目を逸らしながら、バイクで転倒した事を正直に言うべきか迷っていた。

今現在、病室内には俺と由香里先生の他には遙のお母さんが居て、やはり厳しい目で俺を睨んでいる。

遙や亜由美は学校で授業中、俺の担任の浅井先生は文化祭手前と言う事もあり忙しく、

保険医の由香里先生に俺の事は任せているらしい。

どうするかな……そりゃ正直に言った方が良いだろうが、バイクでコケた事を学校やおばさんに知られると

ヘタすれば免許を取り上げられてバイクに乗れなくなる可能性も有

る。

そうなるとバイトにも影響が出るし、なによりもバイクに乗れない生活なんて考えられない。

よし、仕方ない！

「実は、ちよつとケンカをしまして……ポコポコにやられちゃったんですよ」

俺は咄嗟に脳裏に浮かんだ言い訳を深く考えずに口に出した。

「何だつて？一体どこの誰と？」

と、途端に厳しさを増した表情の由香里先生がぐい、と俺に詰め寄って声を上げる。

「い、いえ、どこの誰かは解らないんですが、ちよつと因縁を付けられまして」

予想以上に厳しい由香里先生の態度に少々ビビりながら、しどろもどろに返すと

「まさか、ウチの生徒じゃあるまいな？」

すうつと瞳を細めた由香里先生が俺の肩に手を掛けながら聞いて来た。

「い、いいえ！絶対に違います！」

由香里先生の迫力に飲まれながら、首をぶんぶかと振る俺……つて！「いつてえ！……くくく」

傷めた首を思いつきり振ってしまい、イヤな感じの痛み之苦鳴を上げて突つ伏すと

「バカモノ！自分で自分を傷め付けるんじゃない！」

俺の頭をぐい、と掴んだ由香里先生の叫びが鼓膜を打った。  
ふにゆ

「ひゃ、ひゃい……つて」

今のやーらかい感触は……？

ギリギリとした首の痛みがようやく収まって来て、強く閉じた目を開けるとなにやら薄暗い。

それに、なんだか良い匂いと気持ち良い柔らかさに頭が包まれてい

るんだが……

「あれ……？」

俺が状況を掴めずに間抜け声を上げると同時に、やーらかな感触から頭が解放され

「全く……もう少し落ち着きたまえよ、キミは」

優しげな声と共に、由香里先生の心配そうな顔が現れた。

もしかして、今のふにゆふにゆしたやーらかい感触は……？

「む、その顔なら大丈夫だな？では尋問を再開しよう」

俺の顔を見た由香里先生が一瞬苦笑し、すぐに先ほどと同じ真面目な表情になる。

もしかして俺、今物凄くだらしない顔してたんじゃないのか……？  
思わず赤面する俺に向かい、由香里先生が再び厳しい声で質問を始めた。

「シヨウ、キミはさっきケンカをしてボコボコにされた、と言ったな？

それにはおかしい点が幾つかある。ひとつはキミの怪我の様子だ。

ボコボコにされたにしては、顔がキレイ過ぎる。

例えキミが上手く避けたにしろ、体の怪我の酷さに比して顔に全く怪我が無いってのはおかしいだろう」

うぐっ！！

さすが由香里先生、鋭いぜ……。

だけど、これは万が一怪我を誰かに知られた時の為に言い訳を考えてある。

「あ、ああそれはですね、自分がバイクから降りてすぐに因縁付けられたので、

ヘルメットを被ったままだったんですよ。突然だったから脱ぐヒ

マも無かったし、

被ってる方がダメージも少ないだろうと思ひまして」

俺の額に流れる冷や汗をタオルで拭いつつ、微妙に視線をずらして答える俺。

「ふむ……あと、怪我の状況がケンカや殴り合いで付くモノとは違っているようだ……」

殴り合いで擦過傷が付くとは思えんのだがね？」

はうっ！！

ぐ、ぐぐ……これは、なんと答えるべきか……擦過傷、擦過傷……

そっだ！

「え、えーとですね、喧嘩した所が堤防で、殴られた拍子に土手から転がり落ちたんですよ！」

コンクリートの土手だったから、そこで結構派手に滑っちまって

……」

俺は、小学生の頃に遙達と土手で遊んでいて転がり落ちた時にあちこち擦り剥いたのを思い出して咄嗟に取り繕った。

うん、別におかしくは無い……よな？

転んで壊れたDTはバイト先に置かせてもらってあるし、バレるワケは無い……ハズだ。

「……なにやらムリが有る様な気もするが、まあ良い。

そのケンカの相手とやらの事は覚えてるか？キミの言う事が本当なら、これは傷害事件だ。」

警察に届ける事も考慮しなければならんな」

「はあっ!？」

け、警察うっ!?!?ジョーダンじゃない!

流星に焦った俺が絶句すると同時に、

「先生、ちよつと宜しいですか？」

と、おばさん……遥のお母さんが壁から体を離して、こちらに近寄りながら声を上げた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9270c/>

---

それすらもまた、平穏なる日々

2010年10月13日13時50分発行